

蒼空の魔導書 カーニバル・クロノファンタズマ

蒼空の魔導書

目次

カーニバルの始まり！	1
カルタ団体戦！初陣の蒼空主人公ズ!!（前編）	9
カルタ団体戦！初陣の蒼空主人公ズ!!（後編）	17
Sky Blue Grandprix【前編】 ※ゲスト有り	26
Sky Blue Grandprix【中編】 ※ゲスト有り	39
Sky Blue Grandprix【後編】 ※ゲスト有り	50
2017年大晦日【クイズ蒼空の魔導書の記述 あんなくごとこ んなくごとこ あったくでSHOU】年末スペシャル！	65
風雲聖王のゆりかご城【城攻編】 ※ゲスト有り	85
風雲聖王のゆりかご城【進撃編】 ※ゲスト有り	102
風雲聖王のゆりかご城【制圧編】前編 ※ゲスト有り	116
風雲聖王のゆりかご城【制圧編】後編 ※ゲスト有り	130

カーニバルの始まり!

ここは謎の閉鎖空間、見渡す限り蒼い光が空間を照らしているだけの殺風景の空間に三組のグループが何所からか転移されて来たのだった。

ルーク「おいつ!何所だよ此処はっ!」

カナタ「さーな・・・魔甲蟲の体内じゃね?」

クロエ「いや、わたし達小隊室で次のランキング戦に向けてのミーティングをしていたんだし、それは有り得ないと思うんだけど・・・」

ロイド「それはわかりませんよ、もしかしたら狙った獲物を直接胃袋に転移させる事のできる新型の変異種(キメラ)かもしれないし」
ギドルト「そんな事ができる魔甲蟲が存在していたらもうとつくに人類は滅ぼされていると思うのですけど・・・」

一組目は《空戦魔導士》と呼ばれる空の守護者達が活躍する世界で最強の小隊を目指して空を飛び続ける五人の候補生の少女少女達――《ルーク・スカイウィンド》《カナタ・エイジ》《クロエ・セヴェニー》《ロイド・オールウィン》《ギドルト・ストラトス》――学園浮遊都市《ミストガン》に所属する《E128小隊》の隊員達とマネージャーだ。

幸斗「おおっ!超広れえっ!ヤッホオオーっ!!」

涼花「やめなさいお馬鹿!子供みたいなマネして恥ずかしいっただありはしないわ・・・」

重勝「まあこんだけ広けりや叫んでみたい気持ちも判るけどな・・・でも何所だ此処?傭兵時代にも行った記憶がねーなあ・・・」

二組目は《伐刀者(ブレイザー)》と呼ばれる異能の使い手達が活躍する世界にある《魔導騎士》養成学校の一つ《破軍学園》に在学する元傭兵の三人の少女少女達――《真田幸斗(さなだ ゆきと)》《佐野涼花(さの りょうか)》《風間重勝(かざま しげかつ)》――立ち塞がる運命を覆す為に日々戦い続けている戦士達だ。

出雲那「何だよ此処・・・まさかあの化物達が居る空間に引き込まれたのか!?!」

明日香「・・・いや、たぶん武内君が思っているような場所じゃないと思うわ〔異界の反応はしなかったけれど、この空間が普通じゃないって事ぐらいは素人でも判るわ。視たところ何かの怪異の気配は感じないし空気中に害は無さそうだけど・・・〕」

一輝「それにしても不思議な空間だね、目を凝らして遠くを見ても蒼い光しか見えないや」

ステラ「他の世界から来た人達も居るみたいよ・・・あの三人が着ている学生服なかなかセンス良いわね、今着ているセーラー服も嫌いじゃないけれど・・・あの制服を見ているとなんか妙な気分になるわ・・・」

善吉「で？これからどうするんだよ？俺はこんな所で一生を終えるなんて絶対に嫌だぜ」

マイ「私も嫌・・・かな？」

リイン「何で疑問形なんだよ・・・」

アリサ「マイ、気をしっかり持ちなさい、突然訳の解らない空間に放り込まれて頭が混乱するのは解るけど・・・」

そして最後の三組目は様々な強力な能力者達がそのチカラを振るう群雄割拠の世界にある未来の戦士を育成する《戦島都市スクエア》内にある《青竜（せいりゆう）学園》に通う八人の少年少女達——
《武内出雲那（たけうち いずな）》《柊明日香（ひいらぎ あすか）》《黒鉄一輝（くろがね いつき）》《ステラ・ヴァーミリオン》《人吉善吉（ひとよし ぜんきち）》《マイ・ナツメ》《リイン・シュバルツァー》《アリサ・ラインフォルト》——世界の未来を担うであろう若き戦士達だ。

どのグループも突然謎の光に包まれてこの場に転移してしまったので一同は動揺のあまりしばらくオロオロしていたが、とりあえず自己紹介を済ませ（ルーク達は重勝がカナタに似ている事に笑い、幸斗達は異世界の一輝とステラに少し驚いていた）、これからどうするかを考える事にしたのだった。

幸斗「とりあえずオレの龍殺剣（ドラゴンスレイヤー）でこの辺り一帯を吹き飛ばしてみるか？地面の下に何かあるかもしれねえし」

ルーク「その龍殺剣つつうのが何だか知らねえけど、それ賛成！俺も竜巻杭打（パイルトルネード）を派手にぶちかましてやるぜ!!」

出雲那「アホだろお前ら!?もし地下に街とかが在ったら崩落して埋まっちゃうだろうが!!・・・とにかく手分けして其処ら辺を探索しようぜ。ここで屯つても仕方ねえ」

??「その必要は無い!」

明日香「っ!?誰っ!!」

一同は唐突に呼び掛けて来た声に警戒し、声の聴こえて来た方に視線を向ける。

クロエ「なっ!何あれ!」

マイ「あれは・・・魔導書?」

一同が向けた視線の先には蒼いブックカバーに覆われた一冊の魔導書が浮いていた。

カナタ「人間の姿は見えねーな・・・ひよつとして、あの魔導書が俺達に声をかけて来たのか?」

重勝「んなアホな、メルヘンやファンタジーじゃねーんだし・・・」

??「そんなアホな事があるんだよねえ」

善吉「マジで喋つりやがったぞあの蒼い魔導書!!」

??「イカにも!!自分が《蒼空の魔導書》だっ!!」

ステラ「ちよつと何!?あの本いきなり光りだしたわよ!」

喋り出したうえに突如眩い光を放ちはじめた魔導書に一同は警戒心を剥き出しにしてそれぞれ自分の得物を手に持ち臨戦態勢に入った。すると魔導書はなにやら封を解く解号(ワード)らしき言葉を言い放ち出す。

??「第六六六拘束機関解放!次元干渉虚数方陣展開!!」

解号に合わせて魔導書が開き出す。

??「見せてやるよ!これが真正正銘の・・・【蒼空の魔導書】だっ!!」

そして魔導書は完全に開かれた。

??「コードH・Y、蒼空の魔導書(ブレイブルー)——起動っ!!!」

ルーク「くっ!」

幸斗「うおっ?まぶしっ!!」

解号を言い終わると同時に魔導書が放つ光が一気に溢れ出し、それがこの空間内を包み込んだ。

やがて光が収まると、なんと魔導書が消えて無くなっていて、代わりに腕にシルバーアクセサリーを巻いている蒼髪の青年が宙に浮いていた。

蒼空「ようこそ、戦いに明け暮れる厨二病達！自分は「蒼空の魔導書」の化身だ。まあ、気軽に《蒼空》とでも呼んでくれ！そして君達をこの場に強制転移させて呼び出したのは他でもない！この自分…だ？」

ウザッたい笑みで名乗る蒼空の身体は突如「黒いリング」に縛られて、宙に拘束された。

重勝「隙だらけだったから簡単に重力の拘束具（グラビティバインド）に掛けられたな・・・」

ルーク「テメエが俺達をこの変な空間に転移させた迷惑野郎か!!」
幸斗「ブツ飛ばしてやるっ!!」

出雲那「貴重な休校を台無しにしてくれやがって・・・おい、決闘（デュエル）しろよー！」

蒼空「み、皆さん？な、何でそんなにピキピキして一斉に自分に大技をブチかまそうとしているのですか？なんでカナタ君とクロエちゃんは突然原作の年齢に成長しているんでしょうか？あとステラさん？君はまだ竜神憑依（ドラゴンスピリット）は修得していない設定だった筈なんですけど!?!ちよつと皆さん——」

ルーク「問答無用じゃああああああつ!!」

魔蹴術戦技——竜巻杭打（パイルトルネード）

カナタ「じゃあなオツサン、あの世でも元気だな！」

魔砲剣戦技——光翼ノ帝剣（アストラル・ブレイカー）

クロエ「うふふつ、たつぷりと頭を冷やしてね、あの世で」

魔砲杖戦技——極光殲滅砲（スターダスト・ストリーム）

ロイド「やれやれ、少々キツイ攻城剣撃陣（バテリング・ソード）ですけれど、恨むならノコノコと僕達の前に姿を現した自分の浅はかさを恨んで下さいね」

魔劍戦技——紅突一刃（ヴォーパル・ストライク）

幸斗「吹っ飛べ！龍殺劍（ドラゴンスレイヤー）アアアアアアアアアアアアッ!!!」

涼花「アンタがブラッドエッジごっこをしている間に鉄の剣山を仕掛けておいたわ、串刺しになりなさい」

重勝「んじゃ、あばよオツサン・・・これが俺の全力全開！光翼ノ帝劍（アストラル・ブレイカー）ツ!!」

出雲那「刀華さん直伝！雷切イイーッ!!」

明日香「第一、第二、第三拘束術式解放・・・終焉の魔劍——コールドリアポクリファ!!」

一輝「・・・終の秘劍——追影」

ステラ「よくもイッキとのデートを邪魔してくれたわね！蒸発しろっ!!蒼天を穿て、煉獄の焰！天壤焼き焦がす竜王の焰（カルサリテイオ・サラマンドラ）アアアアアアッ!!」

善吉「さっさと元の世界に帰しやがれええええええっ!!（渾身の蹴り）」

マイ「これが私のおつき！朱臨、緋蓮蒼朔耶っ!!」

リイン「無明を切り裂く閃火の一刀・・・終ノ太刀——暁!!」

アリサ「シヨッピングの時間を返しなさいよっ!!大いなる輝きよ、我が弓に宿れ！レイエンスアーク!!」

少年少女達の怒りの極大火力攻撃が宙に拘束されて無防備状態の蒼空に一斉に放たれた。

蒼空「うえええええっ!!超オーバーキル過ぎでしょこれええええええええええっ!!」

直後、爆心地点から半径千数キロメートルに及ぶドーム状の超極大爆発が巻き起こった。新星爆発とも見紛うその規模は某管理局の三大エースすらもドン引きするレベルであり、直撃を受けた蒼空の生存は絶望的かと思われる・・・が——

????「マタカテナカッタ・・・」

一輝「・・・出雲那君・・・あそこで倒れて目を回している女の人の・・・」

怒りとウザさのあまりに主人公ズはシャウトと共に魔力弾、剣圧閃光、星墜としを舌出しウイंकをする蒼空に向けてブチかます。再び爆煙が巻き起こり、それが晴れると爆心地点に白眼を向いて倒れていたのは――

静矢「――」

涼花「あれはウチの世界の《桐原静矢（きりはら しずや）》ね：これ以上は止しておきなさい、どうせまた誰かを転移させて身代わりにするだけだから無駄よ」

蒼空「まったく、自分の本体（作者）が設定したオリ主達から総攻撃をされるとは、バトル中心の作品とはいえちよつと血気盛んにし過ぎたかなあ」

重勝「後ろに居たよコイツ・・・んで？何で息抜きしたいんだ？」
蒼空「いやね、自分の本体（作者）が書く作品ってバトルばかりじゃん？・・・いや日常やラブコメよりバトルの方が好きで得意だからいいんだけど、流石にバトル構成ばかり考えていると疲れてきちゃうんだよ、精神的に」

ギドルト「メタいのです「だから手抜きで台本形式なのです（汗）」・・・じゃあ番外編でも作れば良いじゃないですか？何で新作出して君の本体（作者）が書いている作品の主要キャラを纏めて集めたのです？」

蒼空「やつぱりさあ、どうせなら皆で集まって色々ワイワイとやりたいじゃん？他作者様ともコラボがしやすいし・・・とにかく偶には皆で盛大にやりたいじゃあああああああああああんつ!!!」

夕陽に向かってシャウトする蒼空（此処には蒼い光しか無いが・・・）、一同は呆れるあまり沈黙し、暫く間を置いてから仕方がないなどと警戒を解いた。

ルーク「・・・まったく、しようがねえな、本編に影響が無えなら息抜きに付き合っただけよ」

幸斗「そうだな。それになんとか色々面白そうだし♪」

出雲那「んで？具体的に何やるんだ？」

蒼空「それは色々なんでもさ♪実はこのクソ広い空間は自分の本体（作者）が好き勝手に事象を具現化させる事のできるご都合空間でさ、様々な遊び道具やアトラクションを出現させる事ができるんだ！だから毎回毎回君達の世界や他作者様の作品（もちろん他作者様に許可をいただいてから）の住民をこの場に呼び出してソレ等でハチャメチャに楽しんでもらおうって訳♪」

一輝「うん、把握したよ」

カナタ「それじゃあさ、最初は何をやるんだ？」

蒼空「そ☆れ☆は・・・次回までに考えておくねっ♪」

一同「「「「ズコーーーーーーッ!!」「「「「」」」」」」

一同は盛大にズッコケた・・・。

蒼空「それじゃあ皆！楽しい時を過ごしてくれ♪自分の役目はこれで終わりだから自分はもう出ないけれど、君達がこの空間で楽しんで戦いの疲れを癒してくれたなら自分は・・・満足だ!!」

某満足同盟のリーダー風にそう言っただけで蒼空はこの場から姿を消して行った。

何はともあれ次元を超えた楽しいカーニバルが今、始まる。

色々とは言ったが、果たして蒼空の魔導書はルーク達に何をやらせるつもりなのだろうか？

カルタ団体戦！初陣の蒼空主人公ズ!!（前編）

蒼空の魔導書に導かれ、集結した三つの世界の戦士達。

彼等はこの謎の空間で蒼空が用意する様々な事に挑戦する事を余儀なくされたのだった。

そして彼等が行うべき最初の挑戦は――

『明日への札（カード）を掴み取れ！カルタ団体戦!!』

善吉「カ・・・カルタだあああああっ!?!」

目の前に出現した空間モニターに表示された競技名を見て声を荒げる善吉を余所に辺り一帯の風景が映像作品の場面転換のように一瞬にして切り替わった。

クロエ「あれ?・・・わたし達、一体いつの間に何処かの建物の中に移動したの?」

その空間は古風な屋敷の一室のようであり、床は畳張りである。大勢の人間が入っても広々としている大広間でその中央スペースには無数のカルタの札が散らばっていた。

重勝「成程な、これが蒼空が言っていた具現化ってやつか・・・」
カナタ「既に協議の準備はできているみてーだな・・・ところどころでさ、

【カルタ】って何だ?」

明日香「そうか、住んでいる場所や世界が違うから知らない人も居るのね・・・【カルタ】って言うのは――」

――少女説明中（手抜き描写ゴメンツ!）――

ロイド「成程、大体ルールは解りました」

アリサ「でも聞いた限りだとこの競技って個人種目じゃない?」

明日香「ええ、そうね・・・この【団体戦】ってどういう事なのか

しら？」

？「そのリユウは俺達が説明するぞ！」

ルーク「っ!?誰だっ!!」

幸斗「アレ?このリユウ付けの口癖って・・・」

広間の奥の襖が開き、三人の男女が入室して来た。

破軍学園の制服を着たアホ毛が立った黒髪の少年、何処かで見覚えがあるピンクブロンドポニーテールの巨乳の女性、ミストガン空戦魔導士科(ガーディアン)本科生の制服を身に纏った茶髪を後ろで一纏めにした温厚そうな少年・・・彼等は――

重勝「なっ、烈?お前何でこんな所に?」

出雲那「シグナム先輩!?アンタ前回で死んだんじゃ・・・」

ロイド「これは意外な人が出て来ましたね・・・まさかオリバー先輩まで此処に呼ばれていたとは・・・」

破軍学園校内序列第三位《空間土竜(ディメンショナルモール)》《如月烈(きさらぎ れつ)》、前回蒼空の身代わりにここに居る一同の新星爆発級一斉攻撃を受けて悲惨な目にあつた【流離の烈火の将】八神シグナム、学園浮遊都市ミストガン空戦魔導士科本科一年生《C140小隊》隊長《オリバー・ヒューイック》――なんと三人共この場に居る一同の三つの世界の人間であり、しかも全員彼等の知り合いであつたのだつた。

シグナム「フツ、武内、貴様に勝つまで私は死なん。地獄の底から這い上がって来てやったぞ、さあ私と戦え、武内出雲那っ!」

オリバー「カルタでだけどね・・・」

烈「まっ!簡単に言うとお前達はお前達の最初の対戦者として呼び出されたってリユウだ」

オリバー「そういう訳でカルタ団体戦のルールを説明するよ。ルールは簡単、三人一組でチームを組み、ローテーション方式の対一で指定された札を取り合う。取った札はチーム共有とし、全部の札を取り終えた時に持っている札の枚数が多いチームの勝利だよ」

シグナム「ローテーションの順序は一枚札を取る毎に次の奴と交代して行き、取れなかった場合は交代せずにそのまま次の相手と札を取

り合う」

烈「御手付きした場合はその時に指定された札はその時点で相手の持ち札となり、御手付きしたプレイヤーもその場で交代、ペナルティーとしてそのプレイヤーはチームのローテーションが二巡するまで参加する事を禁止されるってリユウだ」

涼花「本当に手抜きの進行ね、彼等と対戦する事に誰も疑問を言わないで進めるなんて」

重勝「まつ、おかげでスムーズに事が進むけどな♪グダグダ停滞するのもイライラするだろーし」

烈「それじゃあ俺達に挑む三人を決めてくれってリユウだ」

そう言われてルーク達は円状に集まってひそひそと相談する。そして結果は――

ルーク「決まったぜ！俺達が相手になってやるよ!!」

幸斗「一番最初はやっぱり主人公が出るのが筋ってもんだろ。へへっ

！戦闘とはまた違った感覚だけど、何だかワクワクするな！」

出雲那「おう！やってやろうぜ!!」

主人公ズに決まった。

一輝「審判と指定の札の読み上げは僕がやるね。それじゃあ一番手の人、前へ！」

シグナム「先陣は私が務めよう・・・さあ、誰が相手だ？やはり武内、貴様か？」

無数の札の前に正座し、取りやすいように両手を畳に着いて前めりになるシグナム。その際に彼女の持つ大きな実りが下方に垂れ下がって揺れ、周囲の目を惹き付けた。

リイン「目のやり場に困るな・・・」

ロイド「風紀が乱れていますね」

涼花「【おっぱい魔人】なんて呼ばれていそうね」

本人は無自覚だが、ある意味強烈な威嚇であった。シグナムの豊満な果実一同は様々な感情（半数以上は失礼極まりない事を考えている）を抱いているのだが・・・生憎目の前に居る主人公ズは年中戦闘の事ばかり考えている馬鹿者共の為、その対男最終兵器では威嚇にす

らならない(汗)。

出雲那「・・・ああ、お望みなら——」

幸斗「待った！一番手は元西風の特攻隊員だったオレが出るぜ！」

出雲那「よし、任せた」

こうして主人公ズチームの一番手は幸斗に決まった。

ルーク「アツサリ譲ったな・・・あの女テメエのライバルじゃねえのかよ？」

出雲那「アイツが一方的にオレをライバル視しているだけだ。毎日のようにしつこく決闘を挑んで来るもんだから正直鬱陶しくて堪らないし、おかげでアイツと決闘をやった回数は五百戦に達しちまったな」

ルーク「因みにどっちが勝ち越してんだ？」

出雲那「オレの全勝」

ルーク「E35(雑魚)小隊の約百倍負けてんのかよ・・・そりやあ悔しいだろ・・・」

ルークと出雲那がひそひそ話をしている中、幸斗は床に散らばる札の前に座ってシグナムと向かい合い、好戦的な不敵な笑みを彼女に向けていた。

幸斗「よろしくな、騎士のネエチャン！そしてオレが勝つ!!」

シグナム「フツ、威勢の良い少年だ。視たところお前も相当な修羅場を潜った歴戦の戦士のようだが、ベルカの騎士に一对一の勝負を挑むのはお前では役不足だ。それをこれから教えてやろう」

出雲那「一对一の勝負において負完全級の負け癖持ちが何をほざいてんだか・・・」

幸斗「へっ！いいぜ、それが運命だって言うんなら——その運命を覆してやるっ!!」

幸斗の決めゼリフが決まったところでカルタ団体戦、蒼空主人公ズチームVSネタキャラチーム(仮)の火蓋が切って落とされた。

一輝「それじゃあ一つ目の札を読み上げるよ・・・【天光満つる所に我はあり、黄泉の門開く所に汝あり、出でよ神の——】」

幸斗&シグナム「そこだあああああつ!!」

二人の手は「帯を振り回して天高く手を掲げている天才少女がマントを羽織った全身黒タイツの男に巨大な雷を落としている絵札」目掛けて勢いよく振り下ろされる。

シグナム「勝った！若干私の方が速い!!」

幸斗「うおおおおおおおとおおお!!」

シグナムの手が指定の札を捉えようとした時、彼女の手の甲に幸斗の手が接触する。そして――

シグナム「っ!!?うわああああああああっ!!!」

シグナムの身体はロケットのように横に見える壁に吹っ飛び、その壁をブチ破ってそのまま外の和風な塀に正面衝突――

シグナム「マタカテナカタタ・・・」

塀からムツチリとした尻を突き出すような格好で上半身が壁にめり込み、シグナムは昇天した。(笑)

オリバー「シグナムさんが死んだ!」

烈「この人でなし!」

明日香「何このデジャヴ・・・」

アリサ「気にしない方がいいわよ明日香・・・それにしても手が接触しただけで相手が吹っ飛ぶなんて、とんでもないバカデカラね:」

この場に居る幸斗とは違う世界から来た者達は、振り下ろした手同士が接触しただけでも相手を身体ごと吹っ飛ばす幸斗の圧倒的な膂力に目を丸くして驚いている・・・まあ知らない者が驚くのも無理は無い、幸斗はパラメーターが攻撃力に全振りされていて、紙防御力で魔力量最低値なのに攻撃力EX(測定不能)という頭がおかしいとか言い様がない超攻撃特化ステータスなのだから。

一輝「え、八神さんが競技続行不可能な状態になったので、今回指定した札は真田君の取得となります。よって蒼空主人公ズチームは団体戦のルールに則って二番手の人に交代。ネタキャラチーム(仮)も繰り上がりで二番手の人に交代してください」

出雲那「次こそオレが出るぜ、構わないだろ?」

ルーク「まあ、いいぜ。三人いる中の二番手って格好付かない感じがするしな」

オリバー「ハハハ・・・それじゃあ君の相手は僕が務めさせてもらうね」

次は出雲那VSオリバーとなった。

一輝「読み上げます・・・【エターナル・フォース・ブリザード！相手は死ぬ!!】」

出雲那「ハイイツ!!」

オリバー「あっ!」

目を凝らしてオリバーが探している最中に出雲那が指定の札を奪取する。またしても蒼空主人公ズチームに一枚入った。

オリバー「ハハ・・・凄い速いね、あっという間に取られてしまった・・・」

烈「ドンマイ、次取り返せばいいってリユウだ」

そして蒼空主人公ズチームから三番手のルークが出て、オリバーと向き合う。

ルーク「ようやく俺の出番か・・・へへっ！オリバー先輩、手加減無しで頼むぜ!!」

オリバー「ハハハ・・・お手柔らかに頼むよ」

一輝「それじゃあいくよ・・・【闇の炎に抱かれて消えろ!!】」

明日香「何なの、このカルタ・・・」

オリバー「えくと・・・あつた、これだ!」

オリバーは指定の札を見つけてそれに手を伸ばそうとする・・・しかし――

ルーク「もらったあああつ!!」

オリバー「しまっ!?!」

もたもたしている間にルークに取られてしまった・・・。

オリバー「ハハハ、いや〜まいったまいった。一瞬の隙を突かれちゃったよ」

烈「次だ次、切り替えて行けってリユウだ」

そしてオリバーは順番が一巡して出て来た幸斗と向き合う。

一輝「【ブチ殺すぞ人間（ヒューマン）!】」
ステラ「イツキツ!?!」

幸斗「よつと！」

そしてオリバーは全く動く事ができずに幸斗に札を取られてしまった。これで彼は三連敗だ、マイペースな烈も流石に額を右掌で押さえて溜息を吐く。

烈「・・・しつかりしてくれ」

オリバー「ハハ・・・いや、まいったまいった！みんな凄いな、反射神経が良く鍛えられているよ」

烈「わかったってリユウだから！頼むぞオリバー・・・」

オリバー「ハハ・・・できるだけベストを尽くすよ・・・」

そう言っただけ危機感無さそうにオリバーは再び出雲那と対峙する。そのやり取りを見た重勝はおかしいと訝し気に眉を顰めた。

重勝「・・・なあカナタ？（ひそひそ）」

カナタ「ん？」

重勝「オリバーつつたか？アイツ貪臭い感じが目立っているけれど、烈やシグナムと比べるとなんだかキャラが弱く感じないか？」

確かに三人揃って「ネタキャラチーム」だなんて失礼な名が付けられているのに、普通に常識人っぽいオリバーがその一人に数えられているのは妙だと思う。しかし——

カナタ「・・・まつ、そう思うのが普通だよな。でもな重勝、あの先輩は——」

????「あつ、いたいた、小隊長！」

オリバーが位置に着こうとした時に突然部屋の奥の襖が開き、濃い茶色の長い髪を白いリボンでツインテールにしたミストガンの空戦魔導士科予科生の少女——C140小隊の《ミレーユ・グレイス》が腕に巨大な長方形の刀身を持つ魔大剣を抱えて入室して来た。

クロエ「ミレーユ!?あなたも来ていたの？」

ミレーユ「クロエ達も此処に居たんだ・・・小隊長が自分の魔装錬金武装を置いたままどこかへと消えて、それで探していたらいつの間にか此処に居たの・・・小隊長、どこかに行くなら一声かけてからにしてください」

オリバー「ごめん、心配かけちゃったね」

ミレーユ「まったくですよ。小隊長がしつかりしてくれないとあの馬鹿に示しがつかないんですからね・・・はいこれ、忘れ物ですよ」
そう言ってミレーユは腕に抱えているオリバーの魔装錬金武装――
――魔大剣《ワイルドカード》の柄を差し出し、オリバーはそれを手
に取ろうとする。

E128 小隊一同 「「「あ・・・」」」

オリバーが差し出された魔大剣の柄を握った瞬間、ルーク達が間の
抜けた声を洩らす、すると――

幸斗「っ!!？」

出雲那「な、何だよコレ!?!急に空気が重k――なあっ!!?!」

オリバー(?)「テメエ等・・・よくも散々好き勝手やってくれたなあ、
オイツ!!」

魔大剣を手にしたオリバーは雰囲気は別人の様にガラツと変わっ
ていた・・・後編に続く!

カルタ団体戦！初陣の蒼空主人公ズ！！（後編）

前回のあらすじ——カルタ団体戦で如月烈、八神シグナム、オリバー・ヒューイツク等【ネタキャラチーム（仮）】と勝負をする事となったルーク達。

ネタキャラチームに相對するはルーク、幸斗、出雲那の我らが【蒼空主人公ズ】！初っ端から幸斗が一番手で出て来たシグナムを瞬殺（笑）し、二番手のオリバーからも札を連取してネタキャラチームを圧倒、このまま蒼空主人公ズの圧勝かと思われたその時、突然来訪したオリバーの部下ミレーユがオリバーに魔大剣ワイルドカードを手渡した事で——

オリバー（？）「さあ、とつとと続きをおっぱじめろぞ！逆襲の時間だ・・・さつきと札を読み上げやがれ!!このモヤシ野郎っ!!」

一輝「〔モ、モヤシ野郎って僕の事?〕は、はい・・・それじゃあ両者位置に着いてください」

鬼神が降臨してしまった・・・出雲那の目の前には魔大剣ワイルドカードを左手に床に巨大な刀身を突き刺し、片膝を着いて野獣の様なオーラを発する男が威嚇するように出雲那をその猛獣の様な目線で睨みつけている。

出雲那「おつかねええ!!マジ別人じゃん!!金色の鬨気を出して髪が逆立つとか超ヤサイ人かっつての!!」

身体中から脂汗を流してビビる出雲那、まるで蛇に睨まれた蛙・・・否、ライオンの前に居るチワワである。

善吉「マジかよ、魔導星防軍（エトワール）のエース・オブ・エースの集束魔法を前にしても一歩も引かなかったあの出雲那がビビッてやがる・・・」

アリサ「い・・・いったい何なのよあの人?いきなり現れたツインテールの女の子が渡した某神喰いに出てきそうな形の大剣を持った瞬間にヤクザの御頭のような強面の男に変身しちゃったわよ?さつきまであんなに優しそうな人だったのに・・・」

カナタ「ん?言わなかったか?オリバー先輩は普段は温厚な人格だ

けど、魔装錬金武装を持つと狂暴な人格になるっていう、二重人格者だって」

重勝「一言も言ってるねーだろそんな事、テキトーな事言ってるのを引つ掻き回すんじゃないよ」

涼花「どの口が言っているのよ・・・」

鬼神モードと化したオリバーに戦慄して戸惑う外野、審判役の一輝も鬼神オリバーが発する重圧に脚が竦んでしまっているが、競技を続行する為に勇気を振り絞って次の読み札を手に取った。

一輝「そ、それじゃあ読み上げます・・・すうくつ・・・【響け！終焉の笛、ラグナロク】っ!!」

キラリッ！読み上げられた瞬間、鬼神の眼（まなこ）が【魔法少女のコスプレをして黒い翼を背中に付けている子ダヌキっぽい少女】の札を捉える、そして――

鬼神オリバー「もらった！くたばれっ!!」

振り上げた拳を振り下ろして、子ダヌキをグシャリと潰し、周囲に散らばる札が拳圧で宙を舞った・・・。

一同「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

あまりにバイオレンスな鬼神の取り方に絶句する一同、圧倒的な変貌を遂げたオリバーを前にもはや有象無象共は縮こまるしかない。鬼神の手に拾い上げられた潰れた札に描かれている子ダヌキっぽい少女がシクシクと泣いている様にも見えて哀感がハンパない・・・。

烈「・・・さてと、これでようやく俺の出番ってリユウか・・・よしっ！一丁気合いを入れt――」

鬼神オリバー「なにをグダグダとやってやがる！とつとと位置に着きやがれ、このデコスケ野郎っ!!」

烈「痛っつ!?!」

烈の許へと戻って来たオリバーが罵声と共に烈の尻を理不尽に蹴り飛ばした、あまりの痛みで烈は尻を両手で押さえて前に飛び撥ねてしまう・・・。

烈「な・・・何すんだってリユウだ!?!いきなり――」

鬼神オリバー「うるせえ、後が突つかえてんだよっ!!チンタラして

んじゃねえっ!!早く行けっ!!」

烈「ぐはっ!?分かった!分かったからケツを蹴るなっ!てりユウだ!!」

そうして烈は蹴られまくった尻を押しえながら位置に着いた、後方では鬼神オリバーが「へましたらブツ飛ばす」的な熱視線を烈の背中に向けている。

出雲那&烈「(恐ええよ(ってりユウだ)あの暴君!?!眼とプレツシャーがハンパじゃねえしよ!!)」

鬼神の視線に晒されて猛烈にビビる二人、その心境はもはやライオンの周囲を飛ぶ子バエであった。

烈「こ・・・これはもうどんな手を使ってでも札を取るしかねえっ!てりユウだ!でないと俺の命は無い!!」

一輝「では次の札を・・・」【うっ!?また疼き出した・・・し、沈まれ!俺の右腕!!!」

ステラ「イツキ!?本当に何なのこのカルタ!?!」

烈「何所だ?何所にあるってりユウだ!?!」

己の命が懸かっているので必死に指定の札を探す烈――

出雲那「よしっ!見つけたぜ!!」

しかし、その奮闘虚しく出雲那が先に指定の札を発見し、烈の気も知らずに無情にもその札に手を伸ばす。

烈「なっ!?!しまった!!」

出雲那「もらったああああっ!!」

烈「させるかってリユウだっ！掘り進め、《神楽土竜（かぐらもぐら）》っ!!」

出雲那「な・・・何いつ!?札が消えた!!何所に行ったんだ!!」

出雲那が伸ばした手が指定された札に触れる寸前、烈は起死回生の策として自身の持つ鉤爪型の霊装【神楽土竜】を顕現し、それで指定の札が落ちている所の間辺りの空間をその鉤爪で抉った。するとその瞬間に出雲那の手に取られる筈だった札が消えてしまった・・・札は何処に行ったのかというところ――

烈「此処だ此処！へへっ、残念だったなってリユウだな」

烈の手の中に有ったのだった・・・。烈が伐刀者として持つ異能は霊装で抉ったモノを【削り取る】という概念干涉系の能力であり、彼は今の瞬間に自分と指定された札の間の空間を削り取って札を自分の許に瞬間移動させたのだった。これが烈の伐刀絶技の一つ、《空間切削（シュナイディング・デイメンション）》である。

幸斗「ちよつと待てよ！おいつ！霊装使うなんて反則じゃねえのか!?」

一輝「えくと・・・ルールブックには反則と載っていないから・・・いいんじゃないかな？」

ルーク「そんなテキストでいいのかよ審判!」

鬼神オリバー「ごちゃごちゃと女の腐った奴の様に言ってるじゃねえっ!!次の札を読みやがれモヤシ野郎!!」

一輝「うわっ!?この人もう位置に着いているよ!」

出雲那「ちよつ!?ちよつと待て！まだ心の準備が――」

一輝「れ・・・【Let's Party! Here We GO! Yeah!!】

善吉「いい滑舌してるな一輝!」

鬼神オリバーが発する獣の様な気当たりがあまりにも恐ろしかった為に一輝は出雲那の心情を無視して滑舌の良い読み上げを披露する・・・そしてツツコミを入れている暇は無い――

鬼神オリバー「ハハハハハッ!!一撃で仕留めてやらあっ!!」

競技を進めるべきじゃないかってリユウだな」

一輝「・・・わかったよ・・・」〔ジャスト一分だ、悪夢（ゆめ）は見れたかよ?〕「・・・」

烈「おっ?その札なら俺の目の前にあるってリユウだ!」

自分の手前に指定された札を発見した烈はこの位置ならば霊装を使う必要はないだろうと判断してそのまま札に手を伸ばそうとする・・・これでネタキャラチームが三連続で連取するのかわかると思われたが――

出雲那「すうく・・・ハアく・・・」

烈「・・・へっ?」

その刹那、出雲那が何故か正座をしたまま鉄パイプを装着した左腕を腰に据え、呼吸を整えていた・・・その鉄パイプには出雲那の異能によりバチバチと電光が迸っており、内部には強力な磁界が形成されている・・・。

烈「お・・・おい、それってまさか・・・冗談ってリユウだろ?・・・」

烈は出雲那の左腕に装着されている鉄パイプが電光で発光しているのを見て表情を青くする。何故ならば今出雲那がやろうとしているのは、あの《雷切（らいきり）》の二つ名を持つ伐刀者の伝家の宝刀を応用し、新たな技を創り出そうとしているからに他ならないからだ。

磁界による強力な斥力と鞘の滑りを利用し異次元の速度で刀身を射出する〔雷切〕と同じ要領で鉄パイプから左腕を引き抜き、何よりも速く狙った札を引手繰る・・・名付けて――

出雲那「――《雷取（らいとり）》《いいいいいいつ!!!》」

烈「うぎやあああああああつ!!!」

まさに爆雷の如く!雷速で鉄パイプから引き抜かれた出雲那の左手は烈の手前にあった札を一瞬にして搔つ攫い、同時に発生したソニックブームが出雲那の正面に座していた烈の身体を後方に吹き飛ばしたのであった。

鬼神オリバー「フンツ!」

烈「ぐぎやつ!」

善吉「これはヒデエツ！自分に激突しそうになったからって、肘で脳天から叩き落しやがったぞあの暴君!？」

涼花「・・・というか、これカルタって言えるの？わたしの眼には【札奪の合戦】としか映ってないんだけど」

重勝「姫ツチ、もう気にしねー方がいいぜ、幸斗が出た時点で普通になる訳がなかったんだからよ・・・」

ロイド「あー、あの烈って人頭の上に星を回して気絶してしまいましたね・・・」

ギドルト「これで相手のチームはオリバー先輩一人なのです。取得している札の枚数はルーク君達が五枚、オリバー先輩達が三枚・・・残りの取札も今の雷取という技の衝撃波に殆どの数が何所かに飛ばされて行ってしまつて三枚だけ・・・後一枚でもルーク君達が取ればこの勝負は決する計算になりますのです・・・」

ルーク「へっ！なら話は早え、次の札を俺が取つてケリを着けてやるぜ！」

鬼神オリバー「ガキが、凶に乗るんじゃねえぞ！逆にオレ様が残り三枚をいただいてテメエ等に引導を渡してやるよおっ!!」

ルークとオリバー、両雄が三枚の札を挟んで睨み合う、今こそ雌雄を決する時！

一輝「それじゃあ・・・読み上げるよ」

ルーク「ああ、いつでもいいぜ！」

鬼神オリバー「とつとと読み上げろモヤシ野郎！」

一輝「では・・・I am the bone of my sword. (身体は剣で出来ている) ——」

指定の札が読み上げられ始めた瞬間、ひりつく様な緊張感が空気を支配する。

一輝「——Steel is my body, and flame is my blood. (血潮は鉄で、心は硝子) Unknown to Death. Nor known to Life. (ただの一度も敗走は無く、ただの一度も理解されない) ——」

嵐の前の静けさのように沈黙が支配しているこの空気の中で、相対

する二頭の獅子は目の前に散らばる三枚の札を獲物を狙うかの様に睨みつける。

一輝「Have withstood pain to create many weapons. (彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う) Yet, those hands will never hold anything. (故に、その生涯に意味は無く)

そして二頭の獅子が狙いを付けたのは……【無数の剣が刺さった丘に立つ、赤い外套を身に纏った男】が描かれた札——

一輝「So as I pray, UNLIMITED BLA

DE WORKS (その体は、きつと剣で出来ていた)!!」

そう読み上げ終えた瞬間、二頭の獅子は同時に手を伸ばした。

ルーク&オリバー「もらった!!うおおおおお!!」

二人の手の向かう先は当然【赤い外套の男】の札! 大気を揺るがす咆哮と共に勢いよく繰り出された腕は突風を纏い、札に接触する直前でそれが小規模の上昇気流を発生させて、先程の雷取の衝撃波の影響で空いた天井の穴から札を上空へと吹き飛ばした。

一同「何でそうなるんだよオオオオオオオオオオッ!!」

ルーク「逃がすかよ! 空戦魔導士なめんじゃねえっ!!」

ルークとオリバーは飛行魔術を発動させて上空に舞い上がった札の後を追う。

鬼神オリバー「ハッ! やつぱり空戦魔導士同士(オレ様達)のケン

カは空に限るってこったな!!」

ルーク「当然だぜ!俺達のバトルフィールドはこのデツケエ大空なんだからよ!この空でケリを着けてやるよ!オリバー先輩っ!!」

鬼神オリバー「おもしれえっ!掛かって来やがれ、この身の程知らずのクソガキ風情がああああっ!!」

そして二人は飛ばされて行った札を放置してドンパチと空戦をやりはじめたのであった……。

カナタ「……で?これどう收拾を付けるつもりなんだよ?」

重勝「さーな、もう引き分けでいいんじゃないやね?どうせこれ遊びだしな……」

クロエ「そんないい加減に終わらせていいのかな……」

アリサ「いいのいいの、こんなグダグダを続けるくらいならサツサと次に移った方が読者の為でしょうし」

リイン「メタいぞアリサ……」

涼花「まったく、これじゃあ先が思いやられるわね」

一輝「あはは……」

轟音が轟き、竜巻が大気を吹き飛ばす空の下で一同は盛大に溜息を吐く……こんな調子でこの作品、果たしてこれから先やっけて行けるのであろうか?不安に思いながらカルタ団体戦は幕を閉じるのであった……。

Sky Blue Grandprix【前編】 ※ ゲスト有り

市街の上を走るハイウェイ、蛇のように曲がりくねった峠道（ダウンヒル）、森の中に敷かれたオフロード、そして未来を導くサーキット（リ〇ク召喚では無い）：：それ等の道が繋がるコースにて六組のカーレーサー達が激しいデッドヒートを繰り広げる!!題して!!

『Sky Blue Grandprix』

??? 『遂いいにやつて来ましたあつ!カーニバル・クロノファンタズマ初のゲストを招いて行われる至上の音速バトルは此処、蒼空特設コースからお送りしますっ!解説はこの方っ!!』

霞 『戦島都市スクエア、青竜学園生徒会庶務の《千種霞（ちぐさかすみ）》です』

??? 『うわー、棒読みでやる気無しだよこの人・・・そしてそしてっ!実況はこの私、破軍学園新聞部の《日下部加々美（くさかべかみ）》がお送りします!（キラツ☆）』

霞 『あれ?君って蒼空の作品に出てたっけ?』

加々美 『壁新聞!【運命を覆す伐刀者】のあとがきで真田君達の記事を載せているの私だから!!・・・くっそー蒼空め!いい加減私を本編に出しなさいよ!!』

だっってお前出したら話が長引くんどもん・・・。（by蒼空）

加々美 『さーて、それではスタートを控えた選手の様子を見てみましょう』

具現化された大勢のスタッフ達が慌ただしく整備をするスタートゲートの近くでは六人の男女が談笑をしており、その内の四人は蒼空作品では見ない顔だ・・・そう、この四人こそ、他作者様の作品から招かれた、今回この作品初のゲストであった。

??? 「ダニイイツ!!幸斗は出ないってどういう事だよ!?!」

《落第騎士の英雄譚》運命を覆し最強を目指す戦士達《の主人公

《天崎翔（あまさきしょう）》が驚愕と共に目の前に立って苦笑する

重勝と相変わらず不機嫌そうな顔をしている涼花に問い詰めている。

重勝「はは、すまんシヨウ、幸斗は今回別件で居ねーんだ。だからこのレースには俺と姫ツチが出る事になっている」

涼花「幸斗と勝負をしたかったみたいだけど、わたし達が相手をしてあげるからそれで我慢しなさい。……まつ、どっちにしても幸斗に車の運転なんて無理だから、あのお馬鹿が出ない事には変わりないわよ」

二人が幸斗不在の理由を話すとシヨウのヒロインである《エリシア・ヴェルモンド》が二人に尋ねる。

エリシア「別件って、真田さんはいったい今何をしているのでしょうか？」

重勝「ん？言っただけだったか？アイツは今、ルークと出雲那を連れてスペースシャトルで月に居るぜ。なんでも【悪の秘密結社の月面基地をブツ壊す】ってアトラクションをやっているらしいな」

シヨウ「オイイイツ!!そっちの方が面白そうじゃねえかよ!?俺もそれやりたかったぜ!なあ?」

シヨウは隣に居る《落第騎士の英雄譚》世界最強の剣士の弟子《の主人公》《宮坂爛》(みやさか らん)《とそのヒロイン》《葛城六花》(かづらぎ りつか)《に同意を求める。

爛「まあ、確かにそっちも面白そうだが、俺達が招待されたのはこのレースだ。せっかくだしレースを楽しまないか?」

六花「爛の言う通りだよ。爛と二人きりで車に乗ってドライブ……くっつ!今日は僕が爛を独り占めで、邪魔する女共(リリー達)はいない!もう最高っ!!」

エリシア「あはは……「そういえば私も今日はシヨウさんと二人きりだ……ふええ!急に恥ずかしくなってきたよ!?どうしよう!」

シヨウ「はあく、まあ仕方ねえか……ところでよ、俺達がレースで乗るマシンは何処にあるんだ?」

六人がきよろきよろと周囲を見回すと、スタートゲート前のグリッド前でレースクイーンの格好をしているステラと明日香とマイの三人がパラソルを持って立っていた。三人の中央に陣取っているステ

ラの腕には上から無数の棒が顔を出している大きめの箱が抱えられている。

加々美『各選手が使用するマシンは厳選なくじ引きで決定されまああすつ!』

爛「なんかどこかで見たな、この展開・・・」

加々美『さあ、それでは今回レースに参加する選手達を紹介しましょう!!まずは【空戦魔導士候補生の情熱】枠の【カナタ・エイジ】&【クロエ・セヴェニー】の原作幼馴染ペア!二人が引いたのは!?!』
『軽量高級車』

カナタ「おつ?【ポルシエ】じゃん!良さそうなの引いたな!まつ、人が浮遊都市に住む俺達の世界では車なんて無縁だから名前しか知らねーから、これが速いのかは知らねーけどな!」

クロエ「・・・確かに外観はポルシエなんだけど・・・運転席の足下に取り付けてあるのって・・・自転車のペダルじゃん!!?!」

カナタ「これ人力車かよ・・・どうやらハズレを引いちまったみたいだぜ」

加々美『続いて【運命を覆す伐刀者】枠の【佐野涼花】&【風間重勝】ペアが乗るマシンは!』

『クールに去るぜ・・・』

重勝「ワゴン車だな・・・」

涼花「ワゴン車ね・・・運転はわたしがやるわ。アンタは屋根の上に乗って周囲を警戒して、場合によっては迎撃をお願い」

加々美『次は【特別】枠で【八神シグナム】!使用するマシンは!?!』
『直線騎士』・・・所謂【ドラッグマシン】であった。

シグナム「いいマシンだな、フツ!この【レヴァンティカー】なら――」

加々美『さあドンドン行きましょう!次は待ちに待った特別ゲスト!【落第騎士の英雄譚】世界最強の剣士の弟子】から【宮坂爛】&【葛城六花】ペア!そのマシンは!?!』

『外車』

爛「六花、運転の邪魔だから膝の上からどいてくれ・・・」

六花「爛とドライブ爛とドライブ爛とドライブ爛とドライブ爛とドライブ爛とドライブ爛と——」

爛「駄目だこれは、嬉しさのあまり自分の世界に入ってしまったているな……」

加々美『更に続いてもう一組の特別ゲスト！【落第騎士の英雄譚】運命を覆し最強を目指す戦士達〜】から【天崎翔】&【エリシア・ヴェルモンド】ペアが乗るマシンはアアアアッ!!?』
『痛車』

シヨウ「つて涼宮ハ〇ヒとか古いな!?!しかもこれ車自体はただの一般軽自動車じゃねえかよっ!爛達は豪華なオープンカーだっていうのに!!」

エリシア「まあまあシヨウさん、一応これレース用に改造されているみたいですし、宮坂さん達の車と大きな性能差は無いとは思いますが……私、車の事には疎いのでたぶんですが……」

加々美『さくて!最後のトリは【幻想戦記クロス・スクエア】枠の《ユーリ・ローウエル》&《フェイト・T（テストロッサ）・ハラオウン》ペア!異なる原作キャラ同士のカップルである二人が引いたのはっ!!』

『スーパーカー』

ユーリ「おおっ!?!なんか凄そうなのを引き当てたな」

フェイト「ユーリ、運転なら私に任せて!どんな車でも最速で駆け抜けてみせるよ!!」

ユーリ「うっし!任せた!さーて、それじゃあオレ達の相棒の顔を拝見させてもらおうとするかっ!」

二人に用意された車は鉄格子に囲まれた長方形の籠が前面にある……手押し車であった。その名も——

ユーリ「おい……これつて……【スーパーカーの買い物カート】か?……」
フェイト「……ユーリ、運転任せたよ、私は籠に乗るから」
ユーリ「つていきなり前言撤回かよ、おいっ!?!」

ユーリの文句も聞かずにフェイトはカートの籠の中に乗り込んで三角座りで座った。

フェイト「だって飛行系のスキルは使用しちゃ駄目って言うし……走るんなら星脈世代（ジエネステラ）のユーリの方が速いでしょ？だからこれは適材適所な役割分担だと思うんだけど」

ユーリ「それはそうだけどよ、フェイト……パンツ見えてるぞ……」

フェイト「……えっち」

斯くしてレーサー達は集い、いよいよレース開始の時を迎える。

加々美『さあああ、各車グリッドに出揃いました！初のゲストを迎えて行われる今回のレース、大混戦が予想されますが、如何でしょうか千種さん？』

霞『そうですねえ、お招きしたゲスト先の作者様方の印象を悪くしないよう、ウチ（蒼空キャラ）の連中には手加減しろとは言わないが、なるべくはっちゃけない様自重してレースに臨んでほしいものですね。特にあちこち壊さないようにしろよ、この世界のモノは蒼空の本体（作者）の妄想が具現化したモノの筈なのに、何故か事後処理をやらせられるからな……はあ……』

加々美『そ、そうですか……さあ！いよいよ世紀の大レース【Sky Blue Grandprix】が間もなくスタートされます！最初にチエツカーを受けるのはどのチームか!?……今シグナルが赤からああああ——碧に変わるっ！各車一斉にスタートッ!!』

レース開始を告げる碧色のシグナルが点灯し、スタートゲート横に立つ一輝がフラッグを振るうと同時にレーサー達のマシンは爆音を鳴らして一斉にコースへと飛び出して行った……と思われたのだが、一台だけスタートゲートに残っていた。

シヨウ「ダニイイイツ!!? 発進した瞬間にエンジンが止まっただとおおおおおっ!!」

エリシア「ひよつとしてこの車にどこか欠陥があるのでしょいか？ あるいは誰かが細工したとか……」

シヨウ「何だ?!? うおのれ黒鉄家と連盟のクソゴミ共がああああー！ー！ー！ーっ!!」

エリシア「いやシヨウさん、これは黒鉄家や連盟とは全く関係無いと思いますよ……」

加々美『おおつと?!? どうした事でしょうかつ?!? 特別ゲストのシヨウ & エリシアペア、スタートと同時にマシンが停止してしまいましたあああああつ!!』

霞『あく、これは【エンスト】だ。どうやらアイツ等の車は【マニュアル式】だったみたいだな……アイツ等もしかして免許持っていないのか?』

マニュアル式の車の発進はクラッチペダルを踏まないとエンジンが止まってしまふ……霞の言う通りシヨウは免許を持っていない為にその事を知らず、アクセルのみを踏み込んでクラッチ操作をしなかったので、エンストしたのだった。

加々美『初っ端からのハプニングにレースはいきなり大波乱! コースに出た各選手のマシンを物凄いスピードで抜き去り、トップに躍り出たのは——』

シグナム「ベルカの騎士に負けは無い! ブツちぎってくれるっ!!」
加々美『シグナム選手だあああー！ーっ!! 弾丸の様なスピードで後続を一気に引き離して行く! 疾いっ!!』

シグナム「最高だ! 私のレヴァンティカー! この爆発するかの如き速度!! たまらんっ!!」

自分の運転するドラッグマシンのスピードに陶醉するシグナムで

に出させない。

涼花「くっ！なかなかやるわね爛！全く隙の無いドライビングだわ」

爛「そういうお前も中々のテクニクだ！対応するのがやっとだよ涼花」

六花「爛く、がんばれく♪僕の元気も分けてあげるから、これで元氣百倍だ！ぎゅくくっ♪」

爛「つて六花!?!いきなり抱き付くな！運転し辛い!!」

六花「えへへく、爛く♥」

激しい攻防を繰り返している最中に何を思ったのか爛の膝に座る六花はいきなり体勢を変えて爛にしがみ付き、両脚を爛の身体に絡めて抱き付いた。所謂「だいしゆきホルド」というやつで、そんな事を運転している最中にやられたら当然ドライビングに支障が出る……。

重勝「今だ姫ツチ！インコースからブツちぎれっ!!」

爛「しまったっ!?!」

フラフラと爛達の外車が減速した隙を重勝達は見逃さない。涼花はハンドルを右に切って一気にアクセルを踏み、先に見えるコーナーでインコースから爛達を追い抜かそうと彼等の横に並んだ……その時――

フェイト「ハアアアアッ!!」

加々美『おおつと!?!突如後ろから音速に近い速度で迫って来たユーリ&フェイトペアの買い物カートがイン・アウト・インのコースでトップ争いを繰り広げる二台を一瞬にして抜き去って行ったあああああっ!!このレースは爛&六花ペアと涼花&重勝ペアの一騎打ちかと思われましたが、ここでまさかの順位変動だああああ!!』

爛「ちよつと待て、あれは速すぎだぞ!?!」

重勝「んなアホな……」

涼花「フェイトの【真ソニックフォーム】……見落としていたわ」スタート時はユーリが押していた筈の買い物カートを今はフェイトが押している。ユーリはフェイトと入れ替わる様に籠の中に立ち、

片足を前側の鉄格子の上に乗せて自分の得物である《ニバンボシ》を肩に担いだ暴走族の総長スタイルをとっている。そしてフェイトは戦闘時に着る《防護服（プロテクター）》を纏い、そのマントと上着を脱ぎ捨てたレオタードに近い格好をして、ユーリが乗る買い物カートを押しながら超高速で走っていた。

※幻想戦記クロス・スクエアの魔導士（ウイザード）は例外を除いて基本的に「空戦魔導士候補生の教官」の設定に準じているのでフェイトのバトル衣装は外見こそ原作と変わらないが、「バリアジャケツト」ではなく「防護服（プロテクター）」です。

フェイト「真ソニックフォームになった私は遊撃士協会（ブレイサーギルド）スクエア東エリア支部最速！例え飛べなくても全てを置き去りにしてみせるっ!!」

ユーリ「へっ、最初からこうすればよかったな！このままゴールまでかつ飛ばせ！フェイトツ!!」

フェイト「うん、行こう！揺るがなき境地のその先、ク○ア・マ○ンドへっ!!」

ユーリ「つておいつ!?光速超える気かよお前!？」

フェイト「集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く！光差す道となれ!!」

ユーリ「人の話全然聞いてねえ・・・」

フェイト「アクセルシンk——」

フェイトがク○ア・マ○ンドの境地を掴みかけた瞬間、明後日の方から突如飛来した紅い魔力砲撃がユーリ達の買い物カートに直撃し、フェイトが叫びかけた危ないセリフは爆音によって掻き消された。

爆風に吹き飛ばされてポロポロのユーリとフェイトは大破した買い物カートと共にハイウェイの外に吹っ飛ばされて下の街へと落下する。

ユーリ「おいおい、勘弁してくれ・・・幾らオレが星脈世代と言っても、この高さから落ちたら流石にキツイぜ・・・どうしてこうなったんだ・・・」

フエイト「うん……でも私は大丈夫だよ。ユーリと一緒にならどこまででも行けるから」

ユーリ「……ったく、まいったなこりゃあ……」

天然掛かったように微笑むフエイトとしょろがなさそうに後頭部を掻いて呟くユーリはそのまま奈落の街へと落下して行った。

加々美『ユーリ&フエイトペア、コースアウトオオオオツ!!これで二台脱落だあああああつ!!』

霞『まさにリア充大爆発だな、ざまあみろ』

涼花「私情たつぷりな皮肉ね。でもあの二人結構幸せそうな顔をして落ちて行った気がするわ」

重勝「まつ、星脈世代も魔導士も一般人より頑丈と聞いたし、あの高さなら相当打ち所が悪くなきゃあ落ちても大丈夫なんじゃねーの？」

二人は他人事の様にはいるが、人の心配をしている暇は無い、こうしている間にも重勝達と爛達目掛けて無数の紅と黒の魔力砲撃がどんどんと明後日の空から降り注いで来ているのだから。

六花「むく、五月蠅いなあ、僕の至福の時を邪魔して、一体何なのこの砲撃音は？」

爛「半径5km圏内を探ってはみたが、砲撃主らしき人間はどこにも見当たらない。となるとそれよりも遠くからの超遠距離砲撃という事になる……何所だ、何所から砲撃している!？」

涼花「……あそこよー!」

爛が索敵範囲を広げて砲撃主を探り当てる前に眼が異常に良い涼花が砲撃主を見つけた。彼女が指さす方角にあるのは此処より約20km東に聳え立つ山の頂上……その高台に一台のポルシェが留まっており、その屋根に立つ少年少女……カナタとクロエが自分達の得物である魔装錬金武装——魔砲剣《グラディウス》と魔砲杖《ベネトナシユ》を射撃体勢で構えて砲撃魔術をバシユバシユと撃ち放っていた。それぞれの得物には白いレンズが取り付けられたスナイパーズコープとまるでサイの角先のような異様な形をしたロングバレルがオプシオンパーツとして取り付けられていて、約20km先のコース

爛「壺の剣・八意表裏斬撃（やごころひょういざんげき）！」

漆黒の重力エネルギーの塊が漆黒の魔力の塊とぶつかり合い、十六の斬撃が十六の魔力弾を一発も残さず斬り墜とす、蒼穹の空は一瞬にして轟音と爆炎に彩られた。

加々美『風間重勝選手と宮坂爛選手！カナタ&クロエペアの超遠距離大火力攻撃を撃ち落としたああああ!!二人は出身世界は違うとはいえ、さすが破軍学園最強格の学生騎士、お見事ですっ!しかああしっ、カナタ&クロエペアは怯みもせずに次々と超遠距離砲撃を撃ち続けて来ています!このままだとコースが砲撃によって崩壊するのも時間の問題でしょう!各レーサー達はこのピンチにどう対処をするのでしょうかあああああっ?!』

霞『はつちやけるなつて……言ったのに……もうヤダこいつ等……』
重勝「チツ!カナタの奴、面倒な事しやがる。眼には自信はあるが、俺は姫ツチ程イカレた視力じゃねーから、あんな距離狙い撃てねーぞ」

爛「突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルク）を投げるって手もあるが、投げると外れる予感がするな……陰陽師のチカラを解放して朱雀を召喚してもいいが、あの距離だと少し時間が掛かる。どうするか……」
砲撃が降り注ぐ中コースを走りながらどう対処するか悩む重勝と爛。走る道は蛇のように曲がりくねって下がる峠道（ダウンヒル）コースへと変わった……その時――

爛「……来たか」

後方からブオオオオンというエンジンの駆動音が小さく聴こえてきた。その音は段々と近づいて来るかの様に大きくなっていき、それと共に後方から涼宮ハ○ヒが現れ、追い縋って来た……否、【龍】がとうとう追い付いて来たのだ!!

重勝「……へっ!遅かったじゃねーか、もうリタイヤしちまったのかと思っちゃったけど……そうだよな、お前が簡単に終わるわけねーか!」

涼宮ハ○ヒが描かれた痛車を不敵な笑みで乗りこなし、オレンジ色の髪と黒いマフラーを柵引かせて【龍】は来た!!

シヨウ「オツス！待たせたなオメーら！！天崎翔、ただいま参上だっ
!!!」

【龍】は不敵に笑う！助手席に座る純白の姫にマニュアル車の教本を
見せてもらいながら・・・ここからが、レースの本番だっ!!

Sky Blue Grandprix【中編】※
ゲスト有り

加々美『これは予想外！カナタ&クロエペアの無差別超遠距離砲撃でコースに爆風が吹き荒れる中、スタート時のエンストによって大きく出遅れてしまっていたショウ&エリシアペアがここにきて追い付いたあああつ!!そしてレースは難関の峠道(ダウンヒル)コースに突入！道幅が大きく狭まり、蛇の様に連続で折り返すヘアピンコーナーの下り道を下って行く!!曲がり損ねれば崖の下に真つ逆さま！速度の調節と運転手(ドライバー)のハンドル捌きが攻略の鍵を握る!!峠を攻める某走り屋の如く芸術的ドリフトでライバルに差をつけろつ!!』

エリシア「ショウさん、さつきも言いましたけどマニュアル式は曲がる時に十分に減速してクラッチ操作をしながらギアを2速に下げ、ブレーキを軽く利かせながら曲がるんですよ！」

ショウ「おう！減速しながらクラッチ操作をして曲がればいいんだな!?!」

エリシア「ショウさん!?ギアを下げる事を忘れていますよ!!」

ショウ「おつとつ?!あつぶねええつ!!」

峠道コースの最初のヘアピンコーナーで運転操作を間違えそうになったショウは慌ててギアを2速に変え、もたつきながらもなんとかコーナーを曲がりきる。慣れない上に操作の難しいマニュアル式痛車の運転にショウは額から冷や汗を流していた。

重勝「危なっかしいなアイツ等、あんなんでも良く追い付けたもんだぜ・・・」

爛「恐らくさつスキのハイウェイコースでの抜き合いやあいつ等(カナタとクロエ)の超遠距離砲撃に対処してもたもたしている間に追い付いて来たんだろう、ハイウェイコースは道幅が広くて複雑な連続コーナーも無かったからな、初心者でも他に走行している車両が無いのなら問題無く走破できるだろうし」

エリシアにマニュアル車の教本を読んでもらいながらガチガチにフラついた運転をするシヨウ、その一方で涼花と爛は曲がる度に下降する連続ヘアピンコーナーを見事なドリフトで攻め、運転操作に悪戦苦闘するシヨウ達をグングンと引き離して行く。せつかく追い付いたというのにこのままでは再びシヨウ達が爛達に置いて行かれるのも時間の問題である。

シヨウ「くっそく、アイツ等速えーな！いつその事俺がこの涼宮ハ○ヒを担いで走った方が速いんじゃないか？」

エリシア「シヨウさん、焦るとまた操作ミスをしてエンストしてしまいますよ、リラックスしな——シヨウさん!?前!前!!」

紅い砲撃がシヨウ達が走行する車線上に着弾し、シヨウは突然訪れた災害に慌ててハンドルを切つて爆風をやり過ぎす．．．しかし急に大きく曲がって速度を停止寸前まで大幅に落とした為か爆風を避けた後にマシンのエンジンがドコン!と止まってしまった．．．。

シヨウ「あ．．．」

エリシア「クラッチ操作を誤ったからまたエンストしてしまいましたね．．．」

シヨウ「クソツタレがああああつ!!誰だ砲撃撃って来ている奴等は!?!」

エリシア「わかりません。東の空から飛んで来ているのでたぶん15km以上先にある山々の頂上からの超遠距離砲狙撃じゃないでしょうか?．．．宮坂さん達と風間さん達が先を走っていて、八神つて女の人と遊撃士の御二人がリタイヤした事を考えると．．．」

シヨウ「あの昔のシゲに似たガキとその女らしきガキかつ!!ふざけやがって!!」

エリシア「ちよつ、シヨウさん!」

消去方で砲撃の実行犯を割り出したシヨウは怒りの形相(憎しみでは無く、揶揄われてカチンと来た感じ)でマシンの扉を開けて外に出た。今も尚砲撃が飛来して来る東の空を睨みつけて彼はその方角の【気】を探る。

シヨウ「・・・あの山かつ!!」

そして20km東の山の頂上で砲撃を撃ちまくっているカナタとクロエの【気】を感知した。どんなに相手が遠い場所に居て眼に見えずとも【気】を見つけさえすればシヨウにとってもはや距離など取るに足りないものだ。

シヨウ「ガキ共が・・・目に物を見せてやる・・・」

そう言つてシヨウは脚を開いて腰を落とし、右の腰辺りで両掌を違えるように構えて精神を集中させた・・・全身の【気】をその両手に集束し、強大なエネルギーの塊が両掌が囲う空間に形成されていく・・・そう、これはかの《武天老師》と謳われた偉大なる武術の達人が50年の歳月を費やして編み出したとされる必殺奥義――

シヨウ「かく、めく、はく、めく――」

達人クラス以上が全力をもって放てば月すらも消滅させる事ができると言われている【気】の奔流を撃ち出す。名を《かめはめ波》。

シヨウ「――波アアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

シヨウは両手首を重ね合わせて両掌が前方に向けて開くような形で両腕を東の空に突き出し、掌からその強大な【気】の塊を波動として撃ち出した。幸斗の剣圧閃光にも匹敵するその巨大なエネルギーの奔流は大気を押しつけ、約20km東に在る山に向かって一直線に突き進んで行く。

カナタ「おいおい、冗談だろ・・・補助無しでこの距離を、しかもあんな馬鹿デカイエネルギーを撃つて来るなんてよ」

クロエ「ヤバイよカナタ!あの弾道だと確実にこの山に直撃しちゃう!!」

カナタ「しかも狙いも正確ときた・・・仕方ねーな、相殺できるかどうかわかんねーけど、やれるだけやってみるか!」

カナタは魔砲剣を射撃体勢で構え、自分達が居る山に向かって来ているシヨウのかめはめ波にその標準を合わせる。漆黒の砲剣の柄に当たる部分に取り付けられているシリンダー型の魔力縮退炉を五回転させて縮退魔力を練成し、切っ先に膨大な黒い魔力球を形成する。

カナタ「今の時点の俺ができる全力全開(フルバースト)だ!行く

ぜっ!!」

魔砲剣戦技——収束魔砲（ストライクブラスター）

強大な威力を誇るかめはめ波を撃ち落とすべく、黒く巨大な暴力の塊が撃ち出された。

大空を翔け、二つの異なるエネルギーは山々の麓に広がっている森林の真上で衝突する。結果は一目瞭然、ミストガンのエース《黒の剣聖（クロノス）》である原作の時系列のカナタ・エイジならいざ知らず、学園浮遊都市に来て間もない未熟者である空戦情熱のカナタの収束魔砲では、あの《無慈悲の破壊戦士》が放つかめはめ波に対抗できる筈も無く、黒い魔力の塊は強大な気の奔流にアツサリと飲み込まれたのだった。

カナタ「ちえっ、やっぱ駄目だったか。こりゃあ潮時だな・・・逃げるぞクロエ」

クロエ「えっ!?でも飛行魔術は——」

カナタ「悔しいけど、ここでリタイアだ。サツサと逃げねーとあの波動に飲み込まれて細胞一つ残らず消滅させられちまうぞ〜」

万策尽きたカナタとクロエはレースを放棄。飛行魔術を発動して二人は大空へと離脱し、その数秒後にシヨウのかめはめ波が山へと飛来して直撃、天を揺るがす大爆発と共に山は跡形も無くこの世から消え去り、平坦に焼け焦げた更地のみが残った。

加々美『シヨウ選手のかめはめ波が炸裂ううううっ!!途方もない距離も何のその、カナタ&クロエペアが砲撃の狙撃地点として利用していた山を正確無比に狙い撃ち、跡形も無く吹っ飛ばしてしまいましたあああああっ!!カナタ&クロエペアは飛行魔術を使い無事に空へと脱出!しかしレースのルール上、飛行系のスキルは使用禁止となっているので、カナタ&クロエペアは反則行為により失格となります!!』

霞『どつちにしても山と一緒にマシンも消えちゃったし、レース続行は無理でしょ・・・。ゲストの連中もやらかしてくれるな、マジで・・・』

加々美『さあ、これにより出場チームの半数が脱落!!残る三チーム

でレースの優勝を争う形となりましたっ!!果たして一位でゴールするのはどのチームなのでしょうっ!!?」

シヨウ「へっ!どんなもんだっ!!」

エリシア「シヨウさん!ガッツポーズをしている場合じゃないですよ!もう風間さん達が見えないところまで行っしまいました!!」

シヨウ「ダアアアニイイイイツ!!?どうするんだよ、せっかく追いついたのによ!!」

エリシア「……」

エリシアは折り返しのカーブを曲がる度に下へと下がるヘアピンコーナーが続く峠道コースの麓を見て考える、車の素人でもこの坂道を最速で駆け抜けることができる方法を……そして彼女はそれを思い付く――

エリシア「……シヨウさん……確かこのレースは【飛行系】【転移系】【時間操作系】のスキルの使用は禁止されているけれど、それ以外のスキルなら使用しても構わないですよね?」

シヨウ「え?……まあ、そうだな。他の奴等バンバンスキル使つてやがるしな……」

エリシア「……シヨウさん、私にいい考えがあります」

カナタ「おいおい、あのオレンジ頭無茶苦茶だな……あんなの人に向けて撃つていい技じゃねーよ……」

シヨウのかめはめ波が直撃して跡形も無く消滅した山の跡地を後

ろに眺めて空を往くカナタは顔を引き攣らせて呆れていた。一撃で山を消し飛ばすような威力の技を人がそこに居ると判っていて躊躇なく放ったシヨウの事をイカレた奴だと思ったからだ。彼の隣を追従飛行するクロエもまた額から冷や汗を流して声を詰まらせるように苦笑いをしている。

クロエ「あはは・・・凄まじい破壊力だったしね・・・。私達の世界でもプロの空戦魔導士ならあれくらいの威力が出る戦技を使える人は沢山いるらしいけれど、流石に人を威嚇する目的で使用したりはしないかな？」

コイツ等はこの作品の第一話で未来の姿になって蒼空に核兵器級の戦技をブチかました事を忘れているのだろうか・・・。

カナタ「俺達が世界を知らないだけかもしれないねーぜ？・・・クロエなら将来やりそうな気がするけどな（ボソ）」

クロエ「カナタ、何か言った？」

カナタ「なんでもねーよ、独り言だ」

クロエ「（なんか怪しいな・・・）ふーん・・・はあ・・・ちよつと悔しいな、つくづく自分達の未熟を実感するよ。あくあ、わたしもカナタみたいに収束魔砲が使えたらなあ・・・」

カナタ「おいおい、こんな事で落ち込んでいたらこの先のランキング戦やっていけねーぞ？今度特訓に付き合っつてやるから、元気だせよ」

クロエ「・・・うん、分かっているよ」

カナタ「よし！それじゃあ——」

その時、二人に何か巨大なモノの影が掛かる。何事かと思った二人は咄嗟に上を見上げ・・・固まった。

カナタ「な・・・」

クロエ「何なの・・・アレ？・・・」

一方、トップを走る爛達と重勝達は頭文字にDが付きそうな走り屋達のようにライン際ギリギリを攻めるドリフトを駆使し、連続して続くヘアピンコーナーを駆け抜けて、現在峠道コースの終点に差し掛かっていた。

加々美『抜けたああああっ!! トップで峠道コースを走破したのは爛&六花ペア! そのすぐ後ろを涼花&重勝ペアが追走する形で次のオフロードコースへと直進ですっ!』

六花「エリシア達、来ないね〜」

爛「まあ、玄人でもあの峠を越えるのは至難の業だからな。素人のシヨウでは着いて来れないのは仕方がないと言えれば仕方がないが・・・」

六花と爛はシヨウ達が後ろに着いて来ていない事に落胆の表情を浮かべている。トップを争うライバルが減った事は喜ばしいのだが、張り合いが足らなく感じているのだろう。

涼花「ふう、どうやらせっかくの追撃も無駄に終わったみたいね・・・ だけど、なんか嫌な予感がするわ・・・」

重勝「俺もそう思うぜ、シヨウは幸斗と同様に何をしでかすか予測不能なヤローだからな。もしかしたらそろそろ何か仕掛けて来るかもしれないねーぞ」

六花「まっさか、シヨウの瞬間移動も転移系のスキルだから使用禁止だし、幾ら何でもあの峠道コースを素人が突破できるわけ——
——って寒っ!?!」

突然吹いた冷たい風に六花は身震いをする。

涼花「妙ね、さつきまでは夏のように暑かったのに・・・」

気温がいきなり大きく変化した事を涼花は不審に思った。この世

界は蒼空の本体（作者）の妄想で具現化されているので気温が急激に下がっても何の不思議も無いのだが……。

涼花「……強大な魔力を感じるわ……」

重勝「ああ……それも遙か後方からな……」

六花「寒いー、爛く、僕を温めて〜♪」

爛「ちよつ、六花!? また急に抱き付いて来るな、危ないだろ!」

戸惑う爛の胸に顔を埋めて幸せそうにしている六花はさておき、どうやらこの冷風は魔力によって発生した事象のようだ。不審に思った重勝と涼花がワゴン車の屋根の上と運転席の横窓からそれぞれ警戒して後方に遠ざかる峠道コースを確認してみると――

涼花「っ!?!? ……路面が凍っている?」

涼花が見たのは峠道コースの麓からこの先のオフロードコースまでの道が一直線に凍結している不自然な光景であった……そして重勝の目に見えたのは――

重勝「……はは……アイツ等やりやがった……」

峠の上から下までを一直線に凍らせて造られた一本の下り坂……その道を猛スピードで駆け下る一台の異様な車――

加々美『なつ、何だアレはあああつ!?! サイか? イノシシか? ……いや――

――涼宮ハ○ヒだあああああつ!!! 突如として発生した冷気と共に路面が凍り付き、突然峠道コースの中央に一直線の氷の坂道が出現したかと思いきや! その道を涼宮ハ○ヒがハ○晴れユカイを登

場BGMに物凄いスピードで滑走して来たあああああああっ!!」

爛&重勝&涼花「「なん・・・だと・・・」」

シヨウ「ワーツハツハツハツハツ!!どけどけ愚民共っ!!S○S団団長様のお通りだあああああっ!!」

加々美『涼宮ハ○ヒの正体は当然、シヨウ&エリシアペアのマシンです!エリシア選手の伐刀絶技《氷河時代(アイスエイジ)》を使って峠道コースの中央に氷の坂道を造り、その上を走って強引にシヨートカットをして来ますっ!!』

霞『Aランク伐刀者ならではのチカラ技で来やがったか、確かにこの方法なら難しいクラッチ操作やギアチェンジなんてしなくても下り坂でアクセルを踏む度胸さえあれば一直線に爆走できるからね、ウチの明日葉ちゃんもよくやるなーこの方法』

エリシア「シヨウさん、テンションが上がってしまふのはわかりますけれど、少しはつちやけ過ぎだと思えますよ、車の音楽プレイヤーを使って外に響く程の大音量でアニメソングを流すのもやり過ぎですよ・・・」

シヨウ「ハーツハツハツハツ!!かつ飛べ【団長号】っ!!」

エリシア「名前付けたんですかっ!!」

加々美『S○S団団長涼宮ハ○ヒ、たった今峠道コースを走破!!そしてその勢いのまま直進!先を走るトップ二台に向かって凄まじいスピードで追い上げて行く!速い!涼宮ハ○ヒ、爆走だあああああっ!!』

シヨウ「爛!シゲ!おっ先イイイイイイッ!!」

加々美『そしてあっという間に中央から二台を一気にブチ抜いたあああああっ!!そのまま路面の泥にタイヤが捕られやすい森のオフロードコースに突入!!行け行け涼宮ハ○ヒ!かつとビングだ涼宮ハ○ヒイイイイッ!!』

霞『涼宮ハ○ヒ涼宮ハ○ヒうるせーよ・・・』

六花「キヤアアツ!」

爛「くっ、オフロードの泥が撥ねたか!?これだからオープンカーは!」

六花「もく、僕も爛も身体中泥だらけじゃないかあ……よし、こ
うなったら爛、せつかくだしこのまま僕と泥レスしよつか♥」

爛「しないからな！頼むから状況を考えてくれ!!」

・・・奇跡は起きた。エリシアの大胆な奇策によってシヨウ達が遂
にトップに躍り出た。残すはたった今入ったオフロードコースと
ゴールのみ、熾烈を極めたレースもいよいよクライマックスだ。果た
して勝つのは爛達か？重勝達か？それともシヨウ達か!!?

ピンポンパンポン！

加々美『えー、レースの途中ですが、只今宇宙観測センターより緊
急の連絡が入りました……たった今、何らかのトラブルで機体
が故障してしまった一機のスペースシャトルが大気圏に入り、こちら
に向かって墜落して来ているようです。観客の皆さんは誘導スタッ
フの指示に従って速やかに避難をしてください……ってスペースシャ
トルが此処に向かって墜☆落うううううううっ!!?』

シヨウ達 「二三」・・・は？「二三」

レースの盛り上がりが最高潮に達したこの時、突如として訳の分からない緊急連絡が入り、レーサー一同はまるで時が止まったかの様に啞然として思わず呆けた声を出してしまふ。スペースシャトルがこの場所に向かって墜落？いったい何事かと思つたその時、蒼空特設コース全体に何か大きなモノの影が掛かつた。

いったい何なんだと遙か上空を見上げてみるレーサー一同・・・彼の目に入って来たのは巨大な機体全体から煙を上げて遙か上空より徐々に落下して来ているスペースシャトルであつた・・・。

シヨウ&六花&エリシア 「二」な・・・何なんだ（の）（ですか）アレはあああああっ!!「二」

爛&重勝&涼花 「二」・・・どうしてこうなつた？「二」

予期せぬ状況に絶叫と啞然の聲が入り交じつて空に木霊したのであつた・・・レースはいつたいていどうなつてしまふのであろうか・・・。

Sky Blue Grandprix 【後編】 ※
ゲスト有り

エリシアの奇策が功を成し、遂にショウ達がトップに躍り出た。

そしてレースは終盤のオフロードコースに入り、いよいよゴールは目前に近づいた……のだが、ここで予想外過ぎるアクシデントが発生したのだった。

ショウ「アイエエエエエツ!? スペースシャトル? シャトルナンデエエエエエツ!!」

エリシア「落ち着いてくださいショウさん、あれはニンジャじゃありませんよ!」

六花「これはさすがに予測不能だよ……」

爛「何であんなものがいきなり宙(そら)から……そういえば重勝、確か幸斗達は今日月に行っているんだよな? スペースシャトルで……」

スタート前に重勝が言った事を思い出した爛が隣を走るワゴン車の屋根の上に居る重勝に確認すると重勝とワゴン車を運転する涼花は片手で額を押さえて溜息を吐いた。

涼花「どうやらニンジャより質の悪い奴等が面倒事を持って来たみたいだわ……」

重勝「だな……いったい何をやったんだよアイツ等?」

二人は今遙か後方の上空から斜めに滑空して墜落して来ているシャトル内に誰が乗っているのかを悟って再び溜息を吐く。シャトルの機体の後部にあるロケットブースターは炎上し機体全体から黒い煙が立ち昇っていて見るからに危険な状態だ。

?? 「ドラアツ!!」

そうこうしている内にシャトルが高度約4000mまで落下して来ていたが、その時にシャトルの上盤の一部が何者かによって内部から破壊され、その部分に機体内部に通じる大穴が空いた。するとそこから三人の少年達がシャトルの上盤に這い出て来る。

幸斗「ゲホッ！ゲホッ！なんだよ脆いシャトルだな!?」【月の破片がぶつかった】程度でブツ壊れやがって!!」

出雲那「当たり前前だ！あんなデツカイ破片がエンジンに直撃したんだからよ!!」

ルーク「うぷつ：：や、やつと地上に着いた：：うつ：：うおええ：：」
シャトルの中から上盤に上がって来たのは当然幸斗達蒼空主人公ズであった：：。幸斗の手に奴の霊装である《鬼童丸（きどうまる）》が顕現されている事からどうやら幸斗が機体内部から剣圧閃光を撃ち放って機体の上部を纏めて撃ち抜いたのだろう。某滅竜魔導士並に乗り物に弱いルークの安否が気になるところだが、どうやら全員無事のようなだ・・・。

カナタ「おーい、無事かー?」

そんな時先程シヨウのかめはめ波から空へと逃れたカナタとクロエが三人を発見し、心配をして幸斗達の側まで飛翔して来て声を掛ける。

クロエ「三人共いつたい何があつたの!?!このシャトルが墜落して来ている所為で地上は大騒ぎだよ!」

カナタ「動力が炎上してダメになつてんじやねーか。宇宙で何してたんだよ?確かお前等【悪の秘密結社の月面基地を壊滅させるアトラクション】をやりに行つたんだよな?」

出雲那「ああ・・・実は——」

出雲那「——という感じで戦場の叫び（ウォークライ）を使ってパンプアップした幸斗が龍殺剣を全力全開でブツ放した結果、月面基地どころか月の四分の一が崩壊してその破損した月の破片が無数のスペースデブリとなって地球に向かって飛んで行ってしまったから急いでシャトルに乗って月の破片を排除しながら戻って来たんだが、最後に幸斗が放った一発で砕いた月の破片のデカイ欠片が運悪くシャトルのエンジンに突き刺さって・・・こうなった・・・」

幸斗「イエイイ！（サムズアップ）」

カナタ&クロエ「・・・」

シャトル墜落の過程を聞いた二人はなんとも言えずに沈黙している・・・話を纏めると——

シヨウ達『『『『要するに全部幸斗（真田さん）が悪いんじゃないですか（ないの）っ!!』』』』』

幸斗「うおおっ!?襟元からいきなり声が!？」

涼花『こんな事もあろうかとアンタ達が月に出発する直前にアンタの服の襟に月まで電波が届く特殊小型無線を仕込んでおいたのよ!こっちには今の話は拡声器を通じて全員に聞こえていたわよ。まったく、何月壊しているのよ、このおバカ!』

重勝『幸斗・・・一部とはいえ、とうとう月まで壊しやがったのか。いつかはやるだろうとは思ったけどよ・・・』

幸斗「だって、あの悪の幹部共が着けていたお面がウザツたかったから、ツイ・・・」

六花『いや、「ツイ」じゃないっての!?好きな人が他の奴に誑かされて寝取られたんならともかく、普通その程度の事で月を壊したりしないよ!』

爛『六花、他人に寝取られたらお前も月を壊すのか・・・』

エリシア『Aランクの騎士が全力で高火力の伐刀絶技を放つても月を四分の一も破損させる事ができる人なんて殆どいないと思いますよ・・・』

襟元の無線機から次々と野次と呆れ声が幸斗へと飛んで来る。皆言いたい事は分かるのだが、それよりも今の事態をどうするのかが決だろうと最後にシヨウの声が聞こえてきた。

シヨウ『とにかくそのシャトルを何とかしようぜ!幸斗、オメーはまず目の前の山をブツ壊せ!このままだと激突すんぞ』

幸斗&出雲那&カナタ&クロエ「「は?」「」」

シヨウの警告を聞いて四人はシャトルの進行方向を向く、一同の目には前方数キロメートルにある先程シヨウ達が走破した峠道コースがある山が映った。

出雲那「マジかよ!いつの間にか!!?」

カナタ「どうやら気付かねー間に地上2000m以下まで機体の高度が下がっていたみたいだな」

クロエ「そんな呑気な事言っている場合じゃないでしょ!?早く脱出しないと!」

ルーク「うつぶ・・・な、なんでもいいから・・・は、早く地上に・・・うおええ・・・」

爛『連れも限界のようだし迅速に行動するぞ。まず幸斗、シヨウが言ったようにお前はシャトルの進路を塞ぐ目の前の山を破壊しろ。幸い幸斗以外全員空を飛べるようだしシャトルに乗っている人等はその後速やかに空を飛んでシャトルから退避、できるだけ遠くにな、ダウンしているルークは年長者の出雲那が背負ってやれ』

出雲那「オレが背負うのかよ・・・まあいいけど、飛べない幸斗は

誰が背負うんだ？」

幸斗「へ？必要ねえよ。オレは空気を蹴って空【跳べる】しな！」
クロエ「月の四分の一を壊したうえに空を跳ぶって……」

爛『全員の脱出を確認したら、俺・重勝・シヨウ・エリシアの四人が一斉に無人のシャトルに高火力の伐刀絶技を撃ち込んで地上に墜ちる前に破壊。最後に六花と涼花が地上に降り注いで来るシャトルの残骸を処理して緊急ミッションはコンプリートだ』

幸斗「は？そんな面倒な事しねえでもオレが地上に降りてこのデカブツを直接受け止めればいいんじゃない？」

重勝『ブツ壊した方が被害が少なくて済むだろ？この辺は森だらけでそんなデカイ物を置いとく場所なんかねーんだし』

幸斗「あ、そっか」

カナタ「幸斗がシャトルを直接受け止めるってところにはツツコマねーのかよ……もうコイツ一人でいーんじゃない？」

重勝『全員作戦は記憶したか？……よしっ、そんなじゃあ幸斗！派手にブチかませっ!!』

幸斗「おっしやああっ！うおらあああああっ!!」

幸斗は雄叫びと共に豪快に鬼童丸を一振りし、規格外の臂力で振るわれた一刀が事象改変を引き起こされる程の尋常ならざる剣圧が巨大な光の波となって正面に見える山へと撃ち出された。

閃光は山を貫き、直後にドーム状の超爆発が山は疎か周囲の森をも焼き払う。爆発が終わると山は跡形も無く消滅していて代わりに隕石が落ちたような巨大なクレーターがその跡地に造られていたのであった。

幸斗「ふうく、スカツとしたぜ！」

クロエ「本当に一発で消滅させちゃったよこの人……」

カナタ「クロエもこれぐらいならそのうち出来るようになりそうだけだな♪」

出雲那「ボサツとしてんじゃねえっ！地上はもう目の前に迫ってんだ！手筈の通りこの場からサツサと離脱すんぞ!!」

ルーク「うぷっ！ゆ、揺れる……も、もうダメ……お、オエエ

エエエエツ!!!

出雲那「アッ アッ ーッ!? オレの頭に吐きやがったこのヤローッ!!」

幸斗「うっし、んじやあ行こうぜ! 後は任せたぜ、シゲ達っ!!」

ドタバタしながらも先程無線で爛から伝えられた通りにシャトル上に乗っていた面々は空へと飛び立って行った・・・後は地上に墜ちる前にシャトルを破壊するだけだ!

シヨウ「よしっ! 準備はいいか? ヤロー共っ!!」

シヨウ以外「「「おう (はい) っ!!」「」」

レースを一時中断し、コースの拓けた場所にマシンを停車させシヨウ達はシヨウを中央に横一列に並んで立ち、落下して来るシャトルを待ち構えていた。

シヨウ「行くぜ! ドラゴンブロウ!!」

エリシア「貫け、細氷 (ダイヤモンドダスト) ー!」

重勝「未来 (さき) を指し示せ! 重黒の砲剣 (グラディウス) !!」

涼花「希望 (ゆめ) を創り出せ! 鉄の伯爵 (アイゼングラフ) !!」

爛「闇よ、光を侵食せよ、雷黒鳥 (らいこくちよう) ー!」

六花「遡れ! 撃剣・龍 (げきけん・りゆう) !!」

一斉に霊装を顕現するともう目前に迫ったシャトル目掛けてシヨウ・エリシア・重勝・爛の四人は同時に大技を放つ――

シヨウ「界王拳――三倍だあああああっ!! かく、めく、はく、めく――波アアアアアアアアッ!!!」

エリシア「全てを凍てつかせる剣と化せ、氷河の剣――永遠の極地の吹雪剣 (エターナルブリザードブレード) っ!!!」

重勝「これが俺の――全力全開っ! 光翼ノ帝剣 (アストラル・ブレイカー) アアアアアアアアッ!!!」

爛「光の聖剣は、黒のチカラを借りて、正しく最強となる――黒の騎士・未来を切り開く最強の聖剣 (エクスカリバー・ファフニール) ウウウウウウウツ!!!」

界王の鬨気に高められた気の奔流が! 猛吹雪を纏った絶氷の大剣が! 極限まで収束された白く膨大な重力エネルギーの柱が! 全てを

滅する黒の聖剣の光が！宙（そら）から墜ちる鉄の塊を一直線に飲み込んで行くっ！！あまりにも強大なチカラの奔流が蒼穹を蹂躪した為に天地が鳴動し悲鳴を上げたっ！！

やがて光は収束し蒼穹の上空が世界に舞い戻ると運良く光の蹂躪から免れたシャトルの部分が無数の残骸の流星となって地上に降り注いで来る・・・でも心配は要らない――

六花「涼花、なんならアレ全部僕一人で処理してあげようか？」

涼花「冗談。どんな戦況をも見極める為に鍛え抜いたわたしの眼を舐めないでもらいたいわね。アンタこそ、その眼に頼り過ぎて自分の感覚を疎かにしない事ね。どんなチカラも絶対では無いわ、過信し過ぎると痛い目見るわよ」

六花「もちろん！言われるまでも無いですう！」

天の眼を持つ少女と常に戦場を見定める眼を鍛えあげた少女の眼がそれ等を一つも見落とす事無く捉えているのだから！

六花「僕の《絶対零度の戦術眼（インサイト）》はご飯粒一つ見逃さないよ！唸れ、龍雷（りゅうらい）っ！！」

涼花「一つも地上に落とさせはしないわ！全て打ち砕くっ！！」

六花の《天眼》が無数に降り注ぐ鉄くずの流星を纏めて捉え、捉えた全てに氷の柱を刺し込んで、それを目印に銃口から撃ち出された雷の龍が無数の鉄くずを喰らって行く。

涼花は異常なくらい広い視野と研ぎ澄まされた感覚をもって空間を掌握し、空から降り注ぐ全ての残骸を感知すると左腕に巻かれた無数の手拭いを纏めて右手に取り、霊装で触れた生物以外の物を鉄に変える因果干渉系の伐刀絶技《鉄化（エンダーンアイゼン）》を使用して無数の手拭いを鉄のブーメランへと練成し、全ての目標に向けて投げ放つ。

雷の龍と無数の鉄のブーメランは空でダンスを踊るように錐揉み状の軌道で空を蹂躪し、一つも取り零す事無く全ての残骸を滅する事に成功した。これでミツシヨコンプリートだ。

シヨウ「よしっ！そんじゃあ、レース再開と行こうぜ！！」

また運転操作ミスをしてエンストしてしまったのでしょうか?」

霞『いや違うな、停止しようとしている時ならともかくただ直線を走っていただけでエンストなんかする訳が無いんだよねえ。たぶんアレは——』

エリシア「大変ですシヨウさん!ガソリンのメーターがもう0になっっていますよ!!」

シヨウ「ダアアアアアニイイイイイイイツ!!?何で俺達の団長号だけガス欠してんだよっ!!」

霞『——という訳で止まっという事だな。アレの整備を担当したエンジン共は残業をサボリまくるような弛んだ連中だったからねえ、ガソリン補充の前に定時が来てやらずに上がりやがったんだろ。社畜の敵め、妬ましい』

シヨウ「クソツタレエエエエエエツ!!どこまでもバカにしやがってええええええっ!!」

エリシア「どうしましょう、もう打つ手がありませんよ!」

シヨウ「いや、まだだっ!まだ【最後の手段】が残っているぜ!!」
エリシア「はい?」

加々美『マシンのガソリンが尽きたシヨウ&エリシアペアはその場で立ち往生!さすがにこれはもうダメでしょう!これで後は爛&六花ペアと重勝&涼花ペアの一騎打ちとなりました!!ゴールまで残り約300m!先にゴールを切るのはどっちだあああああっ!!』

爛「さて、少々名残惜しいがこれで最後だ。勝敗はどうでもよかったが、ここまで来たからには勝たせてもらうぞ、重勝」

六花「むぎゅ〜!爛〜♪」

もはや慣れてしまったのか、この愛する男と二人きりのこの時を最後まで謳歌しようとする豊満な胸の双丘をこれでもかと身体に押し付けてきて自分に抱き付いている六花の事をそのまま放置して爛は自分達のマシンと横一直線に並んで走行しているワゴン車の屋根の上に乗っている筈の重勝を横目で見てさり気無く勝利を宣言する・・・が、そこに居たのは重勝ではなかった。

涼花「そう、でも残念だったわね。これでわたし達のトップは確定

したわ」

重勝「〜♪」

重勝と涼花はいつの間にか入れ替わっていた。ワゴン車の屋根の上に立っている涼花は三枚の手拭いを手に取って澄ました笑みを浮かべており、代わって運転席に座ってハンドルを手に持ちアクセルを踏む重勝はワザとらしく口笛を吹いている。

爛「何!?!何故マシンを運転していた筈の涼花が其処に居て重勝が運転席に座って得意気にハンドルを握っているんだ!?!」

重勝「ん?言つてなかつたか?俺もライセンス持ちだぜ、姫ツチ程高度なドラテクはできねーけどな!」

爛「くっ!前に出たシヨウ達に気を取られている隙に入れ替わったのか!マズイな、涼花の伐刀絶技から考えて、コイツ等がやろうとしている事は恐らくレースでゴールする時に横一直線の接戦だった場合、ギャグ系レースのオチとしてよく使われる必勝の一手——」

涼花「これで勝負有りよ!鉄化(エンダーンアイゼン)っ!!」

ゴールまで残り50mを切った瞬間、涼花は屋根の上から前に身を乗り出すようにして三枚を振じって縛り連結させた長棒状の手拭いを鉄化させて鉄の長槍を練成し、それを前方に突き出した。

爛「やられた!これだと俺達のマシンがゴールラインを切る前に涼花が前に突き出した槍がゴールに届いてしまう!!くっ!このゴールまでの距離ではさすがにもう打つ手が間に合わないか!!」

ゴールまで残り10m・・・今から対応するには鬼神の帝王(クレイジーIIグラント)と呼ばれている爛でも流石にお手上げの距離だ。これでこのレースの勝者は重勝と涼花に確定したと言っても過言では無いだろう。

そうなったらもう、あとはゴールラインを割るだけだ。ゴールまで残り後5m・・・4m・・・3m・・・2m——

を編集したDVDをプレゼントするわね♪元の世界に帰ったら皆で仲良く観賞しなさい！」

シヨウ「おっ、悪いな！大切にするぜ！」

爛「俺達にも貰えるのか、随分と気前が良いな・・・」

六花「帰つたらリリー達も呼んでみんなで観賞会だね！僕と爛のラブラブドライブ、これを見せた時のみんなの悔しがる顔が目には浮かんで堪らないなあ、グフフフ！」

爛「ヤバイ、このDVDをリリー達に見せたらとんでもない目に遭う気がしてならない。帰ったらコレはどこかに封印しておこう・・・」
加々美『天崎翔選手、エリシア・ヴェルモンド選手、本当に優勝おめでとうございます！これにて初のゲストを招いて行われた「Sky Blue Grandprix」の幕を下ろさせていただきます！
実況はこの私、日下部加々美！』

霞『解説は俺、千種霞がお送りいたしました！』

加々美『画面の前の皆さん！また会う日まで！さようならーーーーーっ!!』

白熱のレースが幕を下ろしたその頃、シャトルを脱出した蒼空主人

2017年大晦日「クイズ蒼空の魔導書の記述 あんなくごとと こんなくごと あったくでSHOU」
年末スペシャル！

暖房、ホットカーペット、そしてコタツ・・・この大晦日の夜、我らが蒼空主人公ズはありとあらゆる暖房器具で暖められた質素な部屋でぬくぬくグータラと過ごしていた。

ルーク「あゝ、あつたけえ。こんなに寒い日はコタツに限るぜ」
幸斗「まったくだぜえゝ、あゝ、みかんうめえゝ」

出雲那「この世界の物は蒼空の本体（作者）の妄想で具現化されつつからコタツ+ホットカーペットの超HW（ハイワット）コンボをやってもブレーカー落ちねえからなく、マジ最高」

世界の性質を利用して庶民の冬の贅沢の限りを尽くす三人は極楽のあまり顔をだらしなく緩ませている。大晦日だからと言ってこの主人公だらけ過ぎではないだろうか・・・。

出雲那「にしても蒼空が二次創作書き始めてからもう二年が過ぎたのか・・・今まで色んな事があったよなあ」

幸斗「そだな。【運命を覆す伐刀者】なんか今月で五十話達成だし、随分と遠くに来たもんだぜ」

ルーク「なあ？どうせこのまま年明けまでグータラしてるんだし、せっかくだから今までの事を語り合わねえか？」

幸斗「おつ、それ乗った！オレの選抜戦での熱い戦いの軌跡を熱く語ってやるぜ！」

出雲那「【幻想戦記クロス・スクエア】の連載がまだ一年しか経ってねえからオレは話せる事が少ねえけど、まあこれからの意気込みを決めるのにこれまでを振り返ってみんのも悪くねえか・・・」

??『ふっふっふ、話は聞かせてもらいました！』
ルーク「へっ？」

幸斗「何だ？どっからか野郎の音が・・・」

出雲那「誰だ!?隠れてねえで出てきやがれっ！」

声は聴こえど姿は見えず・・・突如として聞こえてきた奇妙な男の
声に困惑して主人公ズはコタツから出て立ち上がり辺りを見回すが、
目に見えるのは質素な部屋の壁と天井のみで人らしき姿や気配など
どこにも見当たらない。

??『そういう事なら丁度いい企画があるんだよなく、君達三人には
その企画に参加してもらおうとしましょうか♪』

出雲那「聞けよ人の話をっ！」

??『それでは三名様、《クイズ蒼空の魔導書の記述 あんなくこくと
こんなくこくと あつた〜でSHOU》の特設スタジオにご案内く
いっ♪』

出雲那「コラツッ！話を勝手に進めんじゃn——」

どこの誰だかわからない声の主の自己中つぷりに出雲那がキレか
けて文句を言うが、言い終わる前に突如として部屋の天井にワーム
ホールが出現し、なんと彼等を部屋中の暖房器具ごと吸い込みだした
ではないですか。

出雲那「——つて何いいいいいいいっ!!?」

幸斗「何でワームホール？普通床が抜けて落とされるとかじゃね
？」

??『君達は三人共飛（跳）べるでしょう？落とし穴なんて意味が無
いだろうから【吸引力の変わらない世界でただ一つのワームホール】
なのさ♪』

ルーク「そのキャッチコピーは掃除機だろうが！ふぎけんなあああ
あああっ!!」

そのルークのツッコミを最後に蒼空主人公ズはワームホールに吸
い込まれて行ったのだった・・・。

暗い闇に覆われた空間・・・その空間の中央が今、無数のスポットライトに照らしだされた！

加々美「2017年大晦日！」

霞「今宵、蒼空の魔導書の投稿作品の今までを振り返る——」

加々美&霞「クイズ蒼空の魔導書の記述 あんなくくと ことなくくと あつたくでSHOU」年末スペシャルウウツ!!」

ライトに照らされて現れた日下部加々美と千種霞がバラエティー番組の司会者のようにマイクを手に持ってそう言うと言うと闇の空間に光が満ちる。

天井に設置された無数のスポットライトに巨大なモニター、奥の壇上には前面に小型のモニターが取り付けられた机が六つ存在し、蒼空主人公ズは三人共その六つの机の席にそれぞれ個別に分かれて座っていた。

ルーク&幸斗&出雲那「なつ、なんじゃこりやあああああああああああつ!!」

訳も判らず素つ頓狂にシャウトする蒼空主人公ズ・・・叫びたくなるのも無理はない、ワームホールに吸い込まれてしまったと思っただらいつの間にかこんなクイズ番組のスタジオのような場所の解答者席に座っていたのだから。

カナタ「ルーク、お前うるせーよ。耳鳴りがするだろーが」

ルーク「ぬおつ!!カナタ? テメエいつの間に俺の隣に座ってたんだよ!?!」

涼花「このお馬鹿。人の隣で何馬鹿デカイ声をあげてんのよ・・・」

幸斗「うおつ!!涼花?」

明日香「武内君、気持ちは分かるけれど人の迷惑は考えた方がいいわ」

出雲那「いや、お前何平然と人の隣に座ってたんだよ!?!つうか此処何

所だよ？」

クロエ「あはは、なんだかまた何かをやらされるみたいだね・・・」
ロイド「見たところ此処は何処かのスタジオみたいですね」

重勝「でもって俺達が今座っている席の机にある物はタッチパネルとタッチペン。それから・・・何だ、この人形？」

??「あら、カワイイわね。ピンク色のポニーテールと愛らしい吊り眼がキュートだわ♪」

善吉「てかコレ、シグナム先輩じゃねーか!?何であの人のSD人形が全部の席に四つ置いてあるんだよ?しかも一個だけ何故か金髪だし!!」

マイ「あはは・・・なんかこれ何所かのバラエティー番組で見たよ
うな・・・」

上の段の左側にルークとカナタ、その中央に幸斗と涼花、右側に出雲那と明日香が——下の段の左側にクロエとロイド、右側に善吉とマイ、そして中央には重勝と「運命を覆す伐刀者」の世界で貪狼学園の生徒会長をやっている《更識楯無(さらしき たてなし)》が何故かそれぞれペアで解答者席に着いている。

なんでも全員それぞれの大晦日を過ごしている最中に強制的に転移させられたとか・・・。

出雲那「おい、マスゴミビッチにネクラ社畜!これはいったいどういう事だよ!?説明しろ!!」

加々美「マスゴミビッチってひどくない!?私には「かがみん」ってあだ名があるからできればそう呼んで欲しいんだけど!!」

霞「社畜は事実だけど、ネクラのつもりはないんだけどな・・・まあどうでもいいか。んじゃクイズのルールを説明すんぞ」

善吉「いや、別にそんな事聞きてえんじゃねーから!!」

霞「このクイズは過去に蒼空の魔導書の奴が投稿した作品に関する問題が全部で合計三問出題されまーす。解答者である君達は今回も解答者席に座っている人同士でペアを組んで、見ての通りの計六チームで出題される問題の答えをその解答用のタッチパネルに書いて競って優勝を競ってもらいまーす(棒)」

ロイド「司会の人達ツツコミをスルーしてルール説明を始めてしまいましたね」

加々美「解答時に解答者の六チームはそれぞれの席に置いてある三つの《シグナムちゃん人形》と一つの《スーパーシグナムちゃん人形》の内の一つを賭けてもらいます！正解したチームには賭けたシグナムちゃん人形に応じた数のシグナムちゃん人形が与えられます、通常の「シグナムちゃん人形」を賭けていた場合は一個、そして「スーパーシグナムちゃん人形」を賭けていた場合は三個です！」

霞「そんなでもつてもし解答を外した場合はそのチームが賭けたシグナムちゃん人形またはスーパーシグナムちゃん人形はボツシュートさせてもらいまーす（棒）」

善吉「世界ふ〇ぎ発見かつ!？」

マイ「どおりで何所かで見た事があるなと思った・・・」

加々美「なお、賭ける時にその出題されている問題の作品に出ている人のチームはその時に限りスーパーシグナムちゃん人形を賭ける事ができますくん♪更にボツシュートされなくても前の解答で賭けに出したシグナムちゃん人形及びスーパーシグナムちゃん人形は再び賭ける事はできません！そして三問を終えた時点でより多くのシグナムちゃん人形を所持していたチームが優勝となりまーすっ!!」

重勝「それはいいんだけどさ、何でシグナムなんだよ？」

加々美&霞「それでは参りましょう！第一問っ!!」

解答者全員「「「「話を聞け!!そして勝手に始めるな!!」「「「」」

ルーク達のツツコミはスルーされ、解答者席の隣にある巨大モニターの画面に蒼穹の大空に浮かぶ学園浮遊都市《ミストガン》が映し出された。

加々美「最初の問題はライトノベル【空戦魔導士候補生の教官】を原作とした蒼空の二次創作投稿作品の処女作【空戦魔導士候補生の情熱】からの出題です!!」

ルーク「俺達の物語が最初か・・・蒼空のヤロー、今年二話しか更新しねえで他のばかり進めやがって（怒）」

カナタ「おかげで一年経つたのにまだ魔甲蟲の大群勢の都市襲撃が

終わらねーしな」

クロエ「あはは・・・言いたい事は分かるけれど愚痴は後にしてとりあえず問題を聞こう二人共」

モニターの画面が切り替わる。ミストガン内にある全長1kmにも及ぶ規模のすり鉢状の【闘技場（スタジアム）】が映し出され、続きざまに闘技場フィールド内の空中で二組の五人小隊が入り乱れて魔法戦を繰り広げる映像が映し出された。

加々美「【空戦情熱】は原作より四年前の空白期——原作主人公のカナタ・エイジ君が空戦魔導士科（ガーディアン）予科一年生の新入生としてミストガンの学園に入学する時系列である【エグザイル歴四三六年】が舞台のオリジナルストーリーで展開される物語ですが——」

説明の途中でまたもや画面が切り替わり、今度は別格のオーラを漂わせている昔の飛空士が身に着けるようなゴータル付きの革の被り物を被っている細目の少年を中心とした五人の小隊メンバーが映し出された。

加々美「——この物語においてのこの年度のミストガンの特務小隊（ロイヤルガード）《S45特務小隊》は通称何というチーム名で呼ばれているのでしょうか？シンキングタイムスタートッ!!」

全チーム解答開始——

ルーク「へっ、こんなの考えるまでもねえな！」

ロイド「まあ、僕達にとっては知ってて当たり前前の常識ですからね」
カナタ「どうかその内二人が知り合いだしな」

クロエ「ふふっ、なんかわたし達に有利過ぎる問題で他の皆に申し訳ない感じがするね。でもここは確実にポイントを稼いでおこうよ」

幸斗「うくん、わからねえ。バ○アン七皇とかじゃね？」

涼花「お馬鹿、どう見たって五人にしか見えないでしょう」

楯無「ホント可愛らしいわねえ、一つお持ち帰りできないかしらコレ？」

重勝「扇の角でシグナム人形突ついて遊んでねーでお前も考えろ

よ」

出雲那「ん、確かなんかの漫画に出て来るチームがモデルだった筈だ。確か——」

明日香「漫画とかアニメとかよく解らないのだけれど、五人だからプ○キュア5とか・・・」

マイ「明日香、三人男だよ。でも一番右端にいる女の子はカワイイね」

善吉「言っておくがマイ、ああ見えてアレも男だからな!!しかも俺達と同じ年っ!!」

全チーム解答終了。

霞「シンキングタイム終了〜と」

加々美「さ〜てそれではまず全チーム賭けに出すシグナムちゃん人形を席の台座に置いてください!」

霞「解つてんだろうけど、ルーク&カナタチームとクロエ&ロイドチームは空戦情熱の世界の奴等だから金色のは賭けられないからな〜」

そして各チームが選んだシグナムちゃん人形がポンポンと台座に置かれていく。

加々美「これは全チームがスーパーシグナムちゃん人形を使わず無難に六つのシグナムちゃん人形が出揃うという結果となりました」

霞「最初は様子見つてところか?まあ、下手に博打打って破産したら元も子もないしね。堅実な人生が一番って事か・・・」

加々美「私はいつか特大スクープを記事に載せて一山当ててみせませよオ〜っ!それでは、アンサーオープン!!」

加々美の声と共に全チームの解答が巨大モニターに表示され、同時に各チームの席の前面にある小型モニターにそれぞれの解答が表示される。

*各チームの解答——

ルーク&カナタ：眠りの森（スリーピングフォレスト）

クロエ&ロイド：眠りの森

幸斗&涼花：眠りの森

重勝&楯無：眠りの森

出雲那&明日香：チーム5D's

善吉&マイ：眠りの森

出雲那「——ってアレ？オレ等以外全員同じ答えって・・・」

明日香「・・・」

善吉「お前らアホかつ!?何所をどう見たらアイツ等がバイクに乗ってカードゲームをする集団に見えるってんだよ!!」

加々美「それでは答えが出揃いましたあく。正解はこちらっ!!」

テツレツレー！加々美の声と共にモニター画面の出雲那達以外の解答の背景が青からピンクに変わった。

霞「正解は《眠りの森（スリーピングフォレスト）》！出雲那&明日香チーム以外のチーム全てにシグナムちゃん人形を一つずつプレゼント！」

幸斗「うおっ!?すっげ、机から同じ人形が「ニユツ」って生えてきた！」

霞「それでもって不正解だった出雲那&明日香チームが賭けたシグナムちゃん人形はボツシュートさせていただきまーす！」

出雲那「クツソ、すまねえ終。オレが勘違いしたばかりに……ん？」

解答を間違えた事を出雲那が苦い面で明日香に謝罪をしようとしたその目の前で、いきなり彼等の台座に置かれたシグナムちゃん人形がなんとピヨコつと動き出した。

明日香「あら、この人形自律起動するのね。いったい何をするつもりなのかしら？」

明日香の疑問に答えるようにシグナムちゃん人形はどこからかミニサイズのレヴァンティンを取り出した。そして——

テレッテレ——グサツ！

出雲那&明日香「「あっ?」」

善吉「自害した——っ!!?」

腹にミニレヴァンティンをブツ刺しコテンと可愛らしく俯せに倒れて動かなくなるシグナムちゃん人形……そのまま台座の床が沈ん

でボツシユートされて行くそのシユールな姿に解答者一同は凍り付くのであった……。

ルーク「なんつじやこりゃあああああつ!!?」

幸斗「シグナムちゃん人形が死んだ!」

出雲那「この人でなし!」

霞「まあまあお落ち着けて、シグナムパイセンの死に芸はもうこの作品の看板みたいなモンだろ?これぐらいでいちいち騒いでんじやねえよ」

涼花「蒼空の奴そろそろシグナムファンの誰かに背中から刺されるんじゃないかしら?」

加々美「あはは……それでは次の——ひゃあああんっ♥」

不正解だと賭けたシグナムちゃん人形が自害してしまうという一部の人達が怒り出しそうなシステムの所為でビミョーな空気になった中で次の問題に移ろうとしたその時、何者かがいつの間にか加々美の背後に回り込んでいて彼女の豊満な乳房を両手でネットリと掬い上げるように服の上から鷲掴み、揉み揉みしていた。

??「うほっ♪この弾力とボリウム堪らへん!ええオツパイやなく♪」

加々美「あっ♥んっ!やめっ、ああんっ♥」

ルーク「つてソラ兄!?!何してんだよこんなところで!?!」

その正体は先程巨大モニターに映し出されていたS45特務小隊の中心に居た細目の少年——隊の小隊長にして《空の王(アトモス)》の異名を持つ現学園浮遊都市ミストガン最強の空士、そしてルークの兄貴分でもある男《ソラ・グロリー》その人であった。

ソラ「いやあなんや、大晦日やからボウズ(ルークの事)達と忘年会をしようと思うて呼びに来たんやで♪」

加々美「んっ!やあんっ♥」

クロエ「いやいや!今目的と行動が一致してませんよね!?!なんで加々美さんの胸を揉んでいるんですか!」

ソラ「そんなこないなカワイイ嬢ちゃんのデツカくてエツ口いオツパイが目の前に有ったならモミモミせえへんと失礼やろがつ!

つも霞はクイズの進行を再開する事にした。

霞「次は今日で丁度連載一周年を迎えた多重クロスオーバー作品【幻想戦記クロス・スクエア】からの出題」

巨大モニターには四角の形をした独特な島の上にある学園都市が映し出される。

出雲那「今度はオレ達の物語か。第一章の【壊れた非常識な日常編】もそろそろ大詰めだな！」

明日香「宿敵である【終末の蛇（ヨルムンガンド）】の執行者達と死闘を繰り広げたり、風紀委員長のクレア・ハーヴェイ先輩の偽物が出てきたり、シグナムさんが武内君の雷切によって一撃で昇天したりと最初の章だというのに凄く濃い内容だったと思うわね。今は武内君が危機的状况だけど、プロである私が付いているんだもの、何としても今回の異変を無事に収束させてみせるわ！」

マイ「張り切っているね明日香！私も頑張らないと」

善吉「ていうかこの作品でシグナム先輩の死に芸が横行しているのってウチ（クロス・スクエア）の所為だろ絶対っ!？」

シグナムが出雲那にボロ負けするのはいつもの事なので善吉の叫びなど気にも留めず霞は問題の内容を説明し始める。モニターに映し出されたのは【騎士甲冑を身に纏う鳳凰】のエンブレムだ。

霞「物語の舞台である【戦島都市スクエア】には俺や武内達が在学している【青竜学園】をはじめ【ヴァイスファンング学園】や【聖ルシフェル学園】などの四つの戦士育成学校——まとめて【四大学園】と呼ばれる教育施設が点在しているけれど、季節毎に行われる四大学園対抗の闘技大会【四武祭（フェスタ）】においてここ三年間全ての大会で例外なく全てのタイトルを勝ち取っている名門中の名門校の名前は何？」

加々美「シンキングタイムスタートッ!!」

全チーム解答開始——

出雲那「クツソー、それにしても【奴等】には毎度毎度優勝を持って行かれて悔しいったらありやしないぜ！今年の四武祭は四つ全てオレ達青学が取ってやる！プライドに懸けてな!!」

善吉「カツ！当たり前だろ！俺は「アイツ」をブツ倒す為に青学に入っただけだからよ!!」

マイ「私もできるだけ皆のチカラになるよ」

明日香「四武祭か・・・異界探索の妨げになりそうだし、たぶん私は全ての大会の出場を辞退するかもしれないわね・・・ちよつと残念だけど」

ルーク「出雲那達でも勝てないとかどんだけバケモノ集団なんだその学園？」

ロイド「なんでも件の学園には世界に名を轟かせる程の猛者が多く在籍しているらしいですよ」

クロエ「中でも今の生徒会長である高等部一年の女子生徒は中等部時代に過去三年間全ての四武祭に出場してその全てで必ずベスト8以上の高成績を残したんだって。それでその人はその眼で【観た】相手の技・技術・異能を再現し【完成させて自分のモノにする】《完成（ジエンド）》という名のキチガイな能力を使う魔女（ストレガ）で実家は世界経済を担う冗談みたいなお金持ち、おまけに超が付く程の美人で欠点が見当たらない事から《完全無欠の聖人（ザ・パーフェクト）》という異名で呼ばれているそうだよ」

カナタ「ふーん。世の中にはとんでもねー奴が居るもんだな・・・」
幸斗「出雲那達でも勝てねえのか!?!やべえ、オレそいつ等と戦いてえっ!!」

涼花「いいからアンタも考えなさい。クロス・スクエアのストーリーが進めばこの作品にも反映されるんだから、どうせその内このカーニバルに出て来るわよ・・・蒼空がエタらせなければの話だけど」
重勝&楯無「口にするとフラグが立つから言わねー（ない）方がいいぜ（わよ） 姫ツチ（涼花ちゃん）」

全チーム解答終了。

加々美「シンキングタイムが終了したところで出雲那&明日香チームと善吉&マイチームのスクエア組はもちろん、ルーク&カナタチームとクロエ&ロイドチーム等空戦情熱組も台座にシグナムちゃん人形を置いていきます！そしてなんと幸斗&涼花チームと重勝&楯無

チーム等伐刀者組はスーパーシグナムちゃん人形を賭けに出してお
りますっ!!」

霞「まあ消去方で考えて最後の問題はアイツ等の物語から出題され
るだろうから、ここで使つとかないともう使えねーし、当然だな」

加々美「それでは——アンサーオープンッ!!」

*各チームの解答——

ルーク&カナタ：鳳凰学園

クロエ&ロイド：ナイツニクス学園

幸斗&涼花：ナイツニクス学園

重勝&楯無：氷帝学園

出雲那&明日香：ナイツニクス学園

善吉&マイ：ナイツニクス学園

霞「んじや正解の発表」

テツレツレー!【ナイツニクス学園】と書いたチームの解答画面の
背景がピンク色になった。

加々美「正解は【ナイツニクス学園】でした!出雲那&明日香チー
ムと善吉&マイチームにシグナムちゃん人形を一つ、そしてスーパ
ーシグナムちゃん人形を賭けていた幸斗&涼花チームにはシグナム
ちゃん人形を三つプレゼント!!」

霞「そして間違えた奴等が賭けたシグナムちゃん人形はボツシユ
トさせていただきます」

テレツテレツ——グサツ!空戦情熱組が賭けたシグナムちゃん
人形と重勝と楯無が賭けていたスーパーシグナムちゃん人形が先程
と同じように動き出し、一斉に自害した後に台座よりボツシユトさ
れて行った……。

善吉「……今思ったけどシグナム先輩って槍使わねー筈だよ
な……何で某槍兵みてーなネタで扱われてんだ?」

ルーク「アレ?鳳凰が描かれた校章だったからこれで合っていると
思ったんだが……」

ロイド「見たまんまの名前な訳がないでしょうに……」
クロエ「あっちゃー、ケアレミスで間違えちゃったね」

重勝「・・・おい楯無、お前に任せたのは俺が悪いけれど、何だよこの【氷帝学園】って!? テニヌか? 王子様か!? 王者名門は【立海大】だろ!!」

楯無「おーほっほっほっ! その氷一つ一つがお前の弱点よっ!! なんてねっ☆」

【私の美技に酔いな!】と書かれた扇を広げてワザとらしく下手なお嬢様笑いをして楯無が場を掻き乱す——横で何時の間にか黒く美しい長髪が眩しい凜とした顔つきの美少女が楯無と全く同じポーズをしてその場に陣取っていた・・・純白の下着姿で・・・。

楯無「って誰君、いつの間につ!!」

???「気にするな、ただの通りすがりの生徒会長だっ! (凜っ)」

重勝「俺が全く気配に気付けなかつた!? 何者だ、この痴女」

突然現れた自称【通りすがりの生徒会長】。その正体は解答者の内の一人にとって招かれざる客であった。

善吉「ゲツ! めだかちやん——《黒神(くろかみ) めだか》!! なんてでめえが此処につ!!」

そう、彼女こそが噂の【完全無欠の聖人】黒神めだかである。

めだか「つめたいな善吉、そんな家の面子の所為でたった一つの決められた学園にしか入学する事が許されない私を置いて別の学園に入学した薄情者の幼馴染の顔を見に来たに決まっているだろう! だが安心しろ、私はそんな薄情者の貴様の事を嫌ったりはしないぞ! 今でも私は貴様の事が大好きだっ!! (凜っ!)」

出雲那&明日香「愛の告白っ!」

善吉「いいいいいから服を着ろ服をつ! ていうか何で下着一丁なんだよ!? 人目をはばかれて何回言ったら分かるんだてめえはっ!!」

めだか「?・・・さっぱりわからん。練り上げたこの肉体を衆目にさらすことに一体何を躊躇う必要がある? 寧ろ見てくれ! 肌をジロジロと見られるとゾクゾクして気持ちが良いのでな!!」

重勝達の席を立ってバツと純白のブラジャーに包まれた美巨乳を強調するポーズを取るめだか。

カナタ「変態かよ・・・」

ロイド「変態ですね・・・」

めだか「フツ、何とでも言う方がいい！」

涼花「変態痴女過ぎて小動物も逃げ出すわね」

めだか「がはっ!!?」

かいしんのいちげき！西風の鉄の乙女（アイアンメイデン）の毒舌が完全無欠の聖人に9999999の限界突破特大ダメージをあたえた。

めだか「私は・・・私はどうしようもなく駄目な変態だ・・・可愛い小さい小動物になついてももらえないなんて・・・」

霞「・・・クイズの進行の妨げになるからそろそろ部外者には退場してもらおうか」

霞がそう言つて何やらラジコンのコントローラーのような物を取り出し操作する。すると【ずくん】と床にブツ倒れている変態痴女の頭上から巨大なUFOキャッチャーのアームのような物が下りて来て変態痴女が衆目に晒している純白のブラジャーの紐を掴み、そのまま変態痴女を宙吊りにしてスタジオの端に何故か存在している通風孔にダストシュートをしたのだった・・・。

カナタ「・・・なあクロエ、今の変態痴女がさつきお前が言つてた欠点が見当たらない【完全無欠の聖人】なのか？」

クロエ「わたしはあくまでも噂の内容を話したただだからね！」

霞「んじや文字も一万字超えちまったし、とっとと最終問題やつて終わりにすんぞ」

一同「（（（（（身も蓋もないなっ!!）））））」

霞「最終問題。当然残つた【運命を覆す伐刀者】からの出題だな、ライトノベル【落第騎士の英雄譚】を原作とした二次作品で生意気にも前の更新で50話を達成した蒼空の魔導書の作品の中でも一番の人氣作だ」

巨大モニターにお馴染の破軍学園が映し出された。（最早テキストである）

幸斗「やつとオレ達の物語の番か。最近オレなんかB〇EACHの〇護みたいに出番が遠のいている気がするんだけど・・・」

涼花「【学内選抜戦編】もクライマックスだというのになんか重勝の過去話なんてものをはじめてしまったのだしね。一部の読者からも【これ重勝が主人公じゃね?】なんて言われているわよ」

重勝「ハハハハッ! まっ、俺の過去をやり終わるまでの辛抱だぜ。これが終われば今までの伏線を一気に回収するお楽しみのお選抜戦最終戦が始まるんだからな!」

楯無「因みに選抜戦最終戦を終わらせて【学内選抜戦編】が終了したら、今活動報告でやっている人気投票でベスト3になったキャラ三人をメインにしたそれぞれの番外編を書くみたいよ。人気投票は今日までが締め切りだから、みんな投票よろしくね♪」

【締め切り迫る!】と書かれている扇をバツと開く楯無のメタ発言を後目に巨大モニターには今まさに鬼童丸を振り上げんとする幸斗の姿が映し出された。

霞「【運命を覆す伐刀者】の熱苦しい熱血野郎な主人公【真田幸斗】は魔力量F-の無才伐刀者でありながらも過去の傭兵生活で想像を絶する鍛練や数多の戦場を踏み越えて攻撃力EX(測定不能)の埒外の膂力を一から鍛え上げた規格外のEランク伐刀者ですが、原作のヒロインであるステラ・ヴァーミリオンを選抜戦敗退に追い遣った決定打にもなった幸斗の代名詞である最強の必殺技の技名は何でしょうか?」

加々美「ラストシンキングタイムスタートツ!!」

全チーム解答開始——

幸斗「へっへーんっ、楽勝! オレの自慢の必殺技だからな!!」

重勝「リミッター付きで関東地方の約半分を日本地図から消せるレベルのド派手な一撃だからインパクトがデケーしな…: まったく、七年前の【あの戦い】でいきなりお前がコイツをブチかました時は俺でも胆を冷やしたもんだぜ」

涼花「重勝、気持ちは理解できるけれどそれはまだ本編で出していないネタバレだからこれ以上は止しておきなさい。後、重傷になるまで痛めつけた相手を拘束した上で禁技指定級の伐刀絶技でオーバークイルするアンタが言えた義理じゃないでしょう」

楯無「ふふっ、まさに幸斗君を象徴する【究極の一】ね♪しかもこれが魔力を一切使用していない【剣圧】だって言うのだから驚きだわ」
ルーク「この前のアトラクションで幸斗と出雲那と一緒に月に行つた時に初めて見たけど、凄すぎて言葉にならなかつたぜ。月の約四分の一をブツ壊したんだしな！」

カナタ「ただの剣圧ですら山を消すし、ホント幸斗ってブツ飛んだ奴だよな。重勝の奴は一体幸斗にどういう教導をしたんだよ？」

クロエ「昔は何をやってもダメダメだったって聞いたから、きつとどんなに苦しくても限界を超え続ける超特訓だったに違いないよ♪」

ロイド「何でそんなに嬉しそうにしているんですか・・・」

出雲那「ああ、月面基地に行つたあの時はマジで死ぬかと思つたぜ・・・(汗)」

明日香「ただでさえ人の想像を絶する膂力を持っている上に【戦場の叫び(ウォークライ)】によつて集中的に強化した両腕を全力全開で振るい、その手に持つた霊装の規格外過ぎる剣圧で強大な事象改変を引き起こして16・8PJ(ペタジュール)の波動砲を撃ち放つ超破壊の一撃・・・剣圧だけでプルトニウム爆弾(長崎原爆)二百発分の威力を叩き出すなんて馬鹿げているわ。しかもこの数字はリミッター付きで計つた発生エネルギー量だとか、呆れを通り越してもう笑うしかないわね・・・」

善吉「怖っ!!なんじゃそりゃあ!!?リミッター付きの時点でスクエアの都市全域を消滅させて余裕でお釣りが来るレベルの規模じゃねーかよっ!!!」

マイ「幸斗はこれまでにこの技で気象庁の人工衛星や国の惑星探査機を宇宙の塵にしちゃつた事があつたんだってさ。おかげで破軍学園の理事長の胃がもう危ないかもって噂だよ」

全チーム解答しゅーりよー!

加々美「さて!最後に各チームが賭けたシグナムちゃん人形は幸斗&涼花チームと重勝&楯無チームはルール上当然通常のシグナムちゃん人形を!そして残りの4チームは全てこの最終問題まで取つておいたスーパースングナムちゃん人形を台座に置きました!!」

霞「ふあくあ、これでようやく終われるな・・・そんじや——ア
ンサーオーブンツ！」

*各チームの解答——

ルーク&カナタ：龍殺剣（ドラゴンスレイヤー）

クロエ&ロイド：獄殺剣（ダーインスレイヴ）

幸斗&涼花：龍殺剣

重勝&楯無：龍殺剣

出雲那&明日香：龍殺剣

善吉&マイ：究極戦略兵器剣（アルテマウエポン）

加々美「最後の解答が出揃いました！ここまでで幸斗&涼花チーム
がシグナムちゃん人形七つにスーパシグナムちゃん人形一つでトツ
プ！二位である善吉&マイチームに2ポイント差をつけております
！！」

霞「果たして優勝の栄冠に輝くのはどのチームなのかー（棒）。とつ
とと終わりにして明日葉ちゃんと兄妹水入らずの大晦日を過ごした
いところだし・・・そんじや最後の正解をはっぴょうっ！」

テツレツレー！【龍殺剣】と書いたチームの解答画面の背景がピン
ク色に変化した。

加々美「正解は【龍殺剣（ドラゴンスレイヤー）】でしたっ！幸斗&
涼花チームと重勝&楯無チームにシグナムちゃん人形を一つ！スー
パーシグナムちゃん人形を賭けていたルーク&カナタチームと出雲
那&明日香チームにはシグナムちゃん人形を三つプレゼント!!」

霞「例によって例の如く、間違えたその他のチームが賭けていた
スーパーシグナムちゃん人形はボツシュートさせてもらう・・・ハア、
もう面倒だしこれでいいか・・・」

霞はどこからか自爆スイツチの端末を取り出して手に持った。

善吉「ちよ、ちよつと待てっ！アンタ何しようとしてんの!?止め
ろおおおっ!!!」

霞「いいや！早く愛する明日葉ちゃんに会いたくて限界だ！押す
ねっ!!!」

ポチツとな。

h———」

そして偶然飛行魔法で夜空を巡回中だったシグナムを飲み込み周囲の雲を吹き飛ばして大気層を突き貫く、そのまま衛星軌道上の人工衛星をも宇宙の塵にして、月をバツクに大きな花火が咲き乱れたのだった。

幸斗「たーまやーってな！みんなっ!!来年も蒼空の魔導書の奴が投稿する作品をよろしくなっ!!!」

涼花「このおおバカッ！せっかくまともに終われると思ったのにスタジオがメチャクチャじゃないのよ!!」

重勝「ハハハ、周辺の建物も倒壊したしな！」

霞「ああ・・・また事後処理で残業かよ・・・(泣)」

加々美「あはは・・・休憩用の年越しそばでも用意しておきますね」
善吉「こんなザマで来年もやって行けるのかよ？カツ！先が思いやられるぜ・・・」

明日香「頭が痛いわ。神話級グリムグリードの出現並に・・・」

クロエ「まあまあ。花火綺麗だし、この方がわたし達らしくて良いじゃないですか」

カナタ「正直季節外れだけどな・・・まっ、いいんじゃないか？」

出雲那「そうだな・・・今年ももう終わりだ、過ぎ去る過去は思い出に変えて！」

ルーク「来年(あした)に向かって前進あるのみだぜっ!!」

彼等は征く！見果てぬ未来(さき)まで続く戦いのロードを!!

天の光は星々の輝き。そして今回も犠牲になったシグナムが、この大晦日の夜天で微笑んでいるような気がした・・・一筋の流れ星と共に。(キラッ☆)

風雲聖王のゆりかご城【城攻編】 ※ゲスト有り

ルーク「荒ぶる最強の空戦魔導士のポーズ！（シヤツキーン！）」
ハチャメチャな平和な日々が続く蒼空ワールド。

ルーク「へっ！決まったぜ・・・ん？」

そんなクソが付く程蒼い空に、突如として暗雲が立ち込めた。

ルーク「な・・・何だアレh——ぎにやあああ“あ”あ”——っ
!!」

油断して絶対空気感覚（フィール・ザ・アトモスフィア）を狭めた
所為で落ちて来た雷に打たれたマヌケが真っ黒焦げになって空から
落ちて行く・・・その直後、暗雲の中から謎の巨大城塞空中戦艦が姿
を現したのだった・・・。

「同時刻、学園浮遊都市ミストガン空戦魔導士科執務室——

????「よく集まってくれたな、選ばれた精鋭共。俺はミストガンの空
戦魔導士科長（ガーディアンリーダー）、《ジョバンニ・ジョルフィー
ド》だ。早速だが作戦の説明を始めさせてもらおうぜ」

背後の巨大空間モニターに映る突如として空に現れた巨大城塞空
中戦艦を指し棒でさし、身長190cmの長身で筋肉質な偉丈夫——
—ジョバンニが目の前に集まった10名の精鋭達に毅然と作戦内容
の説明を始めようとしていた・・・のだが。

幸斗「ぶはははっ！何だあの戦艦？紫色のデツカイ紙飛行機っぽい
モノの上に安〇城が乗ってやがるんだけど——っ!!」

出雲那「ちよつ、幸斗!?!たぶんここにいる全員が思った事を口に出して言うなよ!笑うの我慢できなくなるだろ・・・だ、だめだ。ぎやははははっ!!」

モニターに映る城塞空中戦艦が実にヘンテコな形をしていたので一同はそれを見て騒然(笑)としていた。

楯無「あはは、アレってもしかしてリリカルな聖王のゆりかごじゃない?ぷぷっ。な、何で○土城を乗せているのよ?(【奇天烈】と書いてある扇を開きながら)」

重勝「前から思っていたけど、あの形デザインした奴、相当頭ん中チャランポランじゃね?」

明日香「私はそれよりも何で安土○みたいな和風な城がゆりかごの上に建てられているのかが気になるわ・・・聖王が治めていた古代ベルカつて欧州に近いイメージだったのだけど・・・」

ジヨバンニ「イラッ!」

???'「・・・はあ・・・」

人が説明しようとしている時に騒ぎ立てる連中に苛立ちを覚えて青筋を額に浮かべる空戦魔導士科長。それを見兼ねた彼の補佐役《フロン・フラメル》が溜息を吐いて集まった精鋭達を見回すと、なんだか人数が足りないような気がした。

フロン「?・・・ねえ、特務小隊(ロイヤルガード)の《リオス・ローレ》先輩は何処にいるの?それと【異世界の助っ人】の姿も見えないのだけど」

フロンの問いに全員が執務室を見回しだした。今回は《新・魔法少女リリカルなのは》と剣神と夜天の輝き《世界の主人公がゲストで来ている為、全員気になっていたようだ。

ジヨバンニ「チツ、どいつもこいつもこの非常時に」

???'&? 「ZZZZ」

楯無「あら?可愛らしい軒が二つ聴こえるわね・・・」

重勝「執務机からだな」

執務机の上の天井ギリギリまで積まれた書類の山を退かすと、そこには黒髪で女寄りな童顔の少年と銀の長髪が目につく薄幸の美少

女・・・もとい俗に言う男の娘が一緒に猫のように丸まってスヤスヤと居眠りをしているではないですか。

明日香&楯無「(か、カワイイ♥)」

出雲那「な、なんだかトニーみたいな事をしているなこの二人。チビで幼女面なのも共通しているし・・・」

重勝「確か黒髪の方がミストガンの特務小隊員のリオスで、銀髪の方が噂の——」

フロン「異世界から助っ人で来た《八雲夜(やくも よる)》よ。まったく貴方達ときたら、少しは緊張感をm——」

フェイト? 「お・・・おお・・・」

出雲那「?・・・フェイト先輩、何震えてんだ? 風邪でm——」

フェイト? 「お持ち帰りイイ——ッ!!!♥」

出雲那「はいイイツ!!」

お昼寝タイムの二人のシヨタつ子の出現を前にフェイト・T・ハラオウンと瓜二つなミストガン【A16小隊】小隊長《フェイト・アストレイ》は己の欲望を抑えきれず、ル○ン脱ぎで下着姿になって喜声(奇声?)をあげ、鼻血を流しながら不○子ちゃくん♥と言わんばかりのル○ンダイブで二人の眠り姫(?)に飛びつこうとする・・・のだが——

??? 「姉さん、いい加減に少しO★H A★N A★S H Iしようか・・・」

魔双剣戦技——旋魂の円刃(ソウルブラー) 殺傷力Over

フェイトA 「ぶげっ!!」

そこはお目付け役である弟兼A16小隊副隊長《アディア・アストレイ》がさかさず魔双剣《スワローテイル》を振るって放った真空円盤によって変態シヨタコン姉さんは横に吹っ飛ばされたのだった。

出雲那「——って、フェイト先輩じゃなかったんかいっ!」

『ズドオオンー!』

リオス「むにゃ?・・・んんん、うるちやいな・・・」

夜「うにゅ・・・みんなや、おは、にゃ・・・うー」

楯無&明日香「ブウウーッ!! (鼻血が噴水の如く)」

幸斗&出雲那「楯姉っ!! / 終っ!!」

作戦を前にして女子三名が特大ダメージを負ってしまおうという不測の事態（笑）。恐るべし男の娘・・・それを余所に壁に無言で背中を預けていた精鋭最後の一人が不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「?????」「フンツ、くだらん。戯れている場合か?」

出雲那「っ!!・・・そーいや、どういうわけかテメエも来てたんだつたな」

「幻想戦記クロス・スクエア」において出雲那の敵である筈の黒外套銀髪褐色肌オッドアイ野郎、結社《終末の蛇（ヨルムンガンド）》の執行者No. XIII《プルート・A・イグナイト》・・・どうやらこのカーニバルは敵味方関係無しに参加させられるようだ。

プルート「莫迦莫迦しい、くだらない事をやっているのならば俺はもう行くぞ」

ジョバンニ「オイツ、テメエ勝手に何所に行くつもりだ!まだ何をするか——」

プルート「あのセンスの無い次元航行艦を墜とせばいいのだろうか? 馴れ合いはしない、俺は勝手にやらせてもらう」

プルートはそう吐き捨てて執務室から出て行ってしまった・・・言う事を聞かない問題児共にジョバンニはそろそろ我慢の限界だ。

出雲那「おいジョジョ!どうするんだよ!?!あの野郎勝手に一人で行っちゃったぜ!!」

幸斗「ジョジョ!楯姉達の出血量がヤバイ!輸血パックは何処にあるんだよ!!」

重勝「ん?・・・おいジョジョ、あの《聖王のゆりかご城》から武士甲冑姿のガジェットが大量に出て来てんぞー。急いだ方が良くないやねーか?」

夜「ん・・・ジョジョ・・・承○郎?」

リオス「アハハツ♪その〇〇の〇〇さ〇〇め〇〇、ジョジョッ!なんちやってね♪」

ブチイツ!

ジョバンニ「ジョジョ、ジョジョとやかましいっ!!鬱陶しいぞこの馬鹿共——ッ!!!」

響き渡る空戦魔導士科長の怒声。結局作戦内容は外に移動しながら通信結晶越しに伝えられる事となった……。

そんな訳で（どんな訳だよ!）地上三千メートルを浮遊するミストガンの十一番区発着場に揃った十名の選ばれし精鋭達！

ジョバンニ『イグナイトの奴がさっき言った通り、ミッションのクリアー条件は此処から約五キロ先の空域に出現した【聖王のゆりかご城】の制圧、及び撃墜だ!』

重勝「さりげなく俺が言った名前を採用しているな……」

ジョバンニ『各員目標の周囲を遊弋する《武者ガジェット》共を駆逐しつつ目標に接近し内部に進入、船首と船尾付近にそれぞれ設置されている駆動炉を破壊し後に上層部の城に進撃、天守閣を目指せ!そこにこの件の主犯が居る筈だ、そいつを倒せばミッションコンプリートだ!』

楯無「既に情報収集済みって、まだあの城塞空中戦艦が出現してから三十分程度しか経ってないわよね!」

因みにこの三十分間で情報を集めたのは某毒舌戦術家であったりする……。

ジョバンニ『ゆりかご城を衛星軌道上に上がらせるなよ!原作のゆりかごと同様に月の魔力を取り込んで艦の性能を上昇させやがるそうだからな!その前に終わらせろ!!』

アディア「メタいですよ空戦魔導士科長……」

幸斗「ま、もしそうなくてもオレが戦鬼の叫び（オーガクライ）＋龍殺剣（ドラゴンスレイヤー）で宇宙の元素にしてやるよ！」

出雲那「お前もう過去の古代ベルカにトリップして戦争終わらせて来たらどうだ？」

夜「ん・・・歴史改変・・・」

ジョバンニ『ずべこべ言つてんじゃねえ、今言つた事を胆に銘じてとつと行け！目指すは風雲聖王のゆりかご城だ!!』

あの空に向かってTake off!

リオス「アハハハ！それにしてもみんな空を飛べるんだね♪」

重勝「跳んでる奴（幸斗）と足場を造つて踏み跳ぶ奴（明日香）も居るけどな」

フェイトA「空に浮かぶ空中戦艦が目標だからこの人選なんだと思うよ。空戦できないとどうしようもないし・・・まあそれよりも、何その夜きゆんのバリアジャケット!?着物！男の娘の着物姿!!萌えええー♥（鼻血ブー）」

幸斗「てか寧音先生がいつも着ているのと同じじゃねソレ？」

フェイトA「夜きゆうくん！こっち向いて♥（鼻血だらだら）」

夜「んっ!」

幸斗「ちよ!?何でオレの背中に隠れやがる？引っ付くなよ!」

夜「んんっ!」

いかがわしい煩惱を鼻から垂れ流して欲情を向けて来るフェイトに身の危険を感じ、必至に幸斗の背中に顔を埋める夜。その彼の行動を目の当りにして一瞬呆然となったシヨタコンは恨めしい歯軋りと同時に眼から血涙を流し、怨念が籠った視線を幸斗に向けるのだった。

フェイトA「よ、夜きゆん・・・おのれ真田幸斗オオオオオオ!」

出雲那「逆恨みでバルディッシュを幸斗に向けるなああつ!!何で名前も顔も声もスタイルも防護服（プロテクター）も魔装錬金武装に至るまでフェイト先輩と全く同じなのに変態なんだコイツはあああああー!」

プルート「莫迦が、前に集中しろ!ガラクタ共が来たぞ!!」

出雲那「——ってテメエ!?【馴れ合いはしない】とか言っておいてオレ達に着いて来てたんかーいっ!! てつきり遙か前に先行しているのかと思っただぜ!!」

ギャーギャーする中、前方から向かって来る武者鎧装甲の飛行型ガジェット達が雨霰の如くレーザーを撃って来る。数、無量大数。

針を刺すような点撃の絨毯攻撃が空を翔ける精鋭達に襲い掛かり、彼等をレーザー群の中に閉じ込めた……しかし——

出雲那「この程度屁でもねえ!」

幸斗「纏めて正面から蹴散らしてやらあっ!!」

夜「んっ!」

普通なら蜂の巣の如く全身を孔だらけにされるのだが、彼等は某時空管理局の魔導師ランクで言えば全員Sランクオーバーを超える戦闘力を誇る規格外軍団、レーザーの嵐の中を絶妙に避けながら縫うようにして進攻、または結界スキルで防御、或いは手に持つ得物やスキルでレーザーを薙ぎ払って降りかかる脅威を次々と駆逐して行った。

重勝「それにしてもこのガジェットドロウンってさ、今撃って来てるのは戦闘機のような形だけど、他はカプセルだったりボールだったりと、デザイン手抜きじゃねーのかって思わね?」

楯無「そうね、ださいセンスよね。このポンコツちゃん達はなんでも古代ベルカ時代に存在した機械兵器を参考にとある科学者が製作したらしいのだけど」

リオス「うん、正直プラモにもならないくらいダサイよね!」

夜「ん……造って……みても……正直邪魔」

慣れてきて余裕ができたのか、レーザーの嵐の中を進みながらガジェットの外見を貶しだす始末……どこかの次元世界で無限の欲望の名で知られる科学者が落ち込んだ気がした。

明日香「捉えた! はああつ、《ブリザードピアス》ッ!」

フェイトA「私のカワイイ天使達(リオス&夜)を傷付けるな! このガラクタ共があああつ!!」

そしてとうとう武者ガジェットの群に接近。同時に精鋭達による蹂躪が始まった。空域のあちこちで汚い花火が次々と咲き乱れ、哀れ

なガジェット達は次々とスクラップになって奈落へと墜ちていく。

夜「ん・・・僕・・・も・・・」

ゲストである夜もやる気のような。《重力を操る程度の能力》で身体を制御し殺到するレーザーを躲しつつ腰に差した刀型デバイス《夜刀（やと）》の柄を握り、身体を捻りながら一体の武者ガジェットに接近——そして自分と敵の影が交差すると同時に鞘から刃を抜き放った。

絶技——夜風ノ爪（よかぜのつめ）

チャキツ！と目にも映らぬ疾さで鞘に刀身を納刀した刹那、後ろの武者ガジェットが無数の鎌鼬現象に切り刻まれて無数の鉄屑に変わり、ガラガラという音を立てて奈落へと落下して行った。

夜「ふ・・・新しい技・・・決まった」

フェイトA「キャー！夜きゆううんっ♥カッコカワイイイイーっ!!」

幸斗「おおおーっ、すげえな！やっべ、ワクワクしてオレ夜と戦いたくなってきたぜ!!」

明日香「これが《劍神》の劍技・・・正直見えなかったわ」

出雲那「ああ、下手をしたら【風の劍聖】並かも・・・てか新技って?」

重勝「ん？蒼空の奴言ってなかったのか？八雲をゲストに借りたお札に新しい八雲の劍技を複数考えてこのコラボで使用させて、本編でも使えるように八雲の生みの親にプレゼンするんだってさ。事前に許可は貰ったみてーだ」

アディア「お気に召してくれるといいんですけどね・・・」

ホントにね。許可してくれてありがとうございます！（感謝）

リオス「あ、大きいハンバーガーだ♪」

夜「ん♪」

出雲那「何でハンバーガーが浮いてんだよ!？」

リオス「はむ♪・・・んんー、おいひー!」

夜「ん♪（もきゅもきゅ）」

フェイトA「シャッターチャンス！フェイトフラッシュユ!!」

アディア「ね・え・さ・ん！（怒）」

んでもって巨大なハンバーガーが雲の中から出現したり、武者ガジェット達の群の中に一体だけイカが混じっていたり、そのイカが剣道三段だったりと色々可笑しなお菓子な事象が発生するが、全員無傷のまま武者ガジェットの数を着々と減らしていく。

プルート「ええい、面倒だ！纏めて灰にしてくれ!!」

そして短気な厨二病が痺れを切らし、厨二らしい漆黒の焔を纏う刀型の霊装《火ノ加具土（ひのかぐつち）》の切っ先を天に掲げて厨二的必殺技のお約束である詠唱を唱えはじめた。

プルート「《冥界の底より出ずる死の黒焔よ、現世の光に陰を墮とす暗黒の陽と成りて、生きとし生ける全てを灰燼に帰せ。光は要らぬ、我が求める世界は深淵の暗黒、その内で屍の山を天まで積み上げる修羅の道こそが己の覇道！故に光は要らぬ、焦がれる黒き焔に抱かれ、捧げられし焔（ほむら）の破壊こそが我が愛だ！さあ、墜ちるがいい、闇の太陽よ！》」

一同「（（（（（うわあ・・・（（（（（

プルート「《天カラ舞イ降りシ滅ビノ黒陽（デスヘリオス・カタストロフィー）》———ッ!!!」

厨二詠唱に全員がドン引きする空気の中、天に掲げられた切っ先に形成された超極大の黒焔の球形が、刃が振り下ろされると共に放たれた。

撃侵する暗黒の太陽が全ての武者ガジェット達を飲み込み、大空を焼き尽くして遙か彼方まで黒焔の空路（ダーク・フレイムロード）を開いて行くのだった。（痛）

プルート「闇の焔に抱かれて灰燼と帰すがいい!!」

出雲那「もうヤメロ、とつくにオレ達の精神のライフはゼロだ・・・」
プルート「ふんっ、ガラクタ共を一掃するには過ぎた一撃だったが、これで鬱陶しい塵屑は全て片付いた。貴様等、さっさと———」

その時、来た空路の下方から何故だか巨大な扇風機が首を伸ばしてせり上がって来た。

プルード「———・・・なんだあれは？」

重勝「お前が口になると冗談になりそうもねーから怖えんだよ」
プルート「一言、くだらん」

リオス「でも先輩ルートのED前で言った再会の質問が【キミ、熊本行きたい?】だったのはおもしろかったよね♪」

重勝「おもしろかったシーン挙げるのそこなのかよ?」

楯無「最後のアフターストーリーでベア子が腐りかけてたのも笑ったわね♪男同士の絆に萌えて変な趣味に目覚めそう、【きゃー、夜のティーガー。みたいな】とか危険な事を手紙に書いていたし。私も興味・・・あるかも♪」

夜「すごく・・・一撃必殺・・・です」

出雲那「屑兄さんの創造で物理的に腐りやがれ」

ちなみに蒼空が一番大爆笑したのは黄昏の女神ルートの某足引きBBAのあんまりな扱いとその末路。(思い出して笑)

プルート「ただただ、くだらん」

重勝「危険なセリフと言えばバカスマイルートの最終決戦で熊本先輩に問い詰められた子煩悩神父が言ったのもなかなか危険だったな・・・

【私の子を産みなさい、テ○ジア(某無限の欲望と同じ声)】

明日香「うっ!?!・・・それは、危ない人ね」

フェイトA「リオスキゅん、夜きゅん、私のk——」

アディア「言わせないよ」

ゴミを見るような眼の笑顔でカマイタチを放ち、変態シヨタコン姉さんの頬に掠らせる。

アディア「次はないからね(ニコツ)」

フェイトA「ハ、ハイッ!(ガタガタガタガタ)」

楯無「黄昏の女神ルートのアホタルちゃんも紅騎士に捨て身で突っ込むシーンで危険・・・というより、もの凄い事を言い放っていたわ。

【その歳で心まで処女だなんて、終わっているのよッ!】

明日香「あ・・・ああ・・・」

世の中の行き遅れた女性達を底知れる絶望の淵に沈めるような壮絶なセリフを聞いて明日香さん絶句・・・同時に多次元世界の某時空管理局所属のリリカルな人達の霊圧が纏めて消えたような気がした。

プルート「つくづく、くだらん」

出雲那「お前さつきからそればつかしか言つてねえな？何だよ、話に混ざりたいのか？（ニヤニヤ）」

プルート「阿呆、そんなわけがあるか。貴様等、そんなくだらん雑談に現（うつつ）を抜かしている暇があるのか？風に飛ばされている間にもう目標は目の前だぞ」

プルートが心底馬鹿らしく鼻を鳴らして指をさした前方を一同は飛ばされながら視線を向ける、すると約500m先の空域に見えたのは何時の間にか撃墜目標である聖王のゆりかご城がその巨大でヘンテコな全貌を衆目に曝して宙に佇んでいるではないですか。

その周囲には城を守護するかのようには武者ガジェット達が遊弋し、精鋭達の進行方向にて待ち構えている船首が彼等を見守っている。更には艦体の至る所に設置させている全ての半球のガラス状の対空レーザー砲門の標準が向かって来る（？）精鋭達に既に合わされていて、何時でも迎撃できる体勢が出来上がっているようであった。

幸斗「おおっ、いつの間にも!？」

リオス「アハハハハッ！飛ばされながらおしゃべりしている間に目標に接近しちゃってみたいだね♪」

楯無「アレが聖王のゆりかご城・・・夜君、あれどう思うかな？」

夜「すごく・・・大きい・・・です」

フェイトA「ガハアツ!!」（吐血）」

アディア「楯無さん、ゲストに危ないセリフを言わせないでください!」

楯無「あらあらゴメンね。私原作（IS）では妖艶で悪戯上手なお姉さんキャラなのに揶揄われてばかりだったからツイ♪」

プルート「心底、くだらん」

重勝「で?どうするんだ楯無。このままだとあの迎撃体勢万全の敵陣のド真ん中に突っ込んで行く事になりそうなんだが」

楯無「そうね。聖王のゆりかごは原作だと船首付近に玉座の間が有って船尾後部に駆動炉が有ったのだけど、出発前の空戦魔導士科長さんからの通信によるとどういいう訳か船首の玉座の間が二つ目の駆

動炉に変えられちゃっているみたい。そうなると十中八九、玉座の間は天守閣にあると考えた方がいいわ。ゆりかご内部に入った後はさつき空戦魔導士科長さんが言っていた通りのプランで制圧するとして、問題は何処から侵入するべきかよねえ」

幸斗「だつたら簡単だな！正面の護りを火力でブチ破つて船首にデツカイ風穴を空けて、そこから中に入りやあいい!!それなら効率よく速攻で一つ目の駆動炉をブツ壊せるだろ楯姉?」

楯無「(正面からは某管理局の魔導師が束になつても破れないとの情報んだけど...)うん、幸斗君ナイスアイデア♪ならそのプランで行きましょうっか♪」

楯無は不敵に眼をギラつかせた幸斗を見て惚れ惚れするような満面の笑みをして作戦を決定した。

重勝「楯無の奴、幸斗のバ火力で強引に正面の護りをブチ破るつものようだな...まっ、問題はねーな。幸斗なら不可能じゃねーし」

夜「ん?...アレは...」

明日香「八雲君、どうかしたの?」

夜「アレ...ゆりかご城の...中から...」

一同「「「「「は?」」」」」

突然夜がゆりかご城の艦体の至る所にある射出口から続々と何かが射出されている事に気が付き、一同は夜が告げる言葉を聞いてゆりかご城の艦体の周囲に注目した。すると――

幸斗「は、はあっ!」

重勝「何なんだ、あのデカバエの大群はよ?」

なんと巨大な蠅のような形状をした不可解な蟲が大量に射出され、周囲を遊弋する武者ガジェット達と共にそれらが展開されて行く様子が窺えたのである。突然出現した大量の蟲の正体、それは空戦組が日夜戦っている宿敵。

アディア「ちよつと待つてください!!?なんで《魔甲蟲(まこうちゅう)》が異世界の遺物であるゆりかごの中から!」

リオス「アハハハ!全部《アルケナル級》みたいだね♪」

フェイトA「なーんだ、ザコじゃない。問題無いよ、構わず蹴散ら

しましよう」

アディア「いや、そういう問題じゃなくて！」

夜「ん・・・僕が道を・・・開く」

だが精鋭達の行く手を阻むにはこれでも足りないのであった。まずは敵艦の分厚いデカツ面をブチ破りに行く殲滅鬼（デストラクター）が通る道を切り拓く為、夜が道を塞ぐ有象無象共を一掃するべく前が出る。

夜「ん・・・」

足下に重力の足場を造り腰を落として鬨気と魔力、そして意識を腰の夜刀に集中。柄を握り、静なる鬨志を小さな身体の内にて燃やす。収束された魔力によって鞘が淡く発光し、その洗練されし刃を閃きと共に――抜き放つ！

夜「飛翔・千刃津流（ひしよう・せんばづる）」

抜き放たれた刃から放たれたのは超圧縮された真空の刺線、それが無数の葬列となって真つ直ぐと突き進み、艦を守護する雑兵共に広範囲に渡って殺到した。

夜「ん・・・汚い花火・・・だ」

明日香「この子、なんて事を・・・」

出雲那「すげえ、オレの【星墜とし】よりも効率的で圧倒的な殲滅力だぜ・・・」

真空の刺線に一斉に貫かれた有象無象共は破碎音と爆発音の協奏曲（コンチエルト）を奏でて次々と爆発四散！剣神の妙技の前には一同は啞然と瞠目し、刀身を鞘に納める金属音をもって静寂が訪れた・・・が、それは一瞬のみであった。

重勝「今だ。行け、幸斗っ!!」

幸斗「おおうっ!!」

神々を絶する脚力で空気を蹴り、大気の爆散と共に運命を覆す伐刀者が飛び出して行く。

幸斗「運命を切り拓け！鬼童丸っ!!」

左の手に燃えるような朱い刀身を持つ太刀型の霊装を顕現し、最速で最短、ゆりかご城の船首に向かって正面からの一直線だ。故に幸斗

屋の電球がチカチカと切れそうでイライラするこの気持ちはどうすればいいのか!? 最近F○R Kで引くガチャの悉くがマ○リア付き装備ばかりで爆死するなど色々あるけれど、全ての難関を蹴散らして、行け行け選ばれし精鋭達よっ!!

【進撃編】に続くっ!!

風雲聖王のゆりかご城【進撃編】 ※ゲスト有り

艦体を激しく揺るがす轟音。

シグナム「ぬおおおっ!?何なんだ、この爆発するような音と揺れは!!」

船首付近の第一駆動炉・・・原作なら本来【聖王の玉座の間】がある大広間より通路を少し行って曲がり角を曲がった地点にて立ち、来たる精鋭達を待ち受けていた毎度お馴染の出オチゲフンゲフン!【流離の烈火の将】八神シグナムは突然の激震に体勢をよろめかせ、後方の駆動炉から聴こえて来た爆音を耳にしてキョドっていた。

シグナム「この音、第一駆動炉から聴こえて来たな・・・察するに奴等、正面の護りを突破して船首の装甲を破り、第一駆動炉に直接侵入した上でこの艦の動力源の一つを破壊したようだな。フツ、相変わらず出鱈目な連中だ」

幾何学模様が走る通路に立ち、精鋭達が来るのを心待ちにするように口端を吊り上げる。

彼女はゆりかご城の道中で待ち受ける関門の一つだ。リリなのSとSの最終決戦時だとナンバーズのデイエチがデカイライフルを構えてなのは待ち受け、出オチ同然にアツサリとエクセリオンバスターで一撃で倒されていたこの場所で、シグナムは同じように待ち受けていたのだっ!まるで彼女のこれからの末路を予言しているかのようにつ!

シグナム「定石通りに側面を破り、こちらを目指して来るかと思っていたが・・・とんだ甘い考えだったようだなっ!」

手に持っていたレヴァンティンを腰の鞘に納刀し、後方の曲がり角から距離を取って居合の構えを取る、第一駆動炉の方からこちらに向かって来る複数の足音が聞こえたからだ。

シグナム「フツ、常在戦場だ、悪く思うなよ。角を曲がって来たところを《飛竜一閃（ひりゆういつせん）》で不意打ちしてくれろ!」

笑みは勇ましいが、思考の説明がフラグをブツ立てるテンプレ過ぎで笑えてくる。しかも方角は違えどシチュエーションがなのはを待

ち構えるデイエチと被りまくっているのだから困る。(笑)

そして十秒後――

シグナム「〔K I ☆ T A ！〕 飛竜――「閃ツツ!!」

侵入者達が曲がり角を曲がって来た瞬間、鞘から炎を纏わせた連結刃を抜き放った。先頭を走るのは幸斗とプルート、その二人に向かって一直線に砲撃級の一撃が伸びて行き――

幸斗「ツ!?!どりやアアアアアツ!!」

プルート「くだらん策だ、《地ヲ焼キ滅ス煉獄ノ黒焰(アポカリプス・インフェルノ)》ツ!!」

テンプレ通り二人がノータメで放ったクソ火力の奔流にアツサりと飲み込まれた。

シグナム「な、何イイー！ツ!!私の飛竜一閃を抜き撃ちd――」
それ以上のセリフは言わせてくれなかった(笑)。突き刺した火ノ加具土から無骨な床を焼き進んで来る黒焰と幾何学模様が走る壁と天井を圧倒的な質量で消滅させながら驀進する剣圧の光波に飲み込まれたシグナムは、エネルギーの大爆発と同時にボロ雑巾のような姿になって宙に投げ出され――

夜「ん・・・」

絶技――夜天輝剣(やてんこうけん)

シグナム「グハアツ!!」

後から続いて来た夜が抜き放った空間を斬り裂く神速の抜刀術を受ける事によってリフティング。そしてとどめは当然――

出雲那「邪魔だ!雷切イイー！ツ!!」

シグナム「ひでぶつ!!」

『ドツカアアアツツ!!』

出雲那の雷切によっていつも通りに仕留められたのであった。(このひとでなし!)

出雲那「あいつも懲りねえな・・・」

爆発を後目に精鋭達は通路を駆ける。目指すは船尾後部にあるもう一つの駆動炉だ。

アディア「はは・・・それにしても今の夜君の抜剣、言葉にできない程凄絶な一閃だったね」

重勝「剣筋が通った跡の空間に傷が入っていたからな。なにか異能でも使ったのか？」

夜「ん・・・空間・・・干涉のチカラ・・・夜刀に乗せて・・・斬った」

つまり、さつき夜が使った新技(蒼空が考えたオリ剣技)【夜天輝剣】とは夜の「干涉する程度の能力」によって空間に斬撃を作用させる効果を得た夜刀による居合いによって相手を空間ごと両断する防衛不可の抜刀次元斬なのである。空間を一閃のもとに剣で斬り裂き、空いた裂け目が夜天の星空のような輝きを放っているのでこの技の名なのだ(シグナムが真つ二つにならなかったのはギャグ補正(笑))、彼が主人公を務める【新・魔法少女リリカルなのは】剣神と夜天の輝きのタイトルにも因んでいたりする。

重勝「成程、お前が幸斗並に常識外れだという事は理解できた!」
へっ!と納得面で笑い、天井に張り付いていたカプセル型武者ガジェットを簡易的な重力砲撃で撃ち墜とす。気が付けば進行方向の先に武者ガジェットの集団が所狭しとズラリと密集していて、それ等がこつちに向けてレーザーを連射してきていた。

プルート「息を吐く暇もなく団体さんのお出ましたな。単純な攻勢しかやれぬガラクタ共め、こんな矮小な光線など眼を閉じていてもどうと言う事はない」

楯無「そういえばStrikerSでのなのはちゃん、このレーザーの連射を変な動きで躲していたわね」

重勝「インベーターゲームのプレイヤー機のようなカクカクな動きしてたな。まあウケは取れたと思うけどさ、正直な話、アレ動きに無駄がありすぎるとおもわねーか？こんな最小限の回避機動で避けれるだろ」

飛んで来るレーザーの連射を僅かに全身を傾けてヒョイヒョイツと避ける重勝。他の仲間達も意に介さず前から飛来して来るレーザーを避けたり斬ったりながら武者ガジェット集団へと迫って行く。

幸斗「そんなのシゲのブツとんだ飛行制御能力が有ってこそできる芸当じゃねえの？オレは軽い剣圧で纏めて薙ぎ払ってゴリ押しする事しかできねえしな！（エツヘン！）」

出雲那「威張る事じゃねえよ。つうかさつちの方がブツとんでんじゃん！」

夜「ん・・・五十歩百歩」

幸斗「あ、ところでき。その高町なんとかって奴が後々【いちいち相手にしてられない】って言って出した【A・C・Sドライバー】ってやつ、アレってどう見ても武○錬金のカ○キのサ○ライトハートIIの突撃形態にしか見えねえよな？」

重勝「高町ナツ○な。読者でファンだったんじゃないの？」

アディア「いや、それも違いますから。今さっき楯無さんが名前と言っていたじゃないですか」

リオス「アハハツ♪読んでいたマンガに憧れてマネをするなんて、なのちゃんってカワイイよね♪」

夜「ん・・・少年心」

出雲那「ああー、いい歳（19歳）こいてな。ククツ、ハハハハー」

次々と飛来してくるレーザーを何とも思わずにやり過ぎしつつ、精鋭達は高町なのはは武○錬金の熱狂的なファンであると偏見で勝手に決めつけた。

プルート「ええいつ、くだらん！そしてガラクタ共も鬱陶しい！面倒だ、纏めて灰になれいっ!!」

そして辛抱ができなくなった短気な厨二病が再び【地ヲ焼き滅ス煉獄ノ黒焰】を床に走らせてレーザーを撃つて来ている武者ガジエツトの集団を纏めて焼き払った。破片一つ残らない、全てが黒焰に焼き尽くされて灰となり、そこに散乱し複数の塵山を形成。精鋭達はその中央を駆け抜けて行く。

出雲那「——ハハハ！てか19って言うか、23、25になってもまだ魔法少女って!?ハハハッ、普通15までだよな、最低でも?しかもバツイチでもないのにシングルマザーだし！シングルマザーは魔法少女?何だよこのタイトル、アツハハハ！」

明日香「笑い過ぎよ武内君。先程の扇風機といい、この世界では取留めも無く何が起こるかわからないのだから、もつと気をしつかり——っ!？」

他愛ない談笑をしながら通路を駆翔し進攻していると・・・エ〇ツク——

重勝「——上だ！幸斗っ!!」

幸斗「あいよっ!!」

何の脈絡もなく突如として天井をデツカイ剣（つるぎ）が突き破つて彼等の頭上に降つて来た。空間認識能力が異常に優れ、逸早くそれを察知した重勝の指示を聞いて幸斗は右拳を振り上げて跳躍する。

幸斗「宇宙を喰らい、メテオを殴り潰すようにして——打つべしツツツ!!」

んでもって何やら常人には理解不能な気合いを言い放つと同時に剣の切っ先を殴り付けて砕いた。ダイナマイトで爆破したかのようにその巨大な質量は一瞬で粉微塵に砕け散り、更には規格外の腕力で振るわれた拳圧の暴風が破壊の嵐となって天井、壁、そして床、視認できる果てまでの全てを砕き崩落させていく。

一同「コニココイイイイイイツ!!」「コニコ」

故に速攻魔法カード【総ツツコミ】が発動する。この場に居る全員が飛翔スキル(?)を行使できる筈なのに何故か万有引力の法則に【従

櫻井が全ての元凶ってわけでもなかったでしょうに……」

フェイトA「おのれSAKIMORI——ツ!!」

アディア「いや別にSAKIMORIは悪くないでs——うわあっ!?!」

楯無「なんか水が流れ出したわね」

夜「ん……桃太郎の桃」

精鋭達は流れ出した水に広間から流れ出されて行く。どんぶらこく、どんぶらこくと……通路を流れ進んで行くと高くせり上がった縁に塞き止められ、全員水面から縁の上に這い上がった。

明日香「もう、酷い目にあったわ……」

立って衣服に滲み込んだ水分を絞り出す。

楯無「うふふ、水も滴るいい女ってね♪そう思わないシゲ君、幸斗君?美少女の服スケスケのブラジャー丸見えで男子の視線を惹きまくりよ♪」

重勝「馬鹿な事言ってるねーで頭も拭いとけよ。風邪ひくぞ」

幸斗「あと楯姉、さすがに♂♀柄は引く」

リオス「アハハハッ、みんなビショビショだね♪」

夜「ん……」

フェイトA「水も滴るイイ男の娘……グへへ♡(また鼻血)」

アディア「頭冷やしても治らないのか、この姉は……」

プルートの「まったく、莫迦阿呆ばかりだ。くだらん、こんな茶番とつとと終わらせに行くぞ」

出雲那「あ、テメエ勝手に先に行くなよ!」

全員衣服に滲み込んだ水を絞り終わり、スタスタと船尾後部の第二駆動炉を目指す。

往く手に塞がる武者ガジェット達をギツタンバツコン、スクラップド○ゴンやく○鉄のかかしに変えながら暫く進むと——

幸斗「ん?何だアレ?黒い蟲みたいなのがうじゃうじゃt——」

夜「ひっ!?!」

幸斗「ってオイイツ!?!何でオレの後ろに隠れやがる!!」

明日香「八雲君?」

フエイトA「チクショー、真田幸斗！私の愛しの夜きゆんとあんなに身体を寄せ合って、羨ましい妬ましいイイツ!!（歯あギリギリイ〜）」

楯無「ちよつと、どうしたっていうのよ?」

夜「アレ・・・カサカサ・・・キモチワルイ・・・グスツ」

お姉さん達「「グハアーーツ!!」」

薄幸の男の娘の【震え涙目上目遣い必殺コンボ】によって女性陣、堪らず鼻と口から愛という名の赤を噴出させてしまい撃沈!【剣神】を怯えさせる程の生命体の群・・・いったい何なんだ、あの黒光りするデツカイ楕円形の生命体共は!?

出雲那「いやいやいや、デカ過ぎるだろ!?アレってどう見ても一匹見つけたら三十匹は近くに居るっていう台所の黒い悪魔・・・」

重勝「頭部に生える二つの触覚を動かし、カサカサと音を立てて俊敏に迫り来る黒い絶望」

人類の永遠の宿敵、黒光りするG——

幸斗「つてゴ○ブリじゃねえかああああああつ!!」

夜「んーんーんーっ!!」

アディア「なっ?!あれは最近教皇浮遊都市ベベルの下水で発見された新種の陸戦特化型魔甲蟲《ハダル級》じゃないか!これ程の数の群れ、どうして此処に!!」

出雲那「魔甲蟲の新種!?聞いてねえっていうか空戦の原作にも空戦情熱にもこんなゴ○ブリ型魔甲蟲なんか出て来てねえだろうが、ふぎけんなっ!!」

ギヤーギヤー揉めている内に巨大ゴキbゲフンゲフンツ!【ハダル級】の群れが騒ぎを察知したのか幸斗達の存在に気が付いたようだ。触覚の下付近にある赤黒く発光する眼光がギョロツと一斉に彼等を視線に捉え、不気味に黒く光る楕円形の巨体が床を、壁を、天井を埋め尽くしカサカサ・・・否、ガサガサと騒音を鳴らしてこつちに向かつて黒い雪崩が雷鳴の如き速さで侵食して来る。キモイ!怖いっ!!

幸斗「速っ!黒で塗装したドラッグマシンかよ!?!」

プルート「魔甲蟲と言えどもその特性はゴ○ブリというわけか!ふ

ぎけた奴等だ、纏めて焼き払い灰にしてくれr——」

だがプルートの火ノ加具土を振るう間も無くハダル級共がもう目前まで押し寄せて来ていた。

夜「んっ、戦略的撤退！」

幸斗「あっ!? テメエ汚ねえぞ夜! 先に逃げんなっ!!」

プルート「チツ、場と速度的に分が悪いか、退くぞ！」

三十六計逃げるに如かず。鼻血を出して気絶した女性陣を抱え(重勝が楯無、出雲那が明日香、アディアがフェイトを)、精鋭達は迫り来る巨大ゴ○ブリの群れに背を向けて来た道を戻り疾走する。

超人的身体能力と高速移動系スキルをフルに使い、追って来るハダル級の群を引き離して行く。

重勝「おっし! こんだけの距離が空けば収束重力砲(ストライクブラスター)で……って今度は何だ?」

「「「「「シヨウブ! シヨウブ! シヨウブ!」」」」」

十分に距離を稼いだので振り返ってゴ○ブリ共を高火力スキルで殲滅しようとしたところ、進行する先からまたしても何らかの敵集団が武装してこつちに向かって来ているではないですか。

プルート「挟撃されたか、ガラクタの癖にやってくれるな!」

幸斗「ん? 前から来る奴等、なんか妙に小っさいな?」

夜「カワイイ……」

「「「「「シヨウブ! シヨウブ! タケウチイズナ、シヨウブ

!!」」」」」

出雲那「——って、テメエらは【シグナム人形】!」

敵の正体は大晦日のクイズスペシャルで大活躍(?)した自律起動型ね○どろいどぶち【シグナムちゃん人形】の集団であった。ミニレヴァンティンを小さなおててに持ち、一斉に可愛らしくわーわーと向かって来る。もはや呪いにも近い腐れ縁の顔に、出雲那はいい加減苛立ちを爆発させた。

出雲那「い・い・か・げ・ん・に・し・ろ、雷切イイイイイイ

イーーーーッ!!!」

シグナムちゃん人形達「「「「「ポナペティーーーーッ!!」」」」」

明日香「もうだめ。お腹いっぱい・・・」

出雲那「しつかりしろ柸！お前プロだろ？」

明日香「大食いは専門外よ・・・」

幸斗「『ずるずるずるー、ちゅぽん！』うつまー！これうめえな!!」

夜「ん♪」

超山盛りのスペシャルラーメンを全員で完食しなければ先に進めないエリアがあったり・・・。

出雲那「フゲツ!? ああああぁー!!」

『ドボンッ!』

重勝「ピン張りした糸に足を引っ掛けてコケ、底に水が溜まった落とし穴に落ちてずぶ濡れになり」

出雲那「うう・・・こんちくしよu『ヒュー、ガンッ!』グエツ!」

楯無「這い出て来たところにタライが落下」

アディア「ド○フですか!」

リオス「アハハッ、色んな仕掛けがいっぱいで楽しいね♪」

夜「ん♪」

ド○フのコントで使うような仕掛けが満載なゾーンに悪戦苦闘し・・・。

出雲那「うおっ、まぶしっ!」

明日香「・・・アレ?この場所って・・・」

夜「ん・・・船首・・・つまりスタート地点」

リオス「要するに今踏んだあの光る床はこの第一駆動炉に転移する仕掛けがあったみたいだね♪」

重勝「ふりだしに戻されたのかよ・・・ん?なんだこの貼り紙は？」

『ねえ、今どんな気持ち?苦勞して進んだのにスタート地点に戻されてどんな気持ち?ねえ、ねえ、どんな気持ち?怒ってる?ガツカリした?それとも今までの苦勞がペアになってハゲちやつた?あつはつは、それはゴメンちやい!ぷぷっ!・・・あ、それから君達が今までにクリアしてきた仕掛けやトラップ、この転移装置が作動すると同時にリセットされて元に戻る機能があるから、もう一度がんばってねん♪ブークスクスクス!』

風雲聖王のゆりかご城【制圧編】前編 ※ゲスト有り

聖王のゆりかご城の二つの駆動炉を破壊し、艦内部を制圧した精鋭達は甲板の上にドンツと建つ安〇城へと突入し天守閣を目指して登り、進撃して行く。

水の敷かれた通路の上に設置された数々の障害物を渡り切り。高々と佇む反り立つ壁を乗り越えて。

吹き抜けた床の上の狭まった両壁の間を両手両足で跳び付きながら宙を進み。

底なしの奈落が下を支配する廊下の壁に出ている出っ張りを掴み、握力のみでぶら下がる全身を支えながら出っ張りを伝って行き。

そして最後に空中に垂れ下がるロープを登り切ると――

出雲那「なんだこのS〇S U K Eセツトはっ!!?」

そこが玉座の間であった。木材で建築されたような城の中なのにメカメカしい原作リリなのS t Sの聖王の玉座の間そのまんまの空間が精鋭達の視界全体に広がっている。

最奥を見やると其処に設置されている複数のエネルギー供給パイプに繋がれた聖王の玉座に座る人影が存在していた。

???「ふふふ、待っていたよ」

幸斗「テ、テメエはっ!!」

その人影は黄金色の機械的な穂を持った槍状のデバイスを左手に携え、明るい栗色の頭髪をしている二十歳前後の美女でその顔は美しいというより可憐と表現した方がしっくりくる。それでいて真っ直ぐに人を視る大きな碧い瞳は凛々として人を惹き付ける独特な格好良さも持ち合わせていて、まさに「出来る女」という印象だが、い歳した女性がする白いリボンで縛ったツインテールと身に纏う白を基調とした魔法少女風のバリアジャケットがその印象全てを台無しにしている。(笑)

???「ようこそ、聖王のゆりかご城の天守閣へ。わたしは――」

妖艶な笑みをして目の前の精鋭達を見据える彼女こそが今回の騒動の主犯【聖魔王】。その正体は――

重勝「なんでこんなところに居るんだよ《高町なのは》」
なのは「ズコーッ!」

そう、かの有名な時空管理局のエース・オブ・エース、【高町なのは】であつた

玉座から立ち上がり、名乗ろうとしたところで先に言われたので、彼女はキョドって床に躓き、新米芸人も弟子入りを求めるような鮮やかなズツコケを披露。十九歳独身、年齢Ⅱ彼氏イナイ歴のエース・オブ・エース待望のファーストキスはメカメカした床となつてしまつた。(爆笑)

楯無「いや、ファーストキスならもうとつくの昔のセットアップの変身シーンの時にレイハちゃんにあげているわ、全裸になつて(【なのは×レイジングハート】と書いてある扇をバツと開いて)」
アディア「うわぁ・・・」

明日香「そ、それはなんとも・・・凄まじく独特な愛情ね・・・」
なのは「カラーッ!?人の性癖をアブノーマルに思わせるような誤解を招く事を言わないでよね!わたしはちゃんと男性が好きだよ!イケメンとか大好きだよ、ノーマルだよおっ!!」

凄まじく見当違いな事を言われたのでガバツ!と顔を上げて猛抗議し、プンプンと立ち上がるなのは。

精鋭一同「「「「えええ?」「「「「」」」」」

なのは「何、その【そんなまつさかあ〜】と言いたいようなりアクションは!?!みんなしてジト目向けて来なくてもいいじゃない!!」

楯無「だって・・・ねえ（今度は【なのは×フェイト】の扇）」

フェイトA「ん？私は関係ないよ。だってシヨタっ子命だし」

夜「ん・・・百合の花」

プルート「くだらん、そんな事などどうでもいいだろう」

なのは「そんな事?!？」

人の性癖が無機物愛だろうが同性愛だろうがどうでもいいと吐き捨てられてシヨツクを受け、眼を白くする行き遅れ第一候補生など放置して、そろそろ本題に入ろう。

幸斗「そうだな。それよりも高町なんとか、どうしてテメエがこの世界に居る挙句にこのダサイデザイン之城塞戦艦で騒動を起こしているんだよ？テメエは【幻想戦記クロス・スクエア】に登場する予定はあるらしいけど、まだ顔見せすらして無え筈だろ!？」

なのは「な・の・は！ヴィータちゃんみたいな名前間違いないですよ!・・・そうだね。わたしが此処で聖魔王なんて訳の分からないものになっている理由は——」

二日前——

なのは「んんーっ！新部隊でのわたしの部下として良い逸材も見つかって今日は有意義な一日だったあ」

今度地上に設立される新部隊《古代遺物管理部 機動六課》。この日なのははその前線メンバーとして入隊させる将来有望な新人魔導

連載投稿を始めた蒼空の魔導書の最新作二次、《THE LEGEND OF LYRICAL 喪失の翼と明の軌跡》の世界から連れて来られたなのはようであり、蒼空のウザさを思い出してキャラを崩壊させて狂い叫んでいる。なんて理不尽なのだろう、金はくれてやれないが同情せざるを得ない。

なのは「ハアツ、ハアツ、思い出しても腹が立つよ！まったく、吭が痛い・・・」

プルート「同情はする。だが・・・貴様の事情など知った事ではない、苛立ちを抱いたまま灰となるがいい！」

なのは「ほえ？」

プルート「【地ヲ焼き滅ス煉獄ノ黒焰（アポカリプス・インフェルノ）ツツ!!】」

なのは「つて、にやあああああーっ!!?」

だが、そんな事など気にしない厨二病が相手がイライラを募らせて吐き気を催している最中にも係わらず無情にも気を乱しているのははに向けて不意打ち気味に地を走る黒焰を放った。こんなビミョーな空気の中でまさか攻撃して来るとは予想していなかったのはは当然。プルートの厨二的な伐刀絶技を回避できずに直撃をくらい、黒焰に飲み込まれると共に猫のような情けない悲鳴を上げたのであった。

出雲那「オイイイーっ!!?何してんだテメエツ!!」

プルート「解り切った事を聞くな、この女を仕留めれば今回の騒動は終息するのだろうか?こんな茶番に何時までも付き合っただいられるか!」

重勝「ま、これは敵を前にして油断を見せた高町が悪いな。変身シーンや長つたらしい口上シーンで大人しく待っている奴なんかは想像を絶するようなおバカだけだ。隙を見せたら殺られるのが戦場の常だぜ」

夜「ん・・・常在戦場・・・ん?」

聖王の玉座を覆い尽くして燃え上がる黒焰の壁の前でボロクソに言っていると、突然その黒焰の中から天井に向けて飛び出して来た桜色の極太レーザーに黒焰が薙ぎ払われ消滅、すると其処には虹色の魔

力光を全身に纏わせたなのはが眉端をピクピクさせながら呆ける精銳達に満面の笑みを向けて来ていた。そしてその眼は笑っていない、氷塊で押し潰すような冷たく怖ろしい威圧を放って来ている……。

なのは「ふふふふ……やってくれたね（ニコニコ）。正直蒼空に聖王のチカラを渡されていなかったら美人薄命の通り今ので焼け死んでいたよ……」

アディア「自分で【美人薄命】って言ったよこの人!？」

夜「ん……自意識過剰」

楯無「あら、やつぱり《聖王の鎧》も使えるのね」

重勝「確か聖王の身に危険・危機が及ぶと自動的に展開して主を護るつつうスキルだったな。ならば火力で押し潰すのが手っ取り早いか……よし幸斗、また出番だぜ」

幸斗「おうっ、任せr——」

なのは「そうはさせないよ。レイジングハート」

レイハ『OKマスター。アクセルシューター』

幸斗が行動するよりも先になのはは自らの周囲に桜色の魔力弾を複数出現させる。その数32……幼い頃から彼女が幾戦も行使して来た圧倒的な練度を誇る中距離誘導射撃魔法であり、攻防一体に優れた誘導攻撃魔法の完成型とも言われている。

楯無「出たわね、なのはちゃんお得意の射撃魔法の一つ、アクセルシューターが」

フェイトA「確かリリなのの世界では20操作できれば異常呼ばわりされるんだっけかな？」

アディア「あの数で僕達を同時に相手するつもりか？」

リオス「アハハッ、お手玉をするにはちよつと多すぎるかなあ？」

夜「ん……おつきいなのは……凄く怒っているね」

なのは「ふふふ、今の不意打ちもそうだけど。さつきから此処に来る前の君達を艦内の監視映像を使って視て聴いていれば、人の事をやれ【いい歳こいて漫画の技をマネする痛い人】だの【魔法少女シングルマザー（23歳）】だの【〇十歳になっても結婚できなさそうな声してる】だの、人が見ていないと思っただけで好き勝手な事を言いたい放題に

言つて馬鹿にしてくれて・・・」

幸斗「この女、ちやつかりと盗み視してやがった・・・しかもそれ全部出雲那が言った事じゃねえかよ・・・」

出雲那「ちよっ!?待てよ!最後のはオレじゃねえぞ!!」

自分は知りません。ええ、憶えがありませんとも!※by蒼空の魔導書

なのは「・・・全員、少し頭を冷やそう・・・か・・・!?」

冷徹な怒りのままに聖魔王の蹂躪が開始されようとした直前、突如として目の前に顕れた【量】になのはは言葉を失つてしまい、ハイライトが消えていた眼を点に変えた。

重勝「《誘導重力球(グラビティシューター)》」

なのは「は・・・ははは・・・(あんぐり)」

開いた口が塞がらないとはこの事か・・・なのはのアクセルシューターと同じように重勝が重力エネルギーで形成した誘導弾を大量展開させて、黒い球がこの天守閣中を覆わしている光景を目の当たりにしてなのははビックリ仰天するあまり誘導弾制御を停止させ、口端をヒクヒクさせた苦笑いを浮かべて後退りをしてしまっている。何故ならばその量は彼女の最大誘導制御数を圧倒的に上回る・・・200。なのは「ははは・・・君、まさかその数を操作してわたしにぶつけて来るんじゃないよね?」

重勝「ん?これぐらい余裕だろ?俺、魔力の消費を気にしなければこの六倍はいけるし」

なのは「いやいやいやいや!!それはおかしいでしょう!!一体どれだけの並列思考(マルチタスク)を使ったらそんなn——」

重勝「シューシューシュートツ!!」

なのは「ちよ、ちよつと嘘でsにやああああああーっ!!!」

彼女の制止を待たずに天守閣中に展開された200の誘導重力球が戸惑うのはに向かって全方位から一斉に殺到し、連鎖被爆(チェーンエクスプロージョン)によって発生した無数の爆炎の奔流が周囲に展開されている32のアクセルシューターごと再び彼女を

飲み込んだ。

明日香「な、なんて惨い光景なのかしら……」

出雲那「ああ、重勝の奴、悪魔だな……容赦ねえ」

幸斗「さすがシゲ！いつ見ても悪魔レベルの魔力制御能力だぜ!!」
リオス「わーい！はーなび、花火♪」

夜「んー♪」

重勝「お前ら気楽そうに言っているけどな、気を緩めてんじやねーよ、たぶんまだ終わってねえ。奴の要塞級の防御力と聖王の鎧の組み合わせはこの程度じゃ抜き切れねーだろーしな」

そうして燃え上がる爆炎の壁を見つめていると、いつぞやの鉄槌のエターナルロリータが「悪魔め……」と言った時のように、なのはが炎の中から無言で出て来た……しかし栗色のツインテールの所々で毛が跳ねていたり、白いバリアジャケットの至る所が焼け焦げていたりは無傷ではない故か何処か窶々（やつやつ）しく、なんだか哀愁を漂わせている。ぶっちゃけ今の彼女は悪魔というよりも火災に遭った被害者と見た方がしっくりとくる雰囲気である。

なのは「……」

フェイトA「あ、ホントだ。出て来た」

プルート「ならば灰になるまで燃やし続けてやる」

明日香「さすがに止めてあげて。精神衛生上によくないわ、可愛そうすぎて」

火ノ加具土に黒焰を纏わせて無情にも追撃を仕掛けようとした厨二病を溜息交じりで制する。哀愁漂う空気の中で同情の眼を向けられたなのはは――

なのは「も・・・もおおアツタマに來たのっ!!全員まとめてブツ飛ばしてやるから覚悟しろなのおおおおおっ!!」
ハジケた。

出雲那「なんかリリなの二次の地雷作品でよく見る高町なのはのよ
うに【なのなの】言いだしやがったぞ!」

なのは「レイジングハート!ブラスタースピットなの!!」
レイハ『イ、イエス、マスター!ブラスタースター2!!』

不屈の心は何処かの虚数空間に落としていつてしまったようだ・：
なのははヤケクソ気味に激昂してエクシードモード時のレイジン
g・：もう面倒だし【レイハ】でいいや♪(笑) レイハの穂先と同
じ形をしたビット兵器を四機展開した。

楯無「あれれ、ブラスタースターモード?さっき話していた内容からして、
確か君つてStrikerSのアニメ時間軸で言えば第一話が終
わった直後あたりから来ている筈だからブラスタースターモードはまだ完
成していないんじゃないや?」

なのは「蒼空によって既に完成済みなの!しかも使用時の負担ゼロ
というおまけ付きで!!」

夜「ん・・・ご都合主義」

出雲那「ビット兵器が相手なら任せろ!葵柳流抜刀術——【星墜
とし】っ!!」

ブラスタースピットの展開を確認した出雲那がすかさず愛刀である
《黄旋丸(おうせんまる)》を抜刀!そこから放たれた三日月状の飛翔
斬撃がブラスタースピットの一つを貫き、破壊と同時に無数に分裂した
飛翔斬撃が周囲に飛び散って行き、残りの三つのブラスタースピットを
も飛び散った飛翔斬撃の内の一片がそれぞれ貫いて行って残らず破
壊し、一瞬にして全滅させた。なのはは一瞬の出来事に眉間を寄せて
黙り込む。

なのは「……………」

リオス「よおーし！なのはちゃんか般若さんみたいな顔をしている
今がチャーンスツ！夜君、僕達で叩みかけに行くよー！」

夜「ん・・・わかった・・・」

なのは「え？」

ここで男の娘コンビが動き出した。小さな手で得物を構え、小さな
弾丸が銃口より撃ち出されるかの如く標的に向けて突貫して行く。

リオス「燃えちゃえーっ！！」

魔砲剣戦技——紅蓮一閃（ぐれんいつせん）

夜「ん、これははやての剣」

絶技——八神ノ疾風（はちじんのはやて）

なのは「誰が般若なおおおおおおおーっ！！」

紅蓮の炎を纏った砲剣による斬炎と擦れ違い様に疾風の如く抜き
放った夜刀の瞬間同時八連斬がなのはが纏う聖王の鎧を切り崩して
いく。展開してきたラウンドシールドが斬撃を阻んだりもしたが、そ
れは一撃で砕け散らせた。

なのは「ああー、もおうつ、なのっ！！」

レイハ『フラッシュムーヴ！』

二人の猛攻に耐えかねたなのはは飛行魔法で天守閣の天井ギリギ
リまで飛翔し、瞬間的な高速移動魔法を行使して距離を取る。それで
もって精鋭達が立つフィールド全体を狙うようにレイハを下に向け
て構えた。

なのは「私の本分は圧倒的な火力で制圧する砲撃士スタイルなの！
この位置と距離があればみんな纏めて粉碎☆玉砕☆大喝采してやれ
るのおおおーっ！！」

重勝「戦術を大声でバラす程、頭が蒸発してやがるのか・・・どう
する楯無？俺か幸斗が火力で押し返すか？」

楯無「んんん？気にしなくていいんじゃない？それよりもこの部
屋湿気が籠ってきたのか蒸し暑いわねえ。男子の前だけど我慢で
きないから脱いじゃおうかな♪」

アディア「なっ！戦闘中に何を呑気な事を言っているんだ！あの位
置から砲撃されたら一溜りもないでしょうが！迅速に障壁を展開し

て護りを固めるか撃たれる前に撃墜しに行くかしないと！」

重勝「・・・いや、確かに楯無の言う通りだな。蒼空のウザさのあまりにキヤラを崩壊させてアホになったアホは放っておけよ」

アディア「ちよっ!?重勝さんまで！」

高低差の高い位置を取られて砲撃されようかという非常事態なのに「湿気は失敬」というオヤジギャクが書いてある扇で自分を仰ぎ寛ぐ楯無に対して真面目なアディアが抗議するが、重勝もまたそんな楯無を肯定し何所吹く風だ。こんな事をしている間にもなのはが火力砲撃を行使する為に必要な魔力をチャージしていく。

重勝「まあ落ち着けて、どうせアイツは【自爆する】からよ」
アディア「・・・はい？」

重勝「・・・楯無、もう【充分湿度は高まった】だろ?やれよ」

楯無「ああん、もう、シゲ君つてばせつかちさんなんだからあん♪しようがないわねえ、おねーさんの出血大サービスよおっ!《清き情熱(クリア・パッション)》っ!!」

そう言い放つと共に楯無が纏う全身装甲型の霊装《霧纏の淑女(ミステリアス・レイディ)》に高密度の魔力が注ぎ込まれ、淡く発光すると共に空間を伝播してなのはが滞空する辺りに充満した水分の温度を一気に上昇させる。

なのは「エクセリオオオオン、バステ——」

『チュドオオオオーツンツッ!!』

なのは「——にやあああああー——っ!!?」

すいじょうきばくはっ!桜色の魔力の奔流を今まさに撃ち出そうとした瞬間なのはは本日三度目の爆撃を喰らうのであった。

なのは「うにやく・・・」

ひゅううううう・・・ズガンッ!

夜「あ、墜ちた」

ズタ袋のように無惨な姿で床に叩き付けられて倒れ伏すなのは、その可哀想な醜態に哀愁漂う空気がなんとも言えない静寂を醸し出している。

明日香「ねえ武内君・・・なんなのコレ？」

出雲那「聞くなよ、オレだつてコレがあの高町なのはだつて言われ
てもピンと来ねえんだから」

楯無「うーん。なのはちゃんが聖王のチカラを使うとか、普通の人
から見たら最悪の悪夢の筈なのだけどねえ。元世界最強クラスの傭
兵団【西風】団員の幸斗君にシゲ君、裏世界の戦闘のプロである明日
香ちゃんにプルート君、ミストガン特務小隊員のリオス君、おまけに
剣神の仇名を持つ夜君と・・・これだけのチート軍団が揃っているの
だから、名だたるエース・オブ・エースや聖王が纏めて掛かって来て
も敵にならないのは仕方がないわねえ」

夜「んー・・・不完全燃焼・・・幸斗・・・後で模擬戦・・・しな
い?」

幸斗「マジでっ!?よしやろうぜ!後でと言わずに今すぐやろうぜ
!!」

重勝「お馬鹿。こんなところでお前らがドンパチやったら地上にも
被害が行くだろうが。まずはここから——」

なのは「・・・ふふふ。何を勝ったつもりでいるのかなあ・・・
かなあ?」

ミツシヨン終了の空気になっていたところだったが、そこへ聖魔王
たるなのはが正気を取り戻してムクリと起き上がった。きた。

プルート「ふん、まだ立つか。俺が手を出すまでもないと思ってい
たが、いい加減にこの茶番を終わらせてやるか。最後は俺の手で灰に
s——」

なのは「ああ、そうだね。確かに私と聖王のチカラだけじゃ君達に
は勝てない、それはよく解ったよ・・・でもね、さつきも言った
けれども、何も蒼空に与えられたのは聖王のチカラだけじゃないん
だ・・・例えば、こんなモノもね!!」

一同「「「「「「「「!!?」」」」」」」

聖魔王なのはが持つチカラ、それは世界に混沌（カオス）を齎
す・・・気が付くとこの天守閣の角四点の床にそれぞれ召喚術式
が施された魔法陣が出現していて、その陣は魔力光の輝きを帯びてい
る。

やがてその輝きは増していき、増大した光の中に魔法陣の姿が一同の視界から眩ますと急速に光が収束していき、そこに姿を現したのは

四体の・・・アステカの石像であった。

精鋭達 「「「「「な・・・なんだコレはあああああああああああ
ああっ!!? 「「「「「」

なのは「にやははははっ！さあ、今宵の狂宴（カーニバル）を始め
ましようかっ!!」

風雲聖王のゆりかご城【制圧編】後編 ※ゲスト有り

メタ発言を飛び交わしながらも比較的にもともな戦闘を繰り広げていたが、それもここで打ち止めだ。聖魔王なのはがアステカの石像を召喚し、遂に混沌の宴が始まった！

なのは「アステカの石像達よ、やっておしまい！」

アステカ『『『アステカッター！』』』』

出雲那「おいコラッ!? 予想はしていたけど、ぶ○らじネタじゃねえかあああああー！ーっ!!!」

強面のアステカの石像達が天守閣の四角位置にそれぞれ陣取って精鋭達を包囲し、聖魔王なのはがかのボンテージ衣装の愛されし悪役が子分達に命令する時に使っていた伝説の号令を言い放った途端、アステカの石像達が平長い両腕をコック帽っぽい形をした頭部の上に掲げ、その両手で挟んだカッターを前に振り下ろしてぶん投げて来たので出雲那がツッコミを入れた。少し前に放送が終了した某格ゲーのラジオ番組にてとある人気声優が生み出したネタそのままだったからだ。

幸斗「おっと、あぶねっ!」

夜「ん・・・完全に・・・包囲された・・・ね・・・これはちよつと厄介・・・」

四方から飛んで来るカッターを精鋭達は躲し、弾き、撃ち墜としていくが前後左右広くに意識を集中しなければならぬ包囲状況に苦戦を強いられる・・・そんな忙しい間に通信結晶を通じてジョバンニからの緊急連絡が入った。

ジョバンニ『おい、何をもちもたしている!? こっちから見た予測だとあと3分もしない内にゆりかご城は大気圏外に出るぞ! 急げ!!』

さつきなのはが砲撃で撃ち抜いて空いた天井部分を見上げてみると昼の筈なのに闇の帳が降りた星空が其処から覗かせている。

出雲那「ゲゲゲッ!」

リオス「の鬼○郎♪」

明日香「言っている場合じゃないでしょう! このまま手を拱いたま

まだとゆりかご城は衛星軌道上に到達してしまおうわ！そうだったら二つの月の魔力を吸収して艦の機能は大幅に強化されてしまつて制圧が困難になるわよ!!」

幸斗「じゃあそうなる前に月をブツ壊せばいいんだな？よしっ!!」
出雲那「いや、【よしっ!!】じゃねええーっ!!聞いただけ無駄だと思ふけれど、それじゃあどうやって月をブツ壊すつもりなんだ!?某歌いながら戦うアニメのカ・○インギルでも持つて来るのかよ!!」

幸斗「そんなのオレが龍殺剣で——」

重勝「できそうな気がするけど止めとけよ。最悪その某歌いながら戦うアニメ第一期の最終回で地球に落とされそうになった月の欠片よりもデカイ質量が地上に落ちるかもしれねーぜ。この前のレースでの前例もあるしな……」

アディア「ですよね……それなら一刻も早くこの天守閣を制圧し
tおおっとっ!」

後方から自分の首元に飛来してきたカッターをアディアは咄嗟に身を屈めてギリギリ回避する。急ぎ制圧するにも敵にこう包囲されていては多少の時間を要してしまう。それではとても間に合わないだろう。

なのは「にやははははは！数の利が生きるのは包囲戦、逆に数の利が有つて包囲されると行動範囲が密集によつて限定されて不利になる！個人なら広範囲殲滅スキルを使つてまとめて殲滅すればいいけれど、味方を密集させられていたらそれも出来ない！よつて君達は時間をたつぷりとかけてアステカの石像達を一体一体倒していくしかないんだよ!!」

流石は戦技教導官、見事な采配だ。これでゆりかご城が衛星軌道上に到達するまでの時間を稼ぐ事ができるだろう……そう、普通なら

プルート「生憎だがそれは無い。何故ならばお前達もたまたましている間にこの天守閣の全ての範囲を《第七園》の領域圏内に置く術式の構築が完了したのだからな！」

パチンツとプルートは指を鳴らす。その瞬間に複数の箇所で黒い

気が付けばなんと周囲一帯を黒い炎の海にしていたプルートの死の黒焔をなのはがレイジングハートの穂先に集束して球形に固めていた。

楯無「おかしいわね。他人が発したスキルの制御を奪い取るレアスキルなんてなのはちやんは持っていなかった筈なんだけど・・・」

重勝「・・・さつき言ってた蒼空から与えられたチカラってやつか？」

なのは「ご明察、これが混沌（カオス）のチカラだよ。理屈を無視し、ありとあらゆる事象を改変・創造する事ができる」

明日香「要するに何でもありの能力って事なの？」

そう問われたなのはレイジングハートの穂先でうねり流動している死の黒焔を徐々に何かの【形】に変化させながら肯定する。

なのは「その通り、理（ことわり）を無視した文字通りの無秩序（カオス）って訳・・・例えば質量保存の法則を無視してペットボトルに入っている1リットルの水の量を琵琶湖くらの規模に増加させたり、等価交換のルールを無視して其処らに転がっている石を宝石に変えたりもできる。そしてこの闇の炎を——」

説明をしている間に黒焔は新たなる己の【形】を完成させていた。それはやがて灰色の毛並みが全身を覆う生命の身体へと再構成されていく。

明日香「こ・・・この生命体は!？」

楯無「も、もしかして!？」

フェイトA「あのとある空の女神の信仰が世に浸透している世界で有名な!？」

つぶらな瞳は外側に下がり、何時でも何所でも困った顔。二足歩行で立つ姿は愛らしく、眼元に上げる両掌に浮き出ているプニプニしてそうな肉球を視界に入れればついプニプニ触れ合いたい衝動に駆られてしまうだろう・・・猫耳と髭がキュートな某ワンダーランドの偉大なるマスコット!その名も——

出雲那の発狂が天守閣中にエコーしているシユールな空気の中で無邪気な男の娘二人はさっそくみつしいと戯れだしている。リオスが丸みのある胴体に抱き付き、夜が大きな丸い頭部によじ登って寛いでいる光景はシヨタコン姉さんの変態的渴望を十分に刺激し鼻から赤い愛を流出させた。

フェイトA「もう我慢できない♥」

アディア「なに昔やってたコーンフレークのCMに出ていたゴリラみたいな事を言っているのさ。それよりも——」

フェイトA「うん、分かっている・・・分かっているから私も混ぜてええー！ーっ!!」

アディア「いや、違うでしょっ!!?」

眼をハートにして山なりに跳躍し、変態姉さんはル○ン脱ぎで下着姿になっていき、桃源郷へトル○ンダイブ！

みつしい「み・・・みつしいいっ!! (怒)」

フェイトA「ぶげらあー！ーっ!!?」

だがマスコットは悪意に敏感だ。何故かいきなりみつしいの足下にちやぶ台が出現し、そのまま怒りの星○徹クラッシュを炸裂させて飛来してきた痴女の鼻血塗れの顔面にちやぶ台がクリーンヒット！そのまま変態は玉座の遥か上部の壁に吹っ飛ばされて場外ホームラン！突き破って壁の向こうに去って行った・・・。

楯無「どうやらあのみつしいは接近してきた不純物を排除する本能を持っていてみたいね」

アディア「・・・なんでだろう？自分の姉が不純物呼ばわりされているのに否定ができない (泣)」

プルート「く・・・くだらんな！せ、世俗を墮落させる娯楽の為にしか、そ、存在する価値しかない偶像生物など!!」

明日香「あれ？気の所為かしら？なんだか冥界の焰があのみつしいに興味津々な視線をチラチラと向けているような・・・」

なのは「にやははー！さて、じゃあお遊びはこのぐらいにしておきましようか」

みつしい「バイバイー！エンジョーイ、みつしいーっ!!」

の脚力をもって床を踏みつけた。その床は大きく陥没し、その分だけ奥の床が盛り上がり、壁となつてノ○ズの飛来を遮る。次々とノ○ズ達が盛り上がった壁に激突して行き、べちやつ！という音を立ててその場の床に落下していった。

幸斗「へっ、どんなもんだ！」

なのは「くっ！OTONAみたいなマネを!!」

重勝「幸斗ナイス！今の内だ、【悪魔の叫び】で——」

楯無「ちよつと待つて、そんな負担がかかるスキルを使う必要は無いわ」

ノ○ズ達が壁に激突して怯んでいる隙に【特性事象の優先化】を攻撃に付加できるスキルを使用しようとした二人を呼び止めて楯無は胸元から何かのリモコンを取り出して何かを操作する。

楯無「ノ○ズに有効なのは聖遺物・・・なら定石通り聖遺物で対抗すればいいのよ！」

明日香「いや、この人何を言っているの？聖遺物なんてどこにも『ブオオオオオオオーーンッ!!』・・・え？何、何処からかエンジン音が？」

その瞬間、ズッカーーーーン！という破碎音と共に聖王の玉座を突き破り、勢いよくサイドカー付きのバイクが飛び出てきた。

なのは「アイエエエエツ!?バイク?バイクナンデーーーーッ!!」

出雲那「【ツェンダップ】だああああーっ!!」

楯無「形成（イエツラー）——【暴風纏う破壊獣（リンググヴィ・ヴァナルガンド）】つてね♪」

重勝「シユ○イバーの聖遺物じゃねーか。こんなもの何所で手に入れたんだよ・・・」

バイクは聖遺物、これ怒りの日の常識・・・派手に登場したツェンダップが行く道を塞いでいたノ○ズ数体を轢き潰し、エンジン音を轟かせて鮮やかなターンを決め、出雲那と明日香の眼前に停車する。

楯無「二人共それに乗つてノ○ズ達に突っ込みなさいー!」

出雲那「アンタ無茶苦茶言うな!?オレ、バイクの運転免許なんか——」

の見えるよ♪」

夜「ん・・・絶唱だね・・・」

楯無「どうやらシグナムちゃん人形には位相差障壁を破壊できる威力がある次元干涉爆弾が搭載されていたみたいね。うふふ、なかなかおもしろいわ♪」

アディア「関心している場合ですか!?そんな爆発に出雲那君と明日香さんが——」

明日香「凍れ、世界よ!セルシウスサンクチュアリツ!!」

夜「あ、炎が凍り付いた・・・」

プルート「フンツ!しぶとさだけは一人前だな」

出雲那「ぜえ、ぜえ・・・酷い目に遭ったぜ・・・」

氷つた炎を掻き分けて全身に火傷を負った出雲那と無傷の明日香が出て来た。爆発したシグナムちゃん人形と同じサイドカーに座っていた出雲那だけが爆発をモロにくらったようだ。世は不条理である。(笑)

楯無「二人共お疲れ、二人の活躍でノ○ズは全滅したわ♪」

出雲那「それはどうも。おかげさまで昔死んだダチと花畑で再会する事ができたぜ(怒)」

明日香「まあ、聖遺物に乗るのは滅多にできない貴重な体験でしたが・・・しかし、それはそうとなのはさんの姿がさつきから見当たりませんね。あの爆発に巻き込まれて吹き飛んだのでしょうか?」

確かに出雲那と明日香がツェンダップに乗り込んだあたりから、今回の騒動の主犯である聖魔王なのはが何時の間にもやら姿を晦ましている。ゆりかご城が衛生軌道上に到達するまで後もう一分も無い。

重勝「周囲に意識を張り巡らせれば直ぐに見つけられると思うが、もう時間がねーな・・・仕方ねえ、最終手段だ。月をブツ壊すぜ!幸斗!!」

幸斗「おうっ!待ってました!そんじゃa——」

なのは「そうはいかないよ!」

プルート「っ!?上かつ!!」

周囲に散らばっている膨大な魔力素が経った今なのはの声が聴こ

えて来た天に吸い寄せられているのを感じ取り、精鋭達は全員一斉に天を見上げる。すると天井に空いた穴の先で再び展開した四機のブラスタースピットが張った酸素を供給する結界の中に入って宇宙空間から精鋭達を見下ろしている聖魔王なのはが、その全てのブラスタースピットとレイジングハートの穂先にその膨大な魔力素を集束して巨大な魔力の塊を形成し、精鋭達にその標準を狙い定めていたのであった。

なのは「もう手加減はしない。此処から全力全開の魔法を撃ち込んでやる！」

出雲那「なっ!? あんなどころから!!?」

楯無「なのはちゃんの代名詞にして最強の魔法《スターライトブレイカー》、しかも出力の限界突破を可能とするStrikerS最強モードの《ブラスター3》を使用した真正銘の全力全開・・・これはさすがに驚いたわね、まさか宇宙空間に飛び出してあんな無理矢理な方法で酸素を補給しながら同時に魔力を集束しているだなんてね」
ジョバンニ『ダメエら何をしている!? 早く制圧しろ! ゆりかご城が月の魔力を吸収し始めたぞっ!!』

怒鳴るように焦燥を凝らしたジョバンニの声が通信結晶を通して精鋭達の耳に響き、なのはの後方にてその存在を大きく主張している満月に意識と視線を向けてみると、なんと月から放出されている白い光がこちらに向かって来ているではないですか。

出雲那「ゲツ、マジだ!? 徐々に二つの月から強大な魔力がゆりかご城に吸い寄せられて来ているのを感じるぜ! ヤバイツ!」

アディア「これはかなり危機的な状況だね。なのはさんが集束している魔力素の量からしてこの天守閣を砲撃で全壊させるのには十分な威力が出せるだろう。その上宇宙空間から狙ってきているからこつちから彼女の砲撃を潰しに接近するのは不可能だろうし——」

リオス「あれく? たっちゃんは宇宙に出られないの?」

楯無「ごめんなさいねリオス君。残念ながら私の霧纏の淑女はISじゃなくて固有霊装(デバイス)なのよ。私はあくまでも伐刀者だからね」

アディア「——そう、だから彼女が撃つて来るスターライトブレイカー以上の火力で押し返すしかないわけなんだけど、タイムリミットがギリギリな現状だと今すぐに二つの月を破壊しなければとても間に合わない。従って確実になのはさんの火力を超えられる幸斗は月を破壊する事に専念してもらわなければならぬから——」

明日香「真田君が月を破壊する事にはもう誰も疑問を抱かないのね・・・」

幸斗「だああああつ、もうまどろっこしいな！だつたらなのはの奴を撃ち落として同時に月もブツ壊せばいいだろうがっ！オレがやらなくつたってなのはの火力に対抗できる奴ならシゲにプルート、夜だつて居るんだしよ!!」

アディア「そうは言つても月はあの穴から見えているの以外にももう一つ・・・破壊しなければならぬ月は二つあるんだ。それを実行するには正直言つて手が足りない」

夜「ん・・・だつたらいいものがある・・・」

そう言つて夜は半眼をキラツと光らせて懐から何か「小さな人型」を取り出し、それを皆の注目を集めるように左掌の上に乗せて上に掲げた。その小さな人型は金色のポニーテールを揺らして「任せろ！」と言つたドヤ顔で手に持つたミニレヴァンティンを翳している・・・そう、この人型の正体は——

スーパーシグナムちゃん人形「マタセタナ！（某蛇の人風）」

出雲那「ま・た・お・ま・え・かああああーっ!!」

夜「ん・・・金髪シグナムは・・・拾つた・・・これを僕が・・・月に飛ばして・・・ぶつける」

明日香「えええ・・・？」

また突拍子の無い事を・・・とツツコミを入れている場合ではない。なのは「何を危機感無くわたしを無視してざわざわしているの!?!もう許さないんだから!」

プルート「貴様ら馬鹿な話をしている場合ではない!もう奴は集束魔法を撃つ体勢に入っているぞ!!」

揉めている内に気が付けばなのははレイジングハートと四つのブ

ラストビットに魔力の集束を完了させてゆりかご城の天守閣に向けて五発のスターライトブレイカーをブツ放つ体勢を万全にした。

なのは「これがわたしの全力全開っ！」

重勝「仕方ねーな。ここは俺とプルートとリオスでなのはのスターライトブレイカーを足止めする、その隙に幸斗と夜は月を……ん？何だ、アレは……」

二つの月を破壊するのにしろ、聖魔王なのはを倒してゆりかご城を制圧するのにして、いい加減にそろそろタイムリミットだ。この危機を打開するのにはもうこれしかないと言った重勝が苦肉の策を切ろうとしたその時、なのはと月の間を横切る一筋の金色が……。

明日香「アレは……流れ星？」

否……あの金色は——

フェイトA「……」

アディア「……姉……さん？」

そう、その正体とは先程みっしいのちゃぶ台返しによって場外ホームランされたフェイトであった。鼻から赤い愛を噴出させてさっきまでの変態的に恍惚としていた雰囲気とは打って変わり、彼女のその表情は怜悧で勇ましく、まるで戦場の武士のような雰囲気を纏いつつ何故か魔大剣（ザンバー）フォームのバルディッシュの上に立ち、流星の如く星空の中を縫うように滑空し、必殺の魔法を放たんとするのはに対し背後からの強襲を狙う。

なのは「スターライトオオ……っ!？」

フェイトA「ハアアアア……っ!!」

金色の魔大剣の上から跳び上がり、勢いよくその柄尻を某仮面ヒーローの必殺キックの如く踏みつけて蹴押し、巨大な切っ先で聖魔王を突き刺さんと高速落下で狙い打つ！

魔大剣戦技——天ノ逆鱗（サキモリ・ストライク）

出雲那「おい技名のルビイイ……っ!!?」

重勝「もはや伏字無しでネタを自重する気もねーな」

明日香「それよりも何故あのフェイトさんは宇宙空間で平然として

いられるのが気になるわ。もしかして空戦の防護服は宇宙空間でも耐えられる性能だつていうの？」

幸斗「いや、変態に不可能は無えんだろ、きつと」

アディア「否定できない……(泣)」

サツと目を逸らす変態の弟……シヨタつ子の為に人間すらも超越してしまう変態な姉の更生をアディアはもう諦めた方がいいのかもしれないと遠い目をする。以前どこかのお悩み相談のハガキコーナーに相談を出した事もあったが、その返答すらも【諦めましょう】だったのだし……。

なのは「甘いよ、舐めないで！」

フェイトA「なっ!？」

そしてシヨタコンSAKIMORIメテオは難なく回避され、フェイトを柄尻に乗せた魔大剣は天守閣の屋根を突き破って玉座の間の床に突き刺さった。

なのは「いくら集束魔法を放出する直前の魔導師は動きが鈍くなるからといって、そんな大雑把な不意打ちが回避できないと思っっているの？たとえ見た目や声がどんなにそっくりでも君はわたしの知っているフェイトちゃんでもSAKIMORIでもない！自分の欲望の事しか考えていない半端者の君が信念を持った人の技を使おうが、このわたしに傷一つ付ける事すらできはしないよ!!」

フェイトA「確かにシヨタつ子を愛する自分の渴望が私の唯一の原動力だ。しかし、たとえ今日折れて死んだとしても、明日に可愛いシヨタつ子達を愛でる為に——フェイト・アストレイが振るうのはバルデイツシュだけではないと知れっ!!」

出雲那「SAKIMORIとフェイト先輩と原作のフェイトに謝れ！」

突き立った魔大剣の柄尻の上で毅然となのはを睨み返すフェイトの両手には何時の間にか漆黒の魔双剣が握られていた。

アディア「——ってそれ僕のスワローテイルじゃないか!?!いつの間にな！」

なのは「人の世界が変態を受け入れる事なんてありはしないよっ

銀河の果てまで届きそうな心の絶叫と共に放たれた五条の魔砲が炎の不死鳥を襲う。不死鳥の纏う炎は桜色の光を喰らい、五つの光柱は不死鳥の翼をむしり取っていく。

フェイトA「うおおおおおーっ!!」

なのは「くううううーっ?!」

数秒間互いの技は拮抗していたが、徐々にフェイトが桜色の魔砲を押し返しだした。なのはの表情に苦悶が浮かぶ。やはり変態は強しとでもいうのか？水飛沫のように桜色の魔力光が弾け、不死鳥の嘴が五つの柱を切り裂いて行く。

フェイトA「もう、少しいいいいーっ!!!」

なのは「負けて、堪るかあああーっ!!!」

そしてフェイトがなのはを近接（クロスレンジ）に捉え、ラストスパートに入ったこの時をもってこの戦いに突如として終止符が打たれるのであった。

シグナムちゃん人形「シヨウブ！シヨウブ！『がしっ！』ピギャー!?!」
プルート「これ以上付き合っていられるか。ふんっ！」

ポイツ☆ピュー！

シグナムちゃん人形「サラダバー！」

なのは&フェイトA「「あゝ」」

どっかーん！たーまやーっ！あまりにもふざけ過ぎた茶番にスカシた厨二病の苛立ちのメーターがとうとう頂点に達した・・・先程ツェンダップが玉座をブチ破って現れた時に飛び散った瓦礫の陰か

リオス「いつけええええええええええーっ!!」

ゴオオオオオオンツ!!と宇宙を揺るがすレベルの轟音が星々を蹂躪していく。やがて波動砲の光が月に到達すると、二つの月は一欠片も残さずに爆散したのだった……。

重勝「ふうく、終わったか……」

夜「ん……大勝利……ブイツー!」

楯無「ほーっほっほっほー!ホラ見てご覧なさい!ザー○ンさん!ド○リアさん!こんなに美しい花火ですよ♪ほーっほっほっほっほっ!!」

明日香「楯無さん、最後までらいネタは自重してくださいi『ひゅー、ドサアツ!』ん?」

なのは&フェイトA「きゅく……(眼がぐるぐる)」

アディア「姉さん!」

出雲那「どうやら二人が爆発に巻き込まれた時に居た空間がゆりかご城の重力磁場圏内だったおかげで二人とも此処に引っ張られて落ちて来られたみたいだな」

リオス「アハハハッ!ゆりかご城も止まったみたいだしこれで一件落着だね♪」

幸斗「グラツツエ!変なミツシヨンだったけれど、楽しかったぜ!!」

プルート「ふん!ようやくケリが着いたか。こんな茶番はもう二度とやらん、終わったのならとつとと此処かr『ウウウーっ!』?!?今度は何事だ!」

やり遂げた達成感の中、突如として視界の景色が赤く染まり、低く唸るようなアラートが鳴り響きだした。

アナウンス『駆動炉全損、及びに聖魔王様の戦闘不能により艦の動力は停止、更には魔力供給目標の月の消滅を確認しました。よって本艦の防衛システムは「フェーズ0」に移行されます——

——間もなく本艦は虚数空間へと破棄されます。搭乗員は速やかに本艦から離艦してください』

精鋭一同「「「「「な・・・なんだってーーーーっ?!」「」」」」」

ここで創作物語に登場する空に浮かぶ建造物のお約束☆ 最後は崩落する運命。(笑)

出雲那「ゲツ!?もう玉座が虚数空間に!!」

明日香「みんな、急いで此処から脱出するわよ!」

アディア「姉さん、しっかり!」

フェイトA「んん・・・うへへ、男の娘とお風呂おく♥ (鼻血だらだら)」

重勝「そいつは弟のお前が背負って行けよ。俺は高町を引き摺って行く」

楯無「引き摺るって・・・もう、シゲ君は。女子はやさしく扱いなさいよねー」

幸斗「やべっ!?虚数空間がこっちに向かって来た!」

シグナム「貴様らあああつ!やっと追い付いたぞ!あの低度でこの流離の烈火の将を倒したと思ったら大間違いd——」

リオス「につげろーーーーっ!」

夜「んー!」

シグナム「「「「「ちよっ!?貴様ら何所に行く!私を無視するなあーーーーっ!!」」」」」

ボロボロになって玉座の間まで追いかけて来た執念深いシグナムの横を通り抜け、精鋭達は迫り来る虚数空間の波に背を向けて崩れゆく聖王のゆりかご城から脱出すべく全速力で城内を走り抜けて行く。

出雲那「クツソ!何でいつもいつもこんなオチばかりなんだよオオオーーーーッ!!」

ジヨバンニ「よくやったな精鋭共！払った犠牲は大きかったが、その悲しみを胸にこれからも精進しろ！解散っ!!」

精鋭達の戦いは終わった・・・しかし、その後の記録にはこの戦いの出来事は記されていない。何者かによる隠蔽工作とも考えられたが何もわからず、事件の真相は当事者達だけが知る都市伝説となったのであった・・・。

キラツ☆

夜「あ・・・シグナム座だ・・・」

これにて、一☆件☆落☆着☆！

【風雲聖王のゆりかご城】 THE END